
令和7年度 福井大学地域創生推進本部
附属創生人材センター及び附属嶺南地域共創センター

活動報告書

目次

1. はじめに	1
2. 組織構成	3
3. シンポジウム	
(1) プログラム	4
(2) 学長挨拶	5
(3) 福井大学の取組発表「社会共創大学を目指して」	6
(4) 地域創生推進本部の取組発表	13
4. シンポジウム取組発表及び各センターの活動紹介	
(1) 創生人材センター	23
① NEXCO班 2025年度活動報告	25
② チーム鯖江 2025年度活動報告	31
③ 敦賀YYTチーム 2025年度活動報告	42
④ チーム福井市 2025年度活動報告	48
⑤ チームBWS 2025年度活動報告	57
⑥ 創生人材センター調査活動報告（国内調査、海外調査）	64
(2) 嶺南地域共創センター	202
① 高解像度カメラと画像解析によるウメ樹の三次元モデル化と樹構造解析	202
② 嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト	212
③ 持続可能な嶺南地域の構築に向けた取組～小浜市上根来集落での取り組みを通じて～	227
④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクト	244

1. はじめに



福井大学理事／副学長
米沢 晋

近年、社会構造や産業構造が急速かつダイナミックに転換する中、全ての専門職には、より高度な知識・技術の修得が求められています。一方、あらゆる分野で分業化や細分化が進行したため、個々の専門職が俯瞰的に課題を解決する能力を失いつつあります。このため、多職種連携能力の育成が、専門職の力量を形成する鍵となっています。

特に地域創生にかかわる専門職では、地域の公共性を念頭に、各ステークホルダーと認識を共有し連携協働できる能力が不可欠であり、専門職として知識・技能を修得できる教育課程と並行して、学部段階から社会共創課題に取り組む教育プログラムが重要となってきています。

また、2040年における福井大学の未来像を具現化するために策定した「福大ビジョン2040」においても、「自治体、企業、他大学等との連携により、地域活性化の中核拠点としての機能・役割の一層の強化に努め、地域における特色ある多様な活動を通じて地域の魅力を引き出し、多面的に社会に貢献する」と謳っており、本学は、県内唯一の地方国立大学として、地域社会との連携を強化することで地域の発展に貢献し、地域の人々と共に歩み、地域課題の解決に向けた研究開発や人材育成を行うことで、地域社会に貢献していくことを目指しています。

このような状況の中で、本学は、地域社会の中で多様な人々や組織が共に新しい価値を創り出すこと、すなわち社会共創を実現することを目指し、地域と大学が共に当事者としての視点を持ち、オープンな関係のもとで共に課題に向き合い、イノベーションを創出していく「福井型地域振興・専門職育成教育プログラム」の構築等を目指し、令和4年4月に地域創生推進本部の中に創生人材センターと嶺南地域共創センターを設置しました。

創生人材センターは、職種を超えて幅広い課題に取り組むための資質や能力を育てるための教育を行っています。具体的には、「多職種連携教育」で様々な職種の知識を統合し、専門教育で学んだ知識やスキルを実生活に活かす「社会共創教育」を提供しています。今年度は、特定の共通科目と専門科目を「社会共創科目」として再編し、学部やキャンパスの枠を超えて学生が受講できるように提案しました。このプログラムの開発を進める過程で、内閣府が主催する地方創生アイデアコンテストで優勝するなどの成果を上げています。来年度からは、学部等連係課程もしくは国際地域学部の組織強化を見据えた、価値創造型プロジェクトベースドラーニング(PBL)の実現を目指していきます。

また、嶺南地域共創センターは、地域創生に資する「社会共創教育」の実現にあたり、福井県嶺南地域を実装の場とするため、嶺南地区の自治体・産業界等と協働し、地域課題を発掘し、その課題を解決するプロジェクトの企画と、大学における専門職養成との連絡調整等の本部機能を果たします。敦賀市と小浜市の各活動拠点（サイト）では、情報の発信や公開セミナーを実施し、地域の中で行うPBL活動のサテライトの役割も担い、令和7年度には20件の嶺南地域の地域課題に取り組むプロジェクトを立ち上げ、地域振興を進めています。嶺南地域共創センターの活動を通じて、嶺南地域における「文化的・健康的に暮らせる生活エリア」をつくる「まちづくりのプレイヤー」の育成等を行い、「都市との近接性を活かしたライフスタイル先進地」の形成に貢献していきます。

本報告書は、主に令和8年1月20日（火）に開催した「福井大学地域創生推進本部附属創生人材センター・附属嶺南地域共創センター共催シンポジウム」の内容を中心にとりまとめたものです。

この報告書が多くの方々の目に触れることによって、大学と地域社会双方の資源やネットワークが活用され、地域の持続的な発展に寄与していくことを期待しております。

また、両センターの活動を通じて、本学が福井県内の地域コミュニティの中心として一層の力を発揮し、来年度以降もさらに活動を進展させるために努力してまいります。

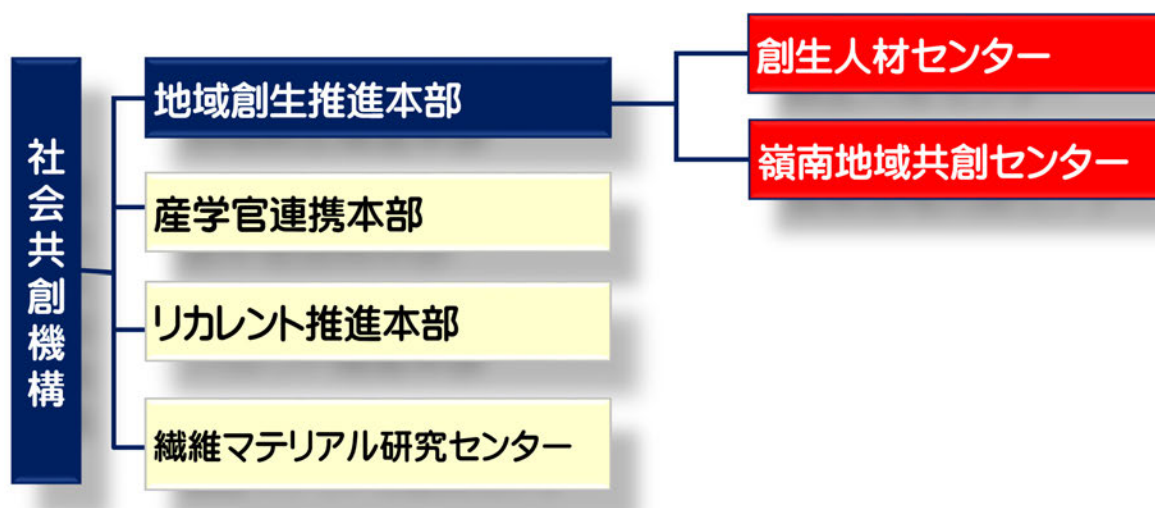
最後になりますが、当該活動に多大なるご協力・ご支援を賜った地域の自治体、関係団体、企業等の皆様方には改めて感謝申し上げます。

2. 組織構成

本学では、令和3年4月に「福大ビジョン2040」を公表し、その中で自治体、企業、他大学等との連携により、地域活性化の中核拠点としての機能・役割の一層の強化に努め、地域における特色ある多様な活動を通じて地域の魅力を引き出し多面的に社会に貢献することをビジョンとして掲げている。これを受け、令和4年4月に社会共創機構（機構長：学長）を新設し、その中に地域創生推進本部、産学官連携本部、リカレント教育推進本部及び繊維マテリアル研究センターを措置することにより、学長をトップとした全学体制で、研究成果の社会還元、地域を志向した教育研究やそれらを通じた社会共創及び学び直しの機会提供を推進している。

地域創生推進本部では、地域の高等教育機関、地方公共団体、産業界及び金融機関等と連携して、地域重視の教育研究の強み、特色を最大限に活かし持続的な社会の発展に寄与するため、地域で必要とされる人材の育成及び地域創生に資する社会共創を支援・推進している。令和4年度には、文部科学省「多職種連携教育による専門職養成と地域創生に資する社会共創教育の実現事業」に採択され、地域創生推進本部に附属創生人材センター及び附属嶺南地域共創センターを創設した。創生人材センターでは、職種の違いを超えて包括的に課題に対処できる資質・能力を培う多職種連携教育の構築に向けて、国内外をフィールドとして人材育成プログラムを開発する。また、嶺南地域共創センターでは、本学教職員・学生が嶺南地域のステークホルダーと協働し、嶺南地域の地域課題に取り組むプロジェクトを推進する。

福井大学社会共創機構 組織図



3. シンポジウムの開催

(1) 令和7年度 福井大学地域創生推進本部 附属創生人材センター・ 附属嶺南地域共創センター 共催シンポジウムの開催について

1. 開催日時・会場

月 日：令和8年1月20日（火）
13：30～16：30
（受付13：00～）



会 場：嶺北会場 福井大学 文京キャンパス アカデミーホール（福井市文京3-9-1）
嶺南会場 リブラ若狭 研修室（若狭町中央1-2）

2. 参加者：県内自治体関係者、学内関係者、プロジェクト担当教員、学生等

3. プログラム

時 間	内 容
13：30～14：10	開会挨拶（福井大学 学長 内木 宏延） 福井大学及び地域創生推進本部の取組発表 1. 「社会共創大学を目指して」 学長 内木 宏延 2. 「地域創生推進本部の取組」 地域創生推進本部 本部長 米沢 晋
14：10～14：15	休憩
14：15～15：15	創生人材センターの取組発表 1. 地域創生活動（嶺南地域）の紹介 NEXCO学生チーム及び担当教員 2. 地域創生活動（鯖江市）の紹介 鯖江市学生チーム及び担当教員 3. 地域創生活動（敦賀市）の紹介 敦賀市学生チーム及び担当教員 4. 地域創生活動（福井市）の紹介 福井市学生チーム及び担当教員 5. 地域創生活動（県全域）の紹介 ブローウィングズ学生チーム及び担当教員
15：15～15：20	休憩
15：20～16：20	嶺南地域共創センターの取組発表 1. 「高解像度カメラと画像解析によるウメ樹の三次元モデル化と樹構造解析」若狭町 工学系部門 知能システム工学講座 講師 築地原 里樹 2. 「嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト」嶺南地域 教育・人文社会系部門教員養成領域 教師教育講座 教授 清川 亨 3. 「持続可能な嶺南地域の構築に向けた取組～小浜市上根来集落での取り組み を通じて～」小浜市 地域創生推進本部 特命助教 山形 亮太
16：20～16：25	各市町から福井大学へ！「プロジェクトへの期待」
16：25～16：30	閉会挨拶（福井大学 理事/副学長 米沢 晋）

(2) 学長挨拶



福井大学長
内木 宏延

本日は、「福井大学地域創生推進本部附属の「創生人材センター」並びに「嶺南地域共創センター」による共催シンポジウムにご来場いただき、誠にありがとうございます。本学を代表いたしまして、厚くお礼申し上げます。

2024年3月に北陸新幹線の金沢・敦賀間が開業してから早いもので1年半以上の月日が流れました。この間、県内各地では交流人口が増加し、観光やビジネス面で新たな賑わいが生まれております。

現在、福井県は「新幹線効果」を一過性のものに終わらせないための、極めて重要な局面を迎えております。各自治体におかれましては、二次交通の利便性向上や、デジタル技術を活用した観光振興、さらには嶺北・嶺南を繋ぐ広域的な連携といった「福井づくり」にご尽力されております。こうしたリピーター獲得に向けた「選ばれる福井づくり」にご尽力されている各自治体の皆様の熱意に対し、改めて深く敬意を表する次第です。

こうした社会変革の中、本学では、令和4年度に、地域創生推進本部の附属施設として「創生人材センター」並びに「嶺南地域共創センター」を設置いたしました。以来、地域振興と課題解決を目的とした「社会共創教育」の実現等、様々な取り組みを推進しております。

その具体的な成果として、創生人材センターでは、昨年度、あわら市を対象とした調査をまとめた学生チームが、内閣府主催の「地方創生・政策アイデアコンテスト」において「近畿経済産業局長賞」と4つのスポンサー賞を受賞いたしました。学生が地域に深く入り込み、客観的なデータと柔軟な発想で提案を行う活動は、着実に実を結びつつあります。

また、嶺南地域共創センターにおきましては、嶺南地域特有の課題解決や価値創造を目指し、今年度は21件に及ぶプロジェクトを展開しております。多岐にわたる分野で地域の方々と知恵を絞り、確かな成果を積み上げているところです。

これらの活動は、フィールドワークを受け入れ、学生を温かく導いてくださる地域の皆様、そして日々のプロジェクトにご協力いただいている自治体関係者の皆様の深いご理解があってこそのもので、多大なるお力添えをいただいておりますことに、心より感謝申し上げます。

本日のシンポジウムは、両センターの今年度の活動をご報告し、本学へのご理解を深めていただくとともに、皆様方と「協働」を通じて地域の持続的な発展に寄与することを目的としております。両センターの活動を通じて、今後も本学が福井県内の地域コミュニティの中心として一層の力を発揮できるよう努めてまいります。

本日のシンポジウムにご参加いただいた皆様にとりまして、有意義なものとなりますことを祈念いたしまして、開会の挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしく願いいたします。

(3) 福井大学の取組発表
「社会共創大学を目指して」



福井大学長
内木 宏延

講演資料

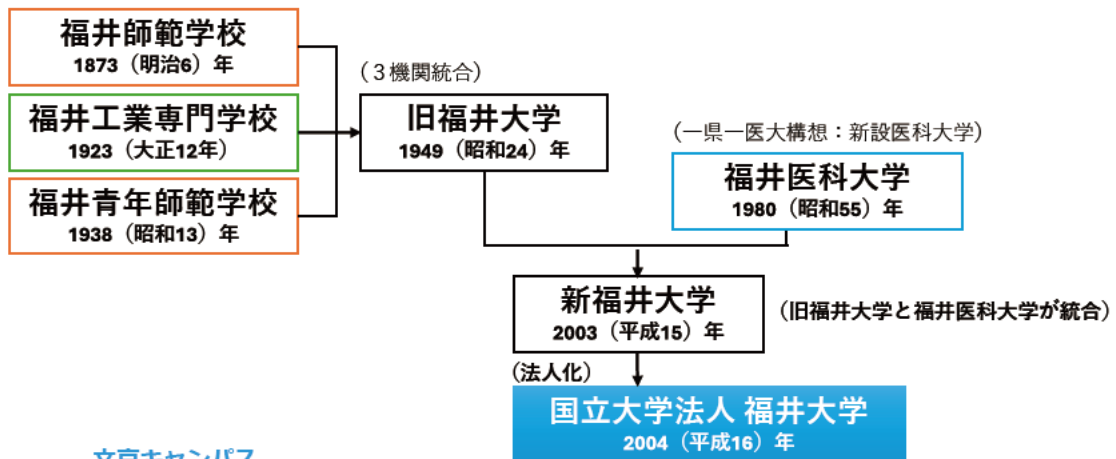




福井大学の沿革と組織統合

2

福井大学の沿革と組織統合の流れ



文京キャンパス

教育学部
工学部
国際地域学部



松岡キャンパス

医学部



敦賀キャンパス
附属国際原子力
工学研究所



福井市二の宮地区
附属幼稚園・附属義務教育学校
福井市八島地区
附属特別委支援学校



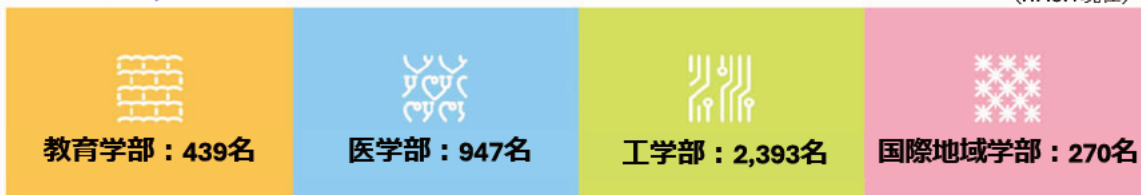
3

教育組織・学生数（学部・大学院計 5,041名）

4学部4研究科
約5,000名の知の集積

【学部：4,049名】

(R7.5.1現在)



- 学校教育課程 439名
- 医学科 693名
- 看護学科 254名
- 機械システム工学科 724名
- 電気電子情報工学科 583名
- 建築・都市環境工学科 289名
- 物質・生命化学科 565名
- 応用物理学科 232名
- 国際地域学科 270名

【大学院：992名】 ※博士前期課程649名、博士後期課程73名、博士課程133名、専門職学位課程137名



- 【専門職学位課程】
- 教職開発専攻 126名
- 【博士前期課程】
- 看護学専攻 26名
- 【博士後期課程】
- 看護学専攻 4名
- 【博士課程】
- 統合先進医学専攻 133名
- 【博士前期課程：623名】
- 産業創成工学専攻 200名
- 安全社会基盤工学専攻 203名
- 知識社会基盤工学専攻 220名
- 【博士後期課程】
- 総合創生工学専攻 69名
- 【専門職学位課程】
- 国際地域マネジメント専攻 11名
- 4



社会共創大学

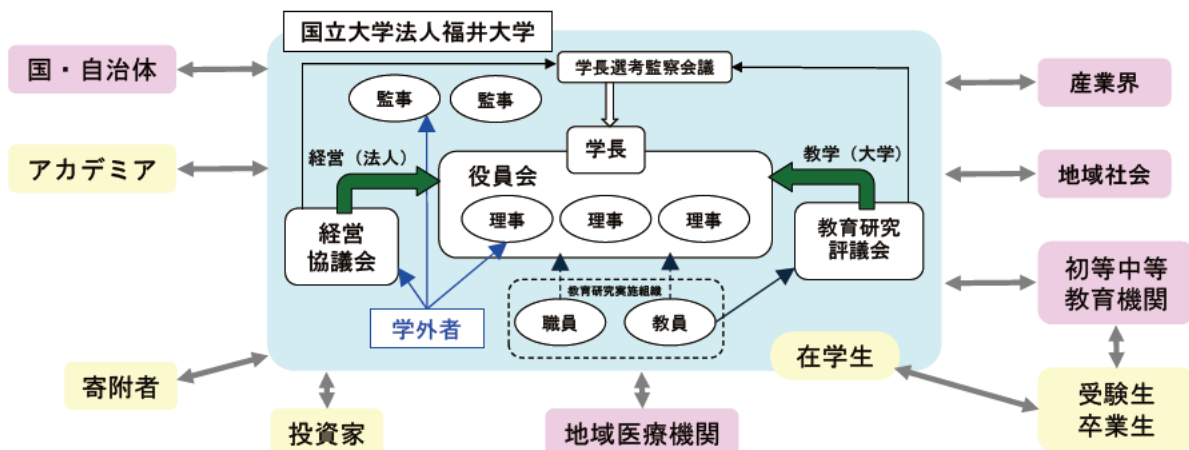
なぜ今「社会共創」なのか

- ・ 社会背景の変化：
人口減少、地域課題の複雑化（VUCAの時代）
- ・ 大学の使命の変遷：
「教育」「研究」に加え、第3の使命としての
「社会貢献」から、さらに踏み込んだ「社会共創」
への進化
→地域を第2のキャンパス（教育の場）とする。
- ・ 本学のビジョン（福大ビジョン2040）：
地域とともに歩み、地域の未来をデザイン
（卓越高度専門職業人の育成、地域共創 etc）

6

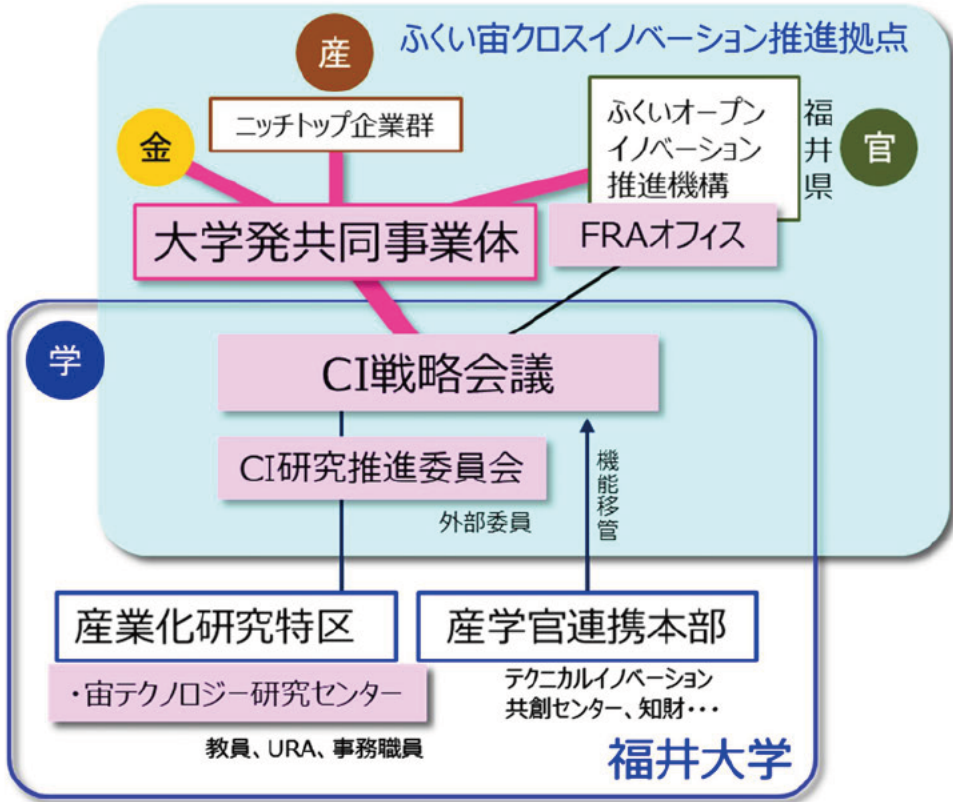
“社会共創大学” 宣言

スローガン「社会を共に創る大学になります」



7

社会実装・イノベーションによる『社会共創』の加速

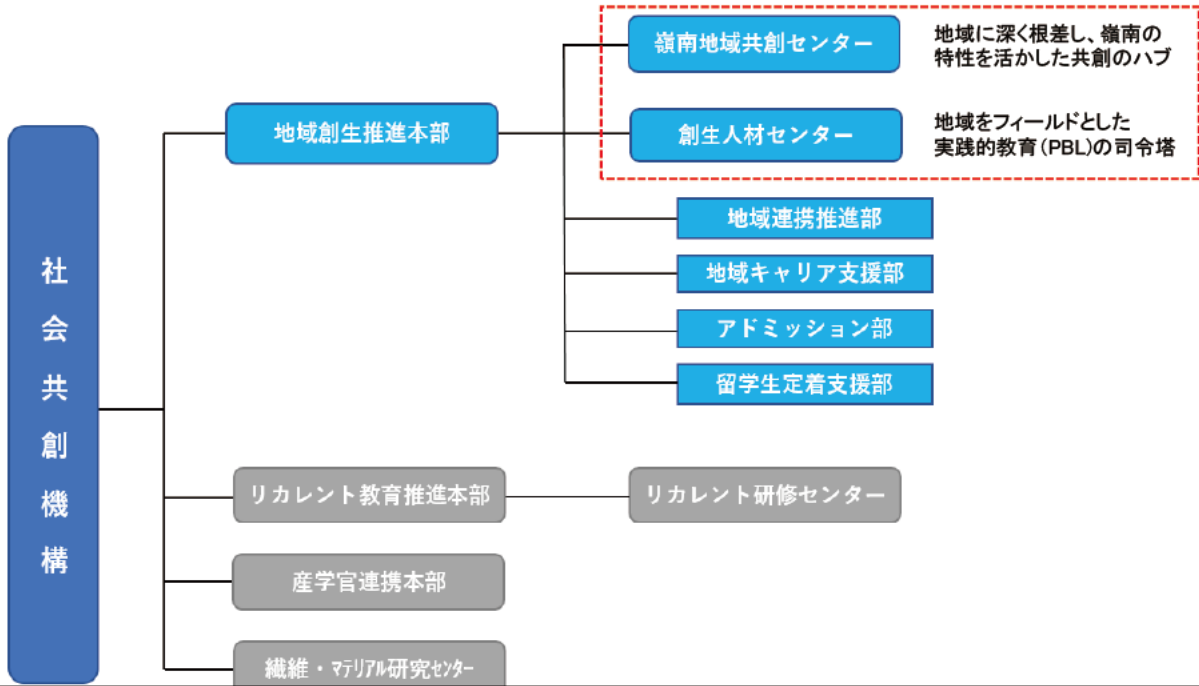


8

社会共創を牽引する推進体制

地域創生推進本部 組織体制

2022（令和4）年4月1日設置



“社会共創教育”の推進

- ・ 本学の使命：学外の様々なステークホルダーと緊密に連携し、地域・社会の一員として教育研究活動を実施し、その成果を地域や社会に役立てる。
- ・ 本学の教育ミッション：『卓越高度専門職業人の育成』
- ・ それぞれの学部で学ぶ専門知識を実際の世の中で生かすには、生かすためのスキルを同時に学ぶことが必要
- ・ 4学部の間（中心）に位置づけ、4学部の学生が一堂に会する環境を作り、データサイエンスやデザイン思考、多職種連携等を教育
- ・ 学外の多様なステークホルダー（企業、医療施設、小中学校・高等学校、地方自治体等）と協働し、社会そのものを教育の場とすることにより、学びのエコ・システム（生態系）を確立
- ・ これを基盤に高大連携、理系人材・リケジョの育成、リカレント教育等を推進

10

2040年の福井と大学の姿：社会共創が創り出す未来像

【地域の姿】課題解決の先進モデル

- ・ 福井発のイノベーション：
独自の資源（DX/エネルギー/文化）による価値創出
- ・ 若者が「選ぶ」地域：
挑戦の機会があふれ、次世代が定着する街

【大学の姿】境界のない「知のハブ」

- ・ 地域全体がキャンパス：
フィールドワークと社会実装が日常の学び
- ・ 全世代の学びの拠点：
学生・社会人・シニアが交差するリスキリング拠点推進

【共創の成果】持続可能なエコシステム

- ・ 創生人材の牽引：
本学卒業生が地域リーダーとして変革を主導
- ・ 信頼の循環：
地域と大学がパートナーとして高め合う関係性

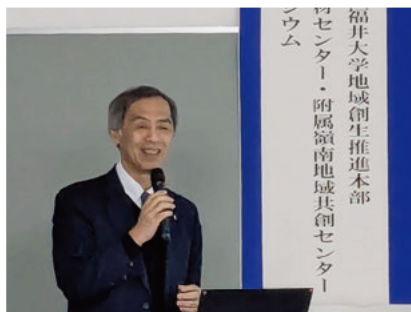
ご清聴ありがとうございました。



平成元年（1989年）の工学系1号館

(4) 地域創生推進本部の取組発表

地域創生推進本部の取組～大学と組むと何かいいことがあるのか?～



福井大学地域創生推進本部長
米沢 晋

講演資料

国立大学法人 福井大学

創生人材センター・嶺南地域共創センター共催シンポジウム
令和8年1月20日

地域創生推進本部の取組

- 大学と組むと何かいいことがあるのか? -



University of Fukui 

福井大学 理事/副学長 米沢 晋
(地域創生推進本部長)

1

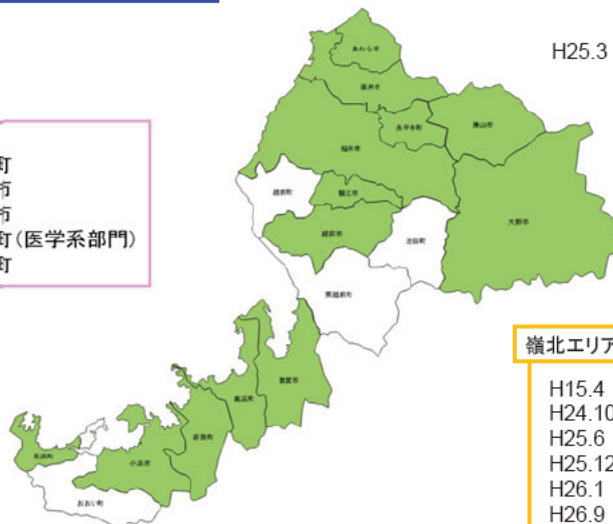
福井県内自治体との協定

※ 令和8年1月現在

H25.3 福井県

嶺南エリア

H16.7 美浜町
H29.3 小浜市
H29.9 敦賀市
R3.6 高浜町(医学系部門)
R4.5 若狭町



嶺北エリア

H15.4 大野市
H24.10 福井市
H25.6 勝山市
H25.12 鯖江市
H26.1 永平寺町
H26.9 越前市
H27.3 坂井市
H27.7 あわら市

2

本日の内容

☀️ 大学内での位置づけ

日頃よりの多様、多大なご支援に心から
感謝いたします 社会を共創する大学のカタチ

☀️ ぐるっと回って先頭に

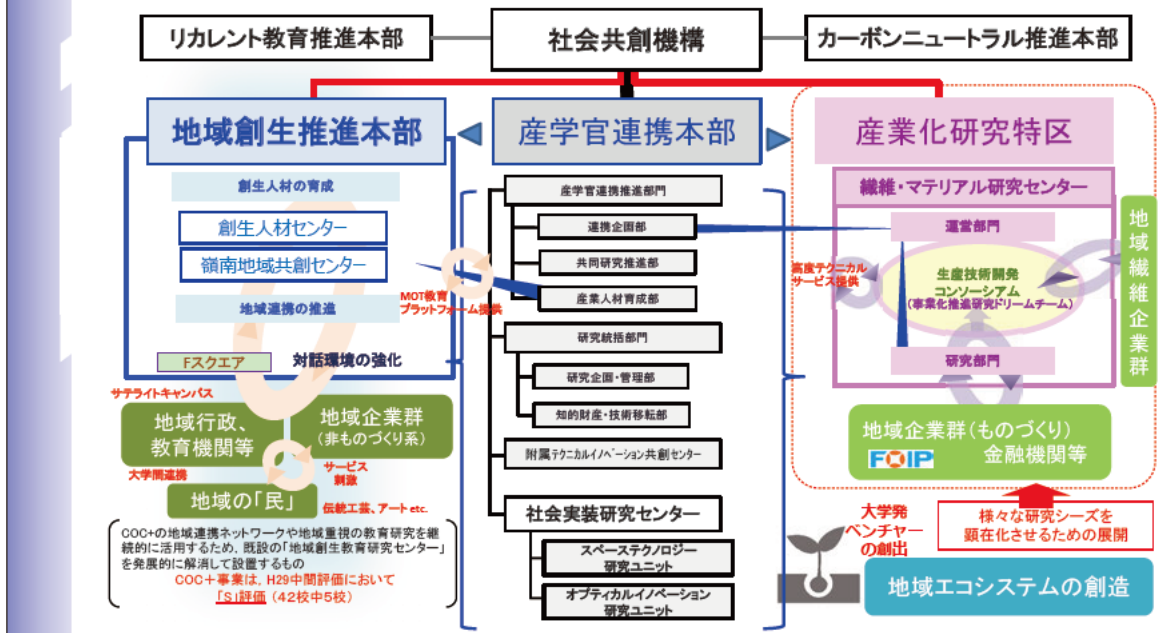
将来ビジョン、社会課題、持続化、価値創造
コトづくりのアイデア、モチベーション

☀️ つなぐための共用

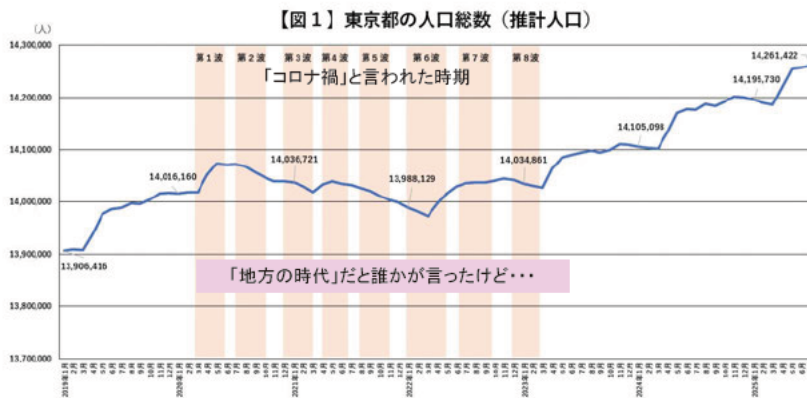
使えるものはみんなで一緒に
ツールも人材も

3

社会共創の右腕となる地域創生活動（組織）



現状認識から（東京一極集中からみる状況の推移）



出典：東京都「東京都の人口（推計）」（毎月1日現在の推計）をもとに作成

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000239.000020953.html>

自然減は進行、社会増が加速？

ではどうするか？

短期補助金対応やイベント型連携で、
どーんと商業ビルを建てれば・・・
観光農園を作れば・・・
地域限定電子マネーを作れば・・・
という単純な話ではない。

- ✓ 社会システムの再設計
- ✓ 人材・産業・誇りの循環創出
- ✓ 次世代に引き継がれる
“地域の知のインフラ”構築



「なんとかしてくれ」ではなく
「なんとかしよう」

例えば)

地域産業製品を掲げるブランド戦略の推進、
国内外にPRする。(関係人口や交流人口、定
住人口を増加戦略的に推進)。

→ 全員で動く必要 → そして大学の活用

6

もう少し具体的に (すべてではないですが・・・)

課題

- ・若年層流出と高齢化の同時進行
- ・医療・介護・教育・交通の維持困難
- ・技術継承と人材不足の同時発生
- ・高等教育→大都市就職の一方流動
- ・博士・高度専門人材の受け皿不足
- ・労働力・担い手・消費主体の縮小
- ・下請け・低付加価値構造からの脱却
- ・グローバル市場へのアクセス不足
- ・地域に「成長できるキャリア像」が見えない

等々

- 人口減少・超高齢社会への適応と再設計
- 地域産業の構造転換 (量から価値へ)
- 人材循環の断絶解消 (育てても残らない問題を何とかしたい)

7

医・工・教・情報・社会科学を総動員して、
「人口が減る前提」で社会システムを再設計

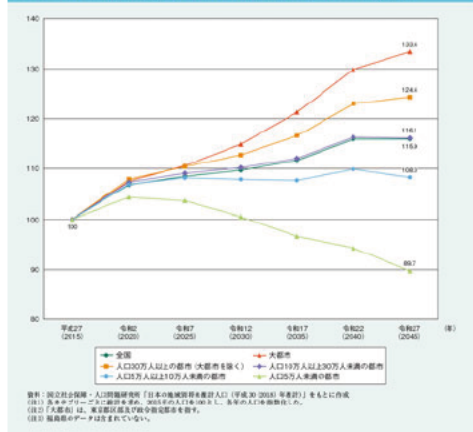
例えば、
「人口減少適応型社会モデル」を地域に実装する実験都市
・スマート医療、遠隔教育、MaaS、集落再編の科学的検証



ロボット麻酔システムの概要図
(<https://www.u-fukui.ac.jp/fukupre/108245/>)



図1-1-11 都市規模別に見た65歳以上人口指数（平成27（2015）年=100）の推移

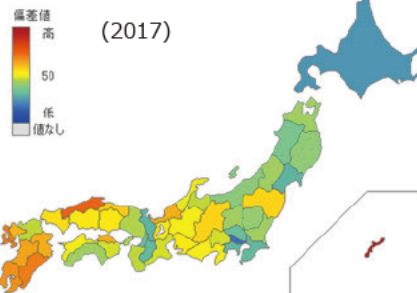


https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/html/zenbun/s1_1_4.html

今後、高齢者数が増えるのは都市部
(数であって率ではないことには注意が必要)

都道府県別合計特殊出生率(2023)

沖縄県	1.6	滋賀県	1.38	愛知県	1.29	全国	1.2
長崎県	1.49	徳島県	1.36	三重県	1.29	栃木県	1.19
宮崎県	1.49	富山県	1.35	兵庫県	1.29	大阪府	1.19
鹿児島県	1.48	石川県	1.34	福岡県	1.26	岩手県	1.16
熊本県	1.47	長野県	1.34	群馬県	1.25	埼玉県	1.14
福井県	1.46	和歌山県	1.33	静岡県	1.25	千葉県	1.14
島根県	1.46	広島県	1.33	青森県	1.23	神奈川県	1.13
佐賀県	1.46	山梨県	1.32	新潟県	1.23	京都府	1.11
鳥取県	1.44	岡山県	1.32	山形県	1.22	秋田県	1.1
山口県	1.4	岐阜県	1.31	茨城県	1.22	宮城県	1.07
香川県	1.4	愛媛県	1.31	福島県	1.21	北海道	1.06
大分県	1.39	高知県	1.3	奈良県	1.21	東京都	0.99



技術×デザイン×社会実装の橋渡しにより 産業を生み、持続的にアップグレード

例えば、
サーキュラーエコノミー、GX、宇宙・医療・先端材料等の活用・
融合により、世界市場対応型知識産業を地域に生み出す



(<https://zerocarbon2040.ad.u-fukui.ac.jp/division/nr/>)



福井県民衛星「すいせん」が宇宙から撮影した最初の写真
https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/chisangi/fukusat/suisen-firstlight_d/fil/FirstLight.pdf

県民衛星「すいせん」の画像を用いた
足羽山放置竹林分布の特定

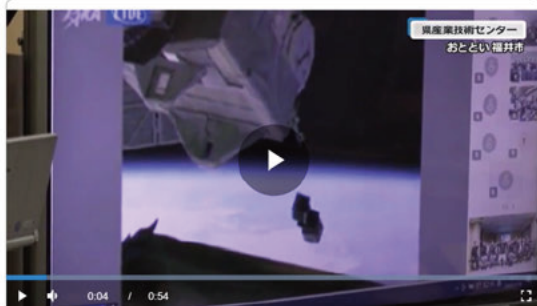


<https://www.u-fukui.ac.jp/news/88880/>

10

「夢」打ち上げました！

NEW 県内のニュース

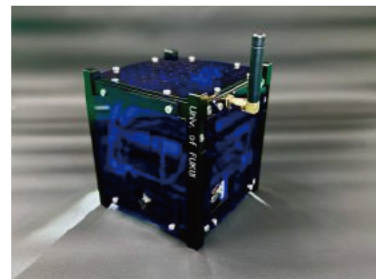


「超小型人工衛星」が宇宙空間へ 福井大学やセーレンなどが共同開発 福井の技術が宇宙開発の一翼担う

©2024.12.11 11:55

福井大学と関西大学などが共同で開発した人工衛星が、このほど、国際宇宙ステーションから宇宙空間へ放出されました。

国際宇宙ステーションから放出されたのは、福井大学や関西大学、宇宙ベンチャー企業などが共同で開発した超小型人工衛星「DENDEN-01」です。



宇宙空間の急激な温度変化を緩和し、安定な電力供給を可能とする「固-固相転移型蓄熱蓄熱材(SSPCM)」を活用した関西大学開発の電源温度安定化デバイスはじめ、今後の超小型衛星開発に貢献する複数のエネルギー技術の軌道上実証を行う

11

宙テクノロジー研究センター

随時情報交換、研究実施、研究シーズ探索、マッチング支援、市場ニーズ情報共有、研究推進経費管理、機器設備維持管理 etc.

人工衛星設計研究プロジェクト

小型人工衛星設計技術開発、試作・特性評価技術開発、通信制御技術開発、製造生産技術開発と人材育成

宙ライフ・医学研究プロジェクト

宇宙医学（微重力や放射線、閉鎖空間等が生体を与える影響の解明）に関する研究コミュニティの形成と健康維持技術の開発

極限環境材料研究プロジェクト

軽量宇宙線（放射線）遮蔽材、スマートテキスタイル、耐熱・耐寒機能化繊維材料、資源循環システムの開発

宙活用デバイス研究プロジェクト

精密遠隔監視・制御技術開発、人工衛星用エネルギーマネジメントシステム開発、ロケット関連研究、耐宇宙線半導体デバイス開発研究、帰還システム開発

宙クロス教育研究プロジェクト

高大連携、初等中等教育連携、市民連携、STEAM教育、教育技法研究

梅関連プロジェクト（北陸技術交流テクノフェア2025で展示）

- 「梅の枝 × 越前和紙」 梅のせん定枝のサステナブルな利用法の提案（玉水奨真）
- 梅木剪定技術継承のためのMRシステムの開発（安藤亮太、渡邊拳斗）
～成長シミュレーション可能なVRの開発～
- カメラ・モニターを搭載した高所梅木剪定鉋の開発（高木駿磨）



梅鼠色
(うめねずみいろ)

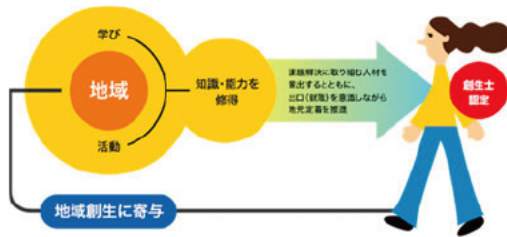


機能

- 1: カメラモニター搭載による高所の視認性UP
- 2: ショルダーハーネスによるアシスト機構

多世代にわたり地域課題と関わる仕組みづくり により、教育と雇用の非連続性を解消

例えば、
母港型の学びを実現や博士人材を含む地域実装型キャリア創出
（ふくい地域創生士の取組）強化



地域企業の人事担当との懇談会
(<https://www.u-fukui.ac.jp/news/102670/>)

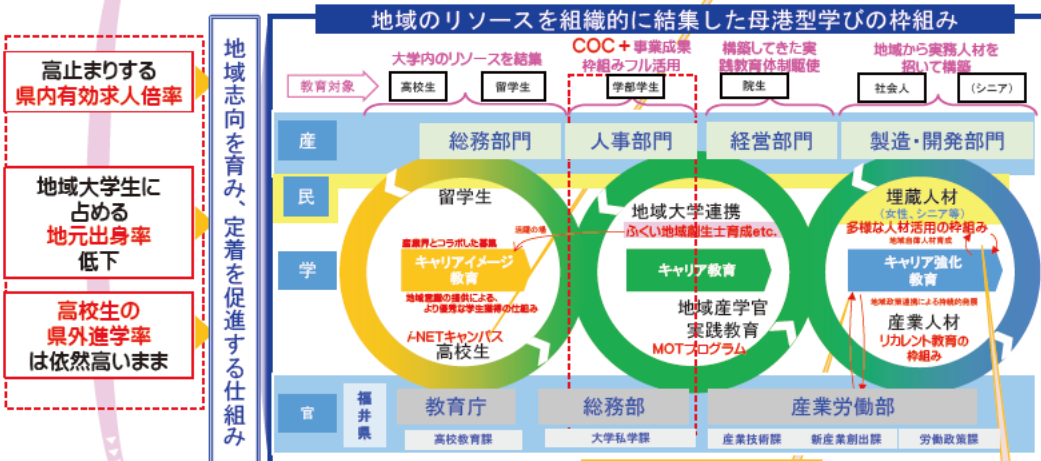
雰囲気の良い会社って？

つながっていたい にんげんだもの

これまでの地域創生や産学官連携活動を通じて、大学の存在感が増し、地域を超えて高評価を得ることで、地域外からの学生は増加！
⇒かえって**定着が阻害**される結果に…

・ビジネスネットワーク拡大促進
行政と連携して活動を行い、地域企業との触れ合い経験を学生生活に取り入れるためのプログラム等の企画・運営、卒業後も就職先企業と地域企業とのビジネスネットワークの結節点となっていける人材育成

産業人材ネットワークの構築

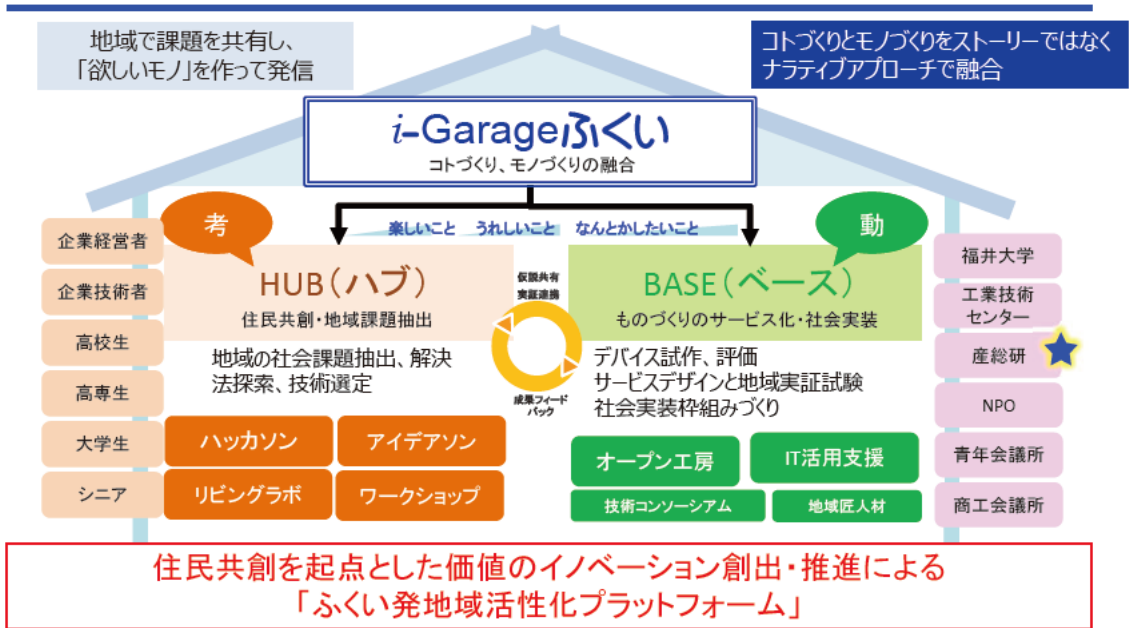


地域の魅力に基づきキャリアイメージについて、企業人が実感とともに伝えることで、より優秀な高校生への選抜を回るとともに、生涯を通して**キャリアを持続的に強化できる「学び」**の環境構築により、世代間の「共感」による多様な人材の地域定着が可能になる。

・行政巻き込み対話促進
行政と連携して活動を行い、地域企業ニーズを踏まえたリカレント教育 & 就職支援
産業人材の高度化と地域定着

・草の根巻き込み対話促進
地域の人々との協働によるPBL教育を行い、大学連携共通講義や公開講座運営管理
地域に潜在する多様な人材の発掘

価値創造プロセスとしての産学官連携活動（挑戦）



16

イノベーション工房 新しいツールを一緒に使おう！



3Dプリンター

←フィラメント加熱式
↓光造形式



レーザーカッター



17

ニーズを研究源流に届ける工夫(コンシェルジュの配置)

090-1635-1000

conciierge@hisac.u-fukui.ac.jp

お困りごとの解決につながる大学の資源をご提供いたします。



コンシェルジュ をご活用ください！

4. シンポジウム取組発表及び各センターの活動紹介

(1) 創生人材センター



福井大学地域創生推進本部
附属創生人材センター長
教授 竹本 拓治

2025年度 附属創生人材センター調査活動報告について

本報告書は、2025年度に附属創生人材センターが実施したバンコク、小浜市、コンケン、敦賀の4地域における調査活動の成果をまとめたものである。本年度の取り組みは、単なる調査の積み重ねではなく、これまで本センターが推進してきた「価値創出型PBL」が、「一つの教育・研究モデルとして“次の段階へと進化した一年”」であったと位置づけられる。

振り返れば、2022年度に価値創出型PBLの教育モデルの可能性調査からスタートし、様々な試行を重ねつつ、価値創出型PBLの基盤が2023年度に形を成し始めた。そして2024年度はその基盤を運用レベルに引き上げた。本年度を迎えるまでの3年間は、学生が現地に入り、観察し、仮説を立て、提案に至るという一連のプロセスを経験する中で、「理論と現場を往復する学び」の有効性が確認された。しかしその段階では、まだ多くの提案が「良いアイデア」に留まり、地域や社会の意思決定とどのように接続されるかという点においては、模索の途上であったといえる。

これに対し、2025年度は、その問いに対する一つの明確な答えが見え始めた年であった。

まず、バンコクでの調査においては、サービスやビジネス創出の現場に直接触れることで、「価値とは何か」「人はなぜ行動するのか」という問いが、抽象ではなく具体的な設計対象として捉えられるようになった。続く小浜市の調査では、観光客の行動や消費の実態をデータとして捉えることで、「人を呼ぶ」こと以上に「人の行動をどう設計するか」が地域政策の本質であることが浮かび上がった。実際に、小浜市を訪れる観光客の多くが里海エリアに集中しながらも、まちエリアへの回遊が十分に生まれていない構造が確認され、その要因が「魅力の不足」ではなく「導線設計の不足」にあるという理解に至ったことは象徴的である。さらにコンケンでの調査では、地域資源や文化の価値がどのように観光やビジネスへと転換されるのかを国際比較の中で捉え、敦賀での調査では、ワーケーションや夜間観光といったテーマを通じて、「認知」「動機」「体験」という行動変容の構造が明確に整理されていった。これら4つの調査は一見異なるテーマを扱っているように見えるが、実際には、

「人の行動をいかに設計するか」という一つの問いに収束している。

そして本年度の最大の成果は、この問いに対し、学生たちが「仮説と結果のズレ」を出発点として、現実の構造を捉え直し、そこから政策提言へと至るプロセスを実現できた点にある。例えば、小浜市調査においては、「体験は満足度を高めるはず」という仮説に対し有意差が確認されない一方で、消費額との関係性が示唆されるなど、直感とは異なる結果が得られた。このようなズレは従来であれば失敗と捉えられがちであったが、本年度はむしろ、

「ズレこそが、現実を理解する入口である」

という認識へと転換されている。この変化こそが、2024年度から2025年度への質的飛躍であったと考えている。

さらに、本年度のもう一つの重要な進化は、教員育成の視点がPBLの中に組み込まれた点である。これまでPBLは学生の成長に焦点が当てられてきたが、実践を重ねる中で、教員の関わり方そのものが学習の質を大きく左右することが明らかになってきた。そのため教員調査では、従来の「1教員=1チーム担当」という構造を見直し、教員が複数チームを巡回しながら関わる「巡回型 (Floating Faculty Model)」を導入した。

この試みは、学生にとっては「正解を求める学習」から「自ら問いを立てる学習」への転換を促し、教員にとっては「教える」から「思考を支える」への役割変化をもたらした。結果として、PBLは単なる教育手法ではなく、教員自身が学び続けるための実践の場として機能し始めている。この点は、2028年度に工学部に設置予定の経営・技術革新工学コースにおける教育体制とも密接に関係しており、本センターの取り組みが新たな工学教育モデルの基盤となる可能性を示している。

以上のように、2025年度の調査活動は、
「価値を見つける」段階から「価値を設計する」段階へ
「提案する学び」から「意思決定に接続する学び」へ
「学生中心のPBL」から「教員も成長するPBL」へ
と、多層的な進化を遂げた一年であった。

今後は、本年度に得られた知見を基に、定量分析の高度化や政策実装との接続を進めるとともに、教員育成を含めたPBLの体系化を図ることで、教育・研究・社会貢献を統合した本センターのモデルをさらに発展させていきたい。本報告書が、その一歩となることを期待する。

① 嶺南地域への誘客戦略と高速道路利用の拡大



創生人材センター長
教授 竹本 拓治

講演資料

Takemoto Lab × **NEXCO**
中日本

NEXCO班

2025年度活動報告

福井大学大学院 竹本研究室 指導教員
安倍 誠明 竹本 拓治
森 泰
山口 恭平 共同研究企業
NEXCO中日本株式会社

2026年1月20日

01 背景

研究目的

嶺南地域への誘客戦略と 高速道路利用の拡大



舞鶴若狭道について

兵庫県三木市から福井県敦賀市までを結ぶ延長約162kmの高速道路。
「舞鶴道」とも呼ばれ、福井県内の小浜市や敦賀市を經由する。



02 活動の流れ

アンケートの実施

「どこに・誰に・どのようなナッジ」が効果的かを明らかにするためのデータを収集

アンケートの分析

クロス分析して特徴を把握
詳細な旅行意識については共分散構造分析で深掘りしペルソナを特定

施策の検討

ワークショップで出たアイデアを評価し施策を選定

施策の実施

選定した施策を提案し、実装を目指す。

03 アンケート概要

調査目的

- ・観光意欲を明らかにし、嶺南への観光客誘致を図る
- ・舞鶴若狹自動車道の利用促進の施策のペルソナを設定する

日程・場所

日時：2025年1月24日(土)11:00～13:30、25日(日)10:00～12:30
 場所：養老SA・下り(岐阜県養老郡)
 参加者：経営・技術革新工学研究室 5名



調査・分析方法 (N=245)

- ・養老SA(下り) を利用した方にアンケートを実施(対面式調査)
- ・アンケートデータを定量・定性的に分析し、小浜への観光客のペルソナを特定

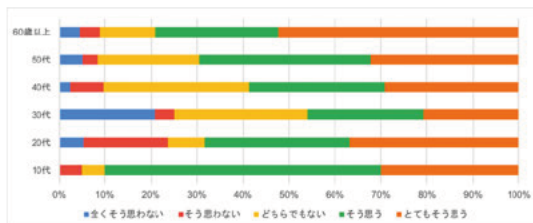


04 分析結果①

💡 カイ二乗検定とは

クロス集計表で表される、連続していないデータの集まりについての検定であり、2つの変数の集計結果の数値の差に関連があるか、ないかを検定する手法

宿泊施設を重視する × 年齢



💡 welchのt検定とは

2つの母集団が等しい平均を持つという仮定を検定するために用いられ、2標本の母分散が等しいとは限らない場合に適用する

旅行において、景色を重視する

	東海地方	その他
平均	4.248731	3.454545
分散	0.861287	1.502537
観測数	197	44
仮説平均との差異	0	
自由度	54	
t	3.932127	
P(T<=t) 片側	0.000121	
t境界値 片側	1.673555	
P(T<=t) 両側	0.000242	
t境界値 両側	2.004879	

F検定の結果より、p値=0.002
 よって、等分散ではないと言える

05

分析結果まとめ①

(N=245)

カイ二乗検定

若年層：低コストでの旅行を好み、アクティビティを重視する傾向
 家族・夫婦層：宿泊施設など快適さを重視し、事前の準備など計画的な旅行を好む傾向
 シニア層：支出に余裕があり、食事や宿泊においても高付加価値の観光体験を求める傾向

Welchのt検定（東海地方の特徴）

- ・観光地において景色を重要視する
- ・旅行の頻度が高い
- ・日常生活と旅行時で行動の変化が少ない

嶺南のイメージ（自由記述）

嶺南のイメージについて、嶺北の内容に関する回答や嶺南を通過点と捉えた回答がいくつか見られた。よって観光地としての認知度を高める必要があると分かった。

06

分析結果②

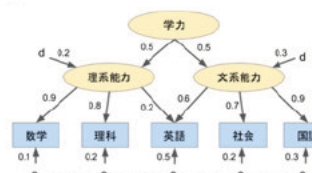


共分散構造分析(SEM)とは

いくつかの項目がどのように関係があるかを検証し、その関係の強さを明らかにする、分析手法の1つである。

参考例「学力はどの要素がどの程度影響しているか？」について調べたSEM分析

パス図

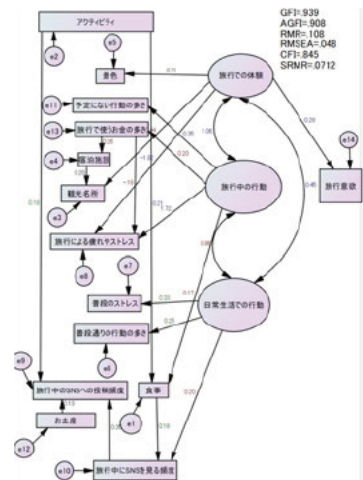


モデルの説明

このモデルは「学力は理系能力や文系能力に影響するだろう」「理系能力は数学や理科、英語の点数に影響するだろう」「文系能力は国語と社会、英語の点数に影響するだろう」という仮説に基づいて作られており、eやdという文字は誤差（観測しきれない要素）を示している

モデルの考察

・英語には理系能力という潜在変数から0.2、文系能力という潜在変数から0.6という係数が伸びている
 →英語の点数を上げるには理系能力よりも文系能力のアップが重要



本研究で作成したパス図

07

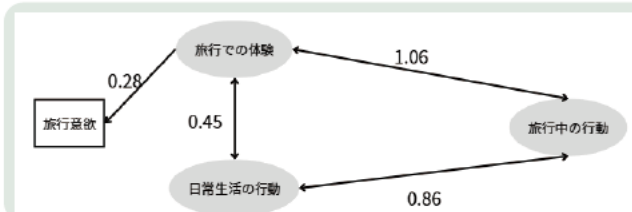
分析結果まとめ②

(N=245)

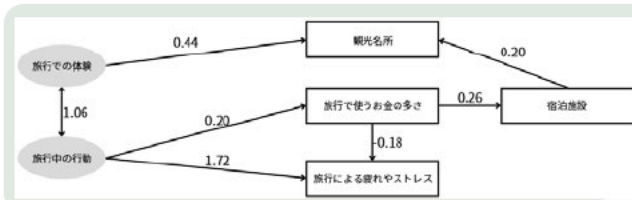
潜在変数

観測変数

SEM分析結果まとめ



- 行動によって新たな体験が生まれ、その体験が次の行動への意欲を高めるという良い循環が生まれる。
- 体験の価値は、観光地の魅力を高める重要な要素である。



- 適度な支出は、旅行全体の満足度や快適さの向上に寄与する。

08

施策の検討①

「現代社会とビジネス」の講義でワークショップ

○課題

- 舞鶴若狭自動車道の利用が少ない
- 嶺南のイメージを持たれてない

これらの課題を解決するアイデアワークショップを実施した



「NEXCO中日本」とのミーティング

アイデアをブラッシュアップし、各アイデアをピュア・コンセプト・エバリュエーションによって実現性や地域連携などの複数項目で比較した

	1,2,8	4	8	12
アソシエーション	5	5	+	+
インパクト・効果性	5	5	5	+
高度技術的価値	5	5	+	+
実現可能性	5	-	-	-
無関係	3	-	3	-
ターゲット適合度	5	5	5	+
地域連携	5	+	-	5



09

施策の検討②



ピュー・コンセプト・エバリュエーションとは

アイデアの1つを基準（S）として他の案を順に一对比較する。その後基準を変えて同様の手順を繰り返すことでアイデアの向上、新しいアイデアの創出を行う手法。



キャッチコピーコンテストを実施！

地域の大動脈である舞鶴若狭自動車道をもっと多くの人に知ってもらう必要がある

思わず興味を惹かれ、舞鶴若狭道を走りたくなるような
ユニークなキャッチコピーを募集

応募いただいたキャッチコピーを使って様々な広報展開を実施



10

施策の実施

コンテスト概要

○応募期間

2025年11月28日(木)～2026年1月12日(月)

○賞

- ・最優秀賞（5万円分の商品券）
- ・優秀賞（数点）：福井県嶺南地域の特産品（5,000円相当）

○審査員

- ・国立大学法人福井大学大学院 経営・技術革新工学研究室
- ・中日本高速道路株式会社 金沢支社
- ・福井県 嶺南振興局
- ・沿線自治体（福井県敦賀市、美浜町、若狭町および小浜市）

さかな街・三方五湖PAでの広報活動を実施



福井大学・大学院の授業内で広報活動を実施



審査会について

最終審査会

日時：1月27日(木)
オンラインにて実施

最優秀賞・優秀賞の作品を

舞鶴若狭道のキャッチフレーズとして採用する

② 産学官連携による若者と地域のミスマッチ解消と関係人口創出



客員准教授
寺尾 隆

講演資料



チーム鯖江 2025年度活動報告

福井大学大学院 竹本研究室

タナソン ナッタクン

安倍 誠明 森 泰

河野 颯人 田井 史也

指導教員

寺尾 隆

竹本 拓治

共同研究

公益社団法人 鯖江青年会議所

2026年 1月20日



課題

鯖江市では、地域活性化に向けた取り組みが行われている一方で、**若者の市外流出が続いていることが課題**となっている。



鯖江青年会議所が企画した「まち創生ソリューションコンテスト2025 in 鯖江」
による伴走支援のもと、行政・企業と連携しながらプロジェクトを進めた。

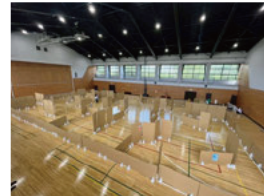


調査・分析・企画

高校生へのアンケートを行い、分析結果をもとにして、高校生自らが発案できるワークショップを実施した。
それらの、アイデアをもとに鯖江市を舞台とした地域クイズ×サバイバルゲームを「鯖ゲー！」高校生と企画し実施を行った。

鯖ゲー！とは

「サバイバルゲームの戦略性×脱出ゲームの物語性」の要素を融合し、
クイズやミッションを通して鯖江市の魅力や地域資源を学ぶ体験型イベント。
遊びながら学び、高校生が地域と主体的に関わるきっかけをつくる。



現状

鯖江市概略



鯖江市について

福井県嶺北地方に位置する、「めがね」「繊維」「漆器」を三大地場産業とする「ものづくりのまち」である都市。



各産業が高い専門技術と国内トップクラスのシェアを誇り、地域経済を牽引している。近年は伝統産業に加え、IT産業の振興にも注力し、新たな価値創造を目指している。

高校生
3,584人

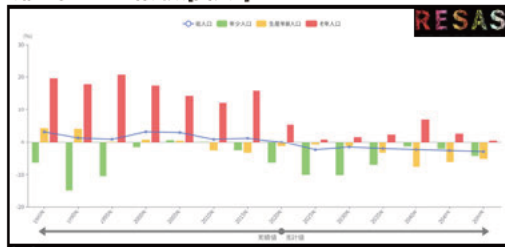
総人口：68,091人（令和7.6.1現在）

高校 1校
高専 1校
大学 0校

鯖江市の人口ピラミッド[図表1]



鯖江市の人口増減数[図表2]



[図表2]より年少人口（緑）と生産年齢人口（黄色）の減少が顕著である。
若者流出は深刻であり、特に高校卒業後の18-22歳で加速している。

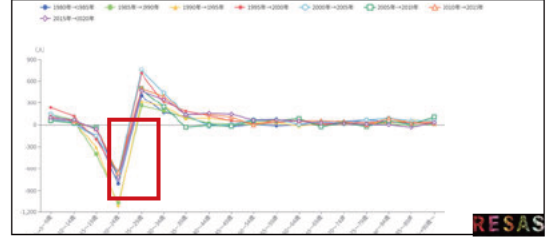
将来的に地域を支える人材不足が懸念される



若者はいつ・どこへ転出するのか

- 進学を機に県外への流出が多いことがわかる [図表3]
- 県内への転出だけでなく、都市部への傾向が強まっている [図表4]

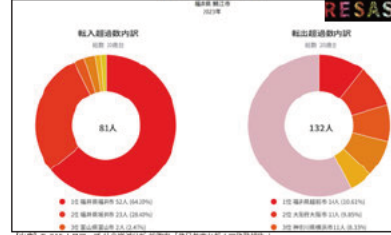
年齢階級別純移動数[図表3]



[出典] RESAS人口マップ 社会増減分析(総数) 国勢調査、厚生労働省 総務省統計局(国) に基づきデジタル庁国勢調査結果発表事務局作成

高校生までの間で地域との関係を作り
若者と地域の関係人口を増やす取り組みが必要である

20代の若者の転出超過傾向[図表4]



[出典] RESAS人口マップ 社会増減分析(総数) 「住民基本台帳人口移動報告」



RESASデータの分析結果からヒアリング調査を実施

5月14日 鯖江市役所 生涯学習課

若者の地域離れと参加の少なさが深刻

高校卒業後、地元を離れ戻らない傾向
若年層が減少すると地域活動の循環が断たれる懸念あり
若年層から継続的に地域コミュニティに参加して欲しい



地域コミュニティの拠点である公民館でのヒアリング

6月27日 北中山公民館

アクセス面や立地の課題

郊外の公民館では高校生の参加が困難(移動・人口構造)



7月7日 鯖江公民館

公民館の利用状況とギャップ

高齢者は利用しているが、高校生の参加はほとんどない
高校生向けイベントが少なく、ニーズ把握もできていない
公民館側も「高校生が何を求めているのか知りたい」と感じている



鯖江市公民館・学校設置マップ



市役所、公民館ともに若年層が地域コミュニティに参加していない現状に課題を感じている。一方で、何をすれば良いのかわからないなどの声があり施策を行っていない現状がある。



【アンケートの実施】

課題認識を踏まえ、若者向けの新たな地域コミュニティを創出するために高校生のニーズや地域への想いを把握するアンケートを実施。

アンケート実施場所



福井県立鯖江高等学校



福井工業高等専門学校

対象：鯖江市の高校生475人
実施日：6月9日～6月20日

【アンケート目的】

高校生のニーズと地元への想いからまちづくりの可能性を明らかにする

「学校での満足度」、「家庭での満足度」、「休日の満足度」3つのカテゴリーをそれぞれ5段階で評価する。

【アンケート項目】(主要項目を一部抜粋)

【学校での満足度】

- ・学校生活に満足している。
- ・友達と 一緒に学ぶことで、やる気が出る。
- ・鯖江市の企業や地域について学ぶことに興味がある。
- ・学校の勉強以外でも学びたいことがある。

【休日の満足度】

- ・休日の過ごし方に満足している
- ・休日には、学校や趣味に取り組める場所や機会があると感じる。
- ・休日に友人や家族と過ごす時間が、気分転換ややる気につながる。
- ・鯖江市や自分の住む地域で開催されるイベントや活動に興味がある。
- ・休日に新しい体験（フィールドワーク、ボランティア活動など）を通して学びたいと思っている。

【家庭での満足度】

- ・家庭での生活に満足している。
- ・家族との会話が気持ちの安定につながっていると感じる。
- ・鯖江市や自分の住む地域の課題について家族と話すことがある。
- ・学校以外でも家庭で学びたいと思うことがある。



SEM分析結果

① 「休日体験学習意欲」 →(0.54)→ 「地域イベントへの興味」



② 「地域イベントへの興味」 →(-0.11)→ 「休日の活動機会」

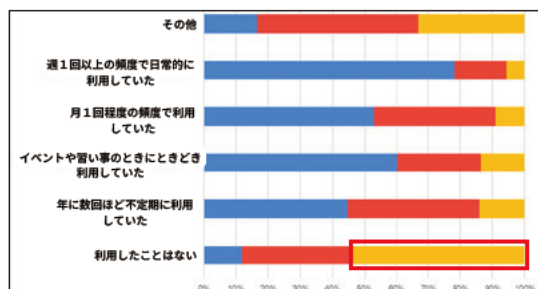


① 休日を充実させたいという意欲が、地域イベントへの関心につながっていることがわかる。

若者は地域と関わる意欲を持っている

② イベントへの関心があっても、実際の参加機会には結びついていない。
「関心はあるが、行動に移す場がない」ことが課題

アンケート結果： 公民館を利用した頻度



「学校での満足度」、「家庭での満足度」、「休日の満足度」3つのカテゴリーをそれぞれ5段階で評価。
実施日：6月9日～6月20日 N 475

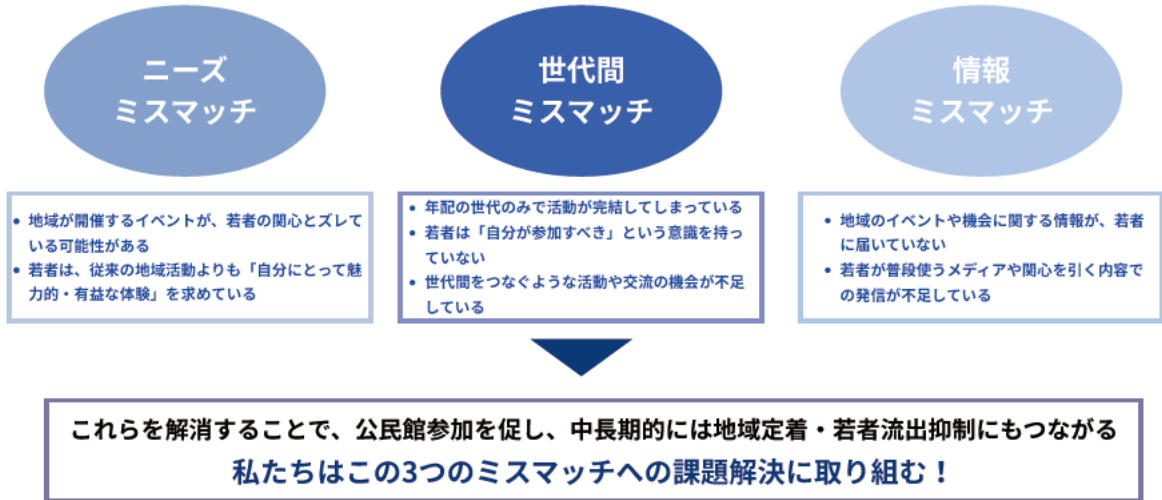
高校生の多くが公民館を「利用したことがない」と回答。
若者が地域施設にアクセスできていない現状が明らか

若者の地域への関心はある。しかし、彼らの心を掴む「魅力的な活動機会」が大いに不足している。

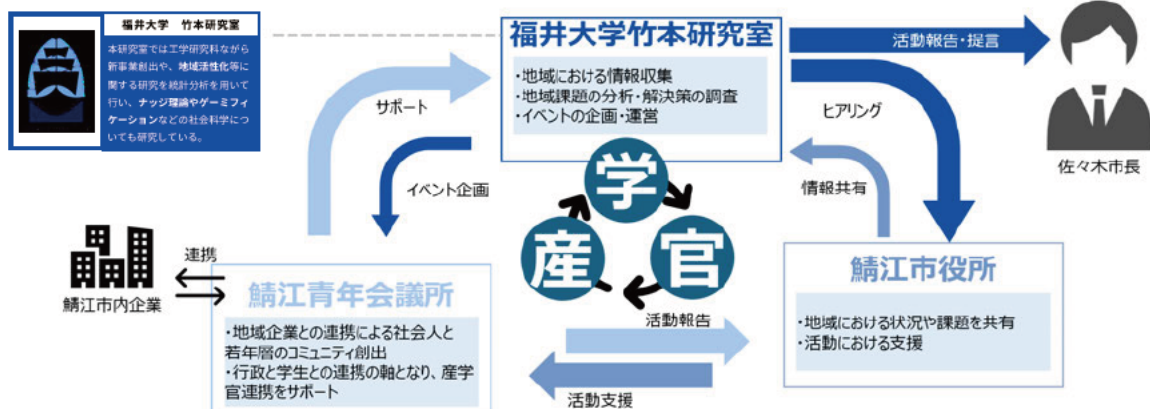


高校生へのアンケートからわかる

若者の地域コミュニティの希薄を生む要因は、「ニーズ」「世代間」「情報」の3つのミスマッチにある



分析で明らかになった課題を解決するため、「**産学官連携**」で実施した。



産学官連携実施により大学コミュニティだけでは実現できなかった
幅広い層とのコミュニティが拡大し、活動への促進に繋がった。



ニーズのミスマッチを解消するために、高校生を対象にワークショップを実施

福井工業高等専門学校（7月17日）でのワークショップでは、**高校生が自分たちの興味や好きなこと**を出発点にグループ内外のアイデアを組み合わせるイベントを企画

自由な発想から地域を面白くする多様なアイデアが生まれた

ニーズ
ミスマッチ
の解消

出てきたアイデア（一部抜粋）

- ・AI体験会
- ・スタンプラリーパン屋めぐり
- ・パン作りコンテスト
- ・俺のメシ（料理コンテスト）
～なつかしの味を再現～
- ・Splatoon × 水遊び
- ・鯖江高専生向け「今日好き」
- ・まち脱出ゲーム、TRPG
- ・ナイトプール



高校生の声

- 「地域のイベント、興味はあるけど、行くものがない…」
- 「友達とワイワイできるなら行きたい！新しい体験がしたい！」
- 「面白いイベントの情報って、だいたいインスタが友達からだよな」

地域イベントに対する潜在的な関心、新しい体験や友人との交流への強い欲求、SNSを通じた情報収集傾向などが見えてきた



ピュー・コンセプト・エバリュエーション

参加者の声や好みをもとに、複数のアイデアを評価軸に沿って比較・検討するフレームワーク。基準となるアイデアをStandardのSと表記し、各項目について基準と比較した結果優れているものを(+)、劣っているものを(-)、同程度のものを(S)と表現する。

今回は高校生の興味やニーズに最もマッチする企画を選定するために行った。

評価要素	今日好き	Splatoon × 水遊び	パンやスタンプラリー	俺のメシ	脱出ゲーム
学習意欲の向上	S	S	+	+	S
交流があるか	S	S	-	-	-
罵人化しないか	S	+	-	S	S
拡張性	S	-	S	+	+
地域の独自性	S	-	-	-	+
地域連携	S	-	+	S	S

ポイント

Splatoon × 水遊びの強み

インクを撃ち合い、陣取りをするSplatoonを模したアクションシューティングゲームを行う上で自然なコミュニケーション（交流）が生まれる。共通の目標に向かって協力することで、新たな友人関係の構築、交流機会の創出が期待できる。

脱出ゲームの強み

謎解きや物語性を通じて、戦略性の高い体験（拡張性）を提供できるとともに、地域データを活用したマップやミッションにより鯖江ならではの物語を盛り込み、地域の独自性・地域連携を自然に学べる点が魅力である。

解決策

戦略型ゲーム「鯖ゲー！」



・全世代が楽しめる
 ・世代間を“つなぐ”力がある
 上記のような特徴を持ち、利用者層ミスマッチを解消できるものの1つに「サバイバルゲーム」がある。サバイバルゲームは戦略性も高く、拡張性の担保も可能である。

利用者層ミスマッチの解消



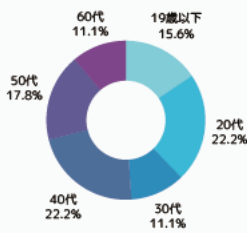
交流

×



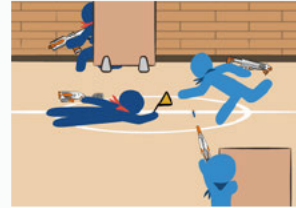
戦略性

世代別プレイヤー割合



【出典】「ミリタリー（トイガン、サバイバルゲーム）市場の発展と展望」— 天野経済研究所（2017年3月31日付記事）における報告

サバイバルゲームに地域要素と戦略性を追加した新たな地域連携の形として「鯖ゲー！」を提案する！



「鯖ゲー！」とは

「サバゲーの戦略性」と「脱出ゲームの物語性」を融合させ、鯖江の地域資源を学びのフィールドに変えるゲーム。

コンセプト

- 地域関連クイズを活用し、遊びながら地域への理解と関心を深める。
- 戦略要素には地域クイズを取り入れ、鯖江の「今」と「未来」を自分ごととして体験できる。
 - ゲームの企画から運営まで高校生と協働で取り組み、「参加」「学び」「運営」を融合させた新しい地域連携の形を提案する。

イベント実施

情報ミスマッチへの解決策



「鯖ゲー！」 ～地域クイズ×サバイバルゲーム～

イベント概要

ナーフを使用したサバイバルゲームを実施

日時：2025年9月13日（土）

12時～17時

場所：鯖江市新横江公民館



Instagramでの発信

< sabage_sabae_official >



【鯖ゲー公式】鯖江×サバゲーで地域を攻略

【福井大学主催】
 \地域住民の交流拠点を創出/
 ▶サバゲーで地域を盛り上げる！
 ▶ナーフ使用で安全に配慮/初心者歓迎... 続きを読む

forms.gle/jhGPxciMdUvU2UDvcA

情報ミスマッチの解消

TVへの告知出演



おじゃまっテレワイド&ニュース
福井放送（9月4日）

駅でのチラシ配布



福井駅・田原町駅・鯖江駅にて250枚配布

他にも

- ・地元高校へ案内を発信
- ・青年会議所の方々から地元企業への発信
- ・若者の居場所「こみかるユースふくい」への発信

効果測定①

参加者アンケート内容



イベント当日の様子



試合



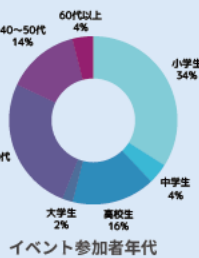
鯖ゲー!



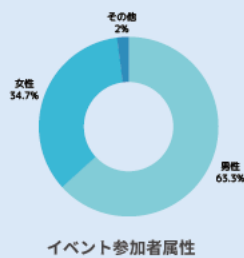
フィールド内

2025年9月13日

合計イベント来場者数：67人



イベント参加者年代



イベント参加者属性

イベント参加者にアンケートを行なった

鯖ゲー！について（リッカート5段階評価）

- 本イベントは参加して満足するものでしたか
- 本イベントの内容は期待していたものでしたか
- チームで協力して目標を達成することに、楽しさや達成感を感じましたか
- 本イベントへの参加を通じて、鯖江市に対する愛着や親しみが深まりましたか
- 本イベントや、今後開催される同様のイベントを、友人や家族にも勧めたいと思いますか
- イベント参加前と比べて公民館を身近に感じるようになりましたか
- 今回のような、地域の方々と交流できるイベントにまた参加したいと思いますか
- 今後、プライベートや他の活動で公民館を利用してみたいと思いますか
- もし次回以降イベントが開催される場合、企画や運営に関わってみたいと思いますか

効果測定②

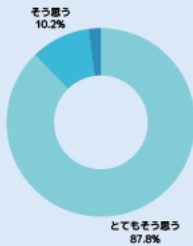
3つのミスマッチの解消



イベント終了後のアンケートから見える本イベントの効果

①【ニーズのミスマッチ】

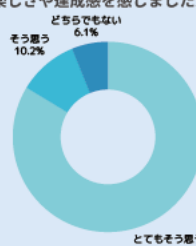
本イベントは参加して満足するものでしたか？



とても満足 87.8%

②【世代のミスマッチ】

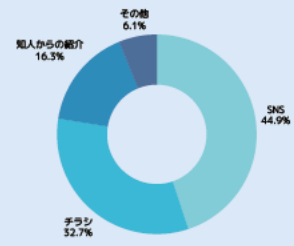
チームで協力して目標を達成することに、楽しさや達成感を感じましたか？



とても満足 83.7%

③【情報のミスマッチ】

本イベントを知った媒体は何ですか？



- ① 満足度の高さからニーズに応えたイベントであるとわかった
- ② 様々な年代、初対面のチーム構成でイベントを実施したが協力して勝利を掴むことがに楽しさや達成感を感じるとわかった
- ③ SNSでのイベントの告知の効果を示す

若者の地域コミュニティの希薄を生む要因は、「ニーズ」「世代間」「情報」の3つのミスマッチ
これらを「鯖ゲー！」は解消できる潜在的なコンテンツであることがわかった

効果測定③

アンケート分析結果



【「イベント期待度」と「イベント参加者の達成感」】



相関分析 $r=0.54$ $p=0.047$

「イベントの内容は期待していたものでしたか？」(横軸)

「チームで協力して目標を達成することに、楽しさや達成感を感じましたか？」(縦軸)

「チーム内での協働」がイベントの満足度向上に影響していると示唆されている

1:そう思わない 4:やや思う
2:あまりそう思わない 5:そう思う
3:どちらでもない

【参加者の意見】

- 初めての人と楽しめた
- 知らない人と交流できてよかった
- 家族で参加できてよかった
- 鯖江市以外でも開催してほしい

【「再参加意向」と「他者への推奨意向」の強い結びつき】



相関分析 $r=0.68$ $p=0.005$

「地域の方々と交流できるイベントにまた参加したいと思いますか？」(横軸)

「本イベントや、今後開催される同様のイベントを、友人や家族にも勧めたいと思いますか？」(縦軸)

継続的に開催することで、知人を巻き込んでいき参加者の増加を見込むことができる

1:そう思わない 4:やや思う
2:あまりそう思わない 5:そう思う
3:どちらでもない

本イベントの価値は、参加者同士が交流し、協力し合えるプログラム設計にある。
今後、この強みをさらに活かし、満足度の高いイベントを継続的に開催していくことで、
リピーターと新規参加者の増加という、持続的な成長サイクルを生み出すことが期待できる。

本活動の後押し

鯖江市長表敬訪問



実施日：10月3日14:00~15:00

鯖江市長表敬訪問

これまで半年間にわたり実施してきた地域共創型プロジェクト「鯖ゲー！」の成果報告と、今後の地域展開に向けた市との連携可能性を探ることを目的として実施。

市長のコメント

- このイベントには大きな可能性を感じる。今後、ぜひ鯖江市内で展開して欲しい。私たちも一緒に盛り上げたい。
- 「デジタルが普及した今だからこそ、逆にこうしたアナログなイベントが刺さると感じる。

➡ 行政からの公的評価を得たことは、地域への信頼性向上につながる重要な成果となった

社会的波及と意義

県民福井に掲載！

メディア掲載を通じて、「鯖ゲー！」の活動内容が地域の方々に周知され、理解を広げる機会となった。また、今後の関係者との連携や市内外への展開に向けた情報発信の土台づくりにつながった。

コンテスト

まち創生ソリューションコンテスト2025 in 鯖江



福井大学・竹本研究室の「チーム鯖江」として、地域課題をテーマに、学生の視点から実現可能な解決策を提案発表を行った。

◎審査員からのコメント

- ・若者世代のみならず、小学生から広い世代に働きかけ実施できたのは素晴らしい
- ・ミスマッチの解消に対し、様々なアプローチができていてよかった
- ・鯖ゲーの構築、高校生への調査など根拠をもちつつ、若者のニーズを捉えようとしていて良かった



2025年10月5日まち創生ソリューションコンテスト2025 in 鯖江

「鯖ゲー！」第2回を実施！

日時：2026年1月18日（日）

12時～16時

場所：鯖江市総合体育館 第2競技場

対象：全年齢



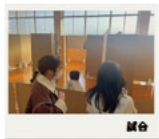
アウトカム

「鯖ゲー！」の定期開催に向けて



1月18日 地域クイズ×サバイバルゲーム「鯖ゲー！」第2回開催

イベント当日の様子



試合



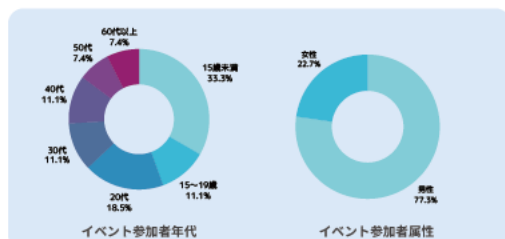
鯖ゲー！



フィールド内

2026年1月18日

合計イベント来場者数：45人



今後の「鯖ゲー！」実施

福井の地域活動団体に「鯖ゲー！」の運営を移管
こしの都ネットワーク、福井新聞にてイベントの様子を
取り上げていただいた。

「鯖ゲー！」の定期開催は参加者同士の交流を促し、
更なる参加者の増加による持続的な成長サイクルを生み
出すことが望める。

今後の運営に関しては福井県内の地域活動団体に移管して
鯖江市を中心に活動を広げていく。

若者と地域の関係人口増加を狙う



現状

- 若者の市外流出が続いていることが課題となっている
- 若者と地域の関係人口を増やす取り組みが必要
- 若者と地域コミュニティの間には「ニーズ」、「世代間」、「情報」の3つのミスマッチが存在していた



施策

3つのミスマッチを解消

- アンケートと分析によって若者のニーズを把握し「鯖ゲー！」を提案
- どの年代でも遊べるルール設計とチーム戦という形式によって世代間の交流機会を創出
- SNSを使った情報発信の有効性を提示



ありたき未来

「鯖ゲー！」を通じて若者の地域コミュニティの希薄を生む原因であったミスマッチを解消することで若者が地域コミュニティへ継続して参加する仕組みを作り、若者と地域の関係人口を増やしていく！



③ 地方商店街における体験型周遊イベントによる地域活性化の試み



特命助教
石原 周太郎

講演資料



Takemoto Lab

敦賀YYTチーム 2025年度年間報告

福井大学大学院 竹本研究室

敦賀YYTチーム		指導教員
安田 慎太郎	吉田 憲人	石原 周太郎
近藤 隼人	亀井 晴翔	竹本 拓治
坪川 陽介		

1.1 はじめに

活動拠点

敦賀市にて合宿を行った 令和7年2月23,24日



「地域調査活動」としての調査合宿

→合宿でできたつながりから敦賀で活動



敦賀市はどういう街なのか
自分たちの目で確かめる

現地の人から話を聞き、現状を把握し
理解を深める

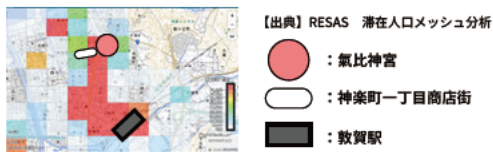
→まずは課題発見のため街歩きヒアリング

POINT!

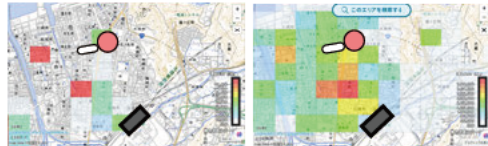
敦賀市に足を運び、街を歩いたり話を聞いたりして、課題を発見し活動の方向性を決める

1.2 課題発見

滞在データ分析から



2024年 他都道府県居住 全年代



→観光客も地元の若者も神楽町一丁目商店街の
目の前(氣比神宮)までしか行かない

POINT!

神楽町一丁目商店街は氣比神宮が目的地の観光客や地元住民を獲得できていないのではないか

神楽町一丁目商店街理事長 敦賀市役所ヒアリング



- 氣比神宮からの誘客をメインとしているが、
現状十分に誘導できていない
- 滞在してくれているが時間が短い
- 体験型コンテンツの不足
- 氣比神宮からの誘客策が必要

2.1 アンケートとワークショップ

高校生実態調査アンケート

- 実施期間：令和7年7月14日-19日
 - 調査方法：高校より配布されたGoogleFormsにて回答・回収
 - 対象者：敦賀高校全生徒532名(回収率：100%)
- ⇒記述統計、KHコーダーの共起ネットワークを用いて分析

高校生の生活範囲や求めていることなどを調査するために、アンケートを実施。

敦賀の高校生の実態

敦賀の高校生は、何よりも「友達と過ごすこと」を目的にしているが、市内には友達と無料で集まれるような居場所や遊べるような場所が少ないと感じている。また、敦賀の高校生の5人に2人は、まちづくりへの参加意欲がある。

POINT!

まちづくりに興味があり、居場所が欲しい。

ワークショップ

敦賀まちづくり☆ワークショップ



実施日：令和7年8月12日(火)

神楽町一丁目商店街と若者を結び付けるために敦賀の高校生、大学生とワークショップを実施。

• 普段の遊ぶ場所について

⇒学校周辺で「完結」しているため、
商店街に来る動機が必要

• 商店街の印象

⇒「自分たちとは無関係な場所」と認識

POINT!

敦賀の高校生にとって商店街は無関係な場所となっているため、商店街に呼び込むには身近に感じてもらう必要がある。

2.2 実施概要

①和伊和伊亭ビル上層階の新規事業提案

課題

- 商店街に空き店舗が目立つ
- 2階以上の店舗利用には、
改装が必要な場合も



和伊和伊亭(神楽にある洋食屋さん)のオーナーが和伊和伊亭ビル上層階を使った新事業を一緒に考える



②神楽町一丁目商店街の賑わい創出



課題

- 商店街に賑わいが無い
- 観光客&地元の若者の来訪
目的創出



神楽町一丁目商店街全体で謎解きラリーを実施。

2.3 ① 提案

和伊和伊亭

敦賀市神楽町にある洋食レストラン。もともとは福井県若狭町で20年以上愛されてきた人気洋食店で、名物はふわとろのオムライス。



具体的な提案例

ドミトリー、まちラボ、シェアハウス、など。観光客や地元の高校生など、幅広いターゲットを元に考えた。



POINT!

和伊和伊亭オーナーに対して、分析から得た知見を生かした提案を行うことができた。

分析について

高校生に対してアンケートを行ったり、ワークショップ、ヒアリングを通して空きスペースの活用を考えた。



体験型の人と交流できるスペースや作業スペースなどが必要がある

居場所の創出

最終決定案

シェアオフィス、工作室(DIY)

3.1 ② 課題からのアプローチ

[財務省関東財務局経済調査課, (2025). 周遊型開解きを通じた地域の活性化について [経済調査レポート]. 財務省関東財務局. 観光スタンプラリー研究 (中村ら, 2022) 中村建設株式会社, (2023). スタンプラリー型イベントの参加者の回遊に関するモチベーションの実験的調査. J-GLOBAL.]

見つけた課題

- 体験型コンテンツの不足
- 商店街の滞在時間の不足
- 気比神宮からの誘客策が必要
- 商店街にくる動機、導線
- 高校生を呼び込めない
- 特別な目的がなければ商店街に来ない

どういったアプローチが必要？

- 体験型コンテンツを実施
- 商店街周遊
- 商店街を知ってもらう
- 高校生の来訪目的

先行研究より

- 地域回遊性を高める効果
- 滞在時間の延長と消費促進



謎解きラリー

3.2 ② 謎解き概要

概要

神楽一丁目商店街の店舗の外に謎を貼り、参加者に周遊してもらおう。かぐ〜るで参加者に解答用紙を配布する。問題を解き終わった参加者に景品として商店街の駄菓子を渡し、アンケートも答えてもらう。

効果

- 商店街の滞在時間の確保
- 商店街の理解が深くなる
- 地元の若者を商店街に呼び込む
- 気比神宮からの導線ができる
- 商店街での消費が増える
- 商店街が賑わう

実際の様子



問題例

増井弘海堂(昆布屋)に実際に設置した謎

- むっこみおぼろ
 - 敦賀フグ
 - ソースカツ井
- 思わず、買いたくなるのは？



「むっこみおぼろ」
→増井弘海堂で販売している昆布



解答
思わず、買いたくなる
↓
買いそう
↓
海藻
A.むっこみおぼろ

設置店舗の商品および敦賀の地域資源を題材に謎を作成。

3.3 ② 謎解き1回目

実際の様子 実施日：2025年9月15日(月・祝)



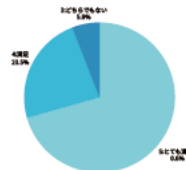
参加者：約70名

想定していたターゲットの観光客と敦賀の高校生の姿はほぼ見られず、敦賀の小学生とその保護者の層がほとんどであった。

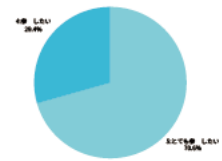
ゴール地点では参加者同士の交流を確認することができた。

参加者アンケートの分析

今回の謎解きラリーの満足度を教えてください



また商店街で謎解きラリーのようなイベントがあれば、参加したいですか？



参加者の9割以上から5段階評価で「4:満足」の評価で謎解きラリーが地域住民の関心と満足度を高めることがわかる

参加者の全体が5段階評価で「4:参加したい」の評価で、イベントが一度きりの集客ではなく、持続可能な交流人口創出モデルとして有効

POINT!

謎解きラリーの仕組みは誘客に効果的であるが、観光客の誘致と交流に関してはまだまだ課題がみられた。

3.5 ② 謎解き2回目

実際の様子 実施日：2026年1月17日(土)



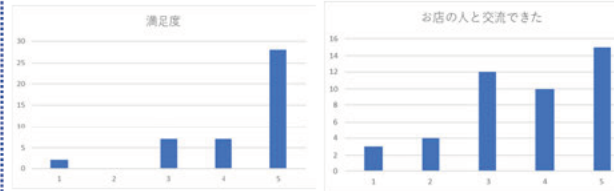
参加者：92名

氣比神宮で呼び掛けを行ったが観光客を呼び込むことができなかった。

今回の参加者も敦賀の小学生とその保護者の層がほとんどであった。

参加者と店の人の交流を確認することができた。

参加者アンケートの分析



- 全体的に参加者の満足度が高かった
- 参加者と店の人との交流を促せた
- 商店街に行こうと思ってくれた参加者が7割
- 敦賀について知れた参加者が6割
- 家族連れが7割

POINT!

参加者と店の人との交流を促すことで、お店の商品を購入してもらうことができた。

4.1 まとめ

解決できた課題

- 参加者と店の人との交流を促せた
- 商店街を周遊してもらえた
- 家族連れを呼び込めた



商店街への来訪動機の創出&商店街の店舗との交流機会の創出

解決できなかった課題

- 高校生を呼び込む
- 氣比神宮からの観光客の誘致



ナッジなど行動経済学的アプローチを導入して誘導を促進を試みる

展望

よりターゲットを絞った多くのイベントを行い、神楽一丁目商店街の賑わいに貢献する。
氣比神宮からの誘致や高校生の呼び込みの実現

④ ナッジ理論と統計的アプローチによる福井駅自由通路の自転車押し歩き推進



特命助教
鈴木 梓

講演資料



福井市役所
都市整備課
福井市ナッジ・ユニット

× チーム福井市



Takemoto Lab

チーム福井市 2025年度活動報告

福井大学大学院 竹本研究室

石原和貴 馬野一真
稲田寛 加藤健斗
渋谷昂輝

指導教員

鈴木梓
竹本拓治

共同研究企業

福井市役所 都市整備課
福井市ナッジ・ユニット
福井駅内商業施設

目次

1 福井市の課題

- 課題発掘
- 産学官連携事業
- 課題整理・活動過程

2 調査概要

- アンケート調査
- アンケート結果
- アンケートデータ分析
- ワークショップ実施

3 現地実装

- 実装開始
- 実装概要
- 分析結果まとめ

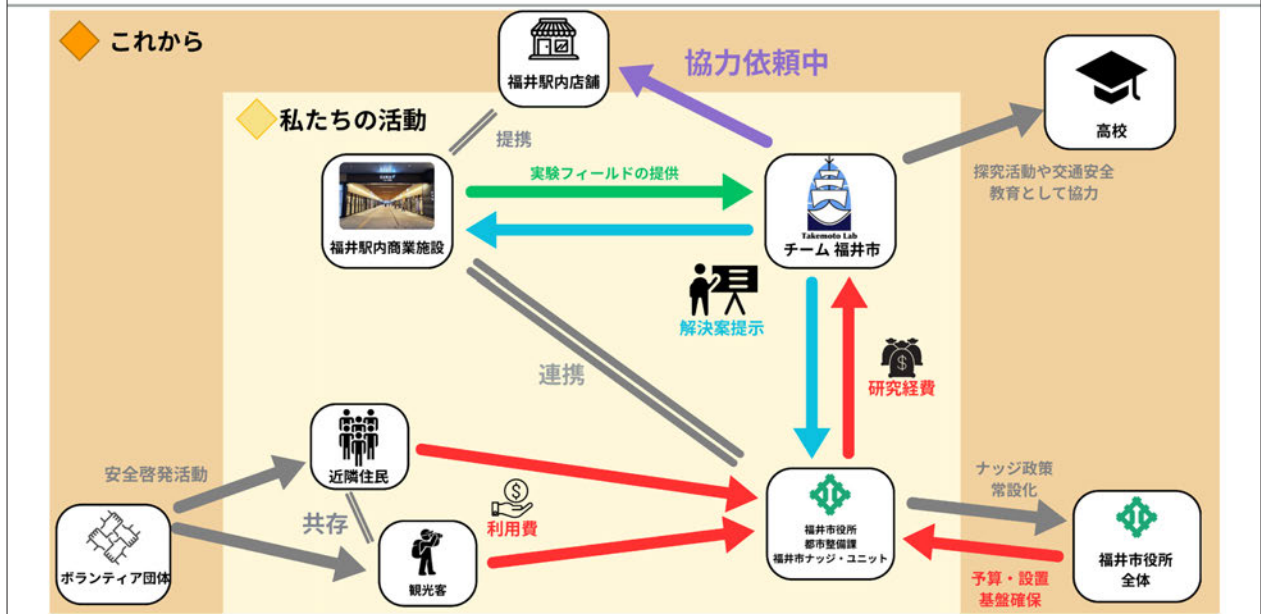
4 提案と効果

- さらなる提案
- ふくい産学官金連携PBL マatchingへの応募
- アウトカム①
- アウトカム②

Point

産学官と駅利用者の連携による「違反者のメリットに訴えるナッジ施策」で、「乗りチャリ」率を約50%削減することができた。将来的には今回の提案を全国へ展開することで、住み続けられるまちづくりを実現する。

産学官民連携ポンチ図



1-1 課題発掘

自転車と歩行者の接触事故事例

- 【大阪地裁 平成10.7.30】 620万円 平成7年11月夕刻時、大阪市阪急梅田駅前の「自転車通行禁止」の通路において、歩行者（48才主婦）に自転車（男性）が衝突。
- 【千葉地裁 平成1.2.28】 2,200万円 昭和60年9月日中、自転車乗入禁止の公園の遊歩道で、男性（65才）に高校生の乗った自転車がわき見運転から衝突。男性は転倒して路上に後頭部を激突させ、急性硬膜下血腫により死亡。

自転車と歩行者の事故では被害額が多額、尊い人命も失われる事故を未然に防ぎ、**安全安心な環境**が必須

福井駅周辺における人流と自転車利用

通路を縦断する地域住民と
通路を横断する駅利用者が交錯
→乗りチャリは非常に危険



福井駅自由通路



福井駅周辺自転車押し歩き区域

【出典】福井市ホームページ

Point

福井駅自由通路の乗りチャリ行為を0に、
自転車利用者と歩行者が共存できる環境を目指す

1-2 産学官連携事業

産学官連携による解決を模索



統計学・ナッジ理論の活用

統計学：平均値の差を統計的に検定する『t検定』や、要素間の関係の強さをモデル化する『共分散構造解析』等を用いて、データを根拠に提言


ナッジ理論：小さなきっかけで人々の意思決定に影響を与え行動変容を促す手法・戦略

Point

統計学・ナッジ理論と産学官連携により福井駅自由通路の押しチャリ推進に取り組む

1-3 課題整理・活動過程

課題



乗りチャリが危険
乗りチャリが減らない現状

乗りチャリの背景



メリット>デメリットの時
ルール違反が起こりがち

解決策



意識変容>強制
ナッジを活用

課題解決に向けたプロセス



2-1 アンケート調査

目的

ナッジのフレームワーク【MINDSPACE】のどの要素が自転車押しチャリに最も影響するのかを特定するため

ナッジのフレームワーク【MINDSPACE】

- | | |
|--|---------------------------------|
| Messenger : 誰が情報を伝えるかによって大きな影響 | Priming : 潜在的な意識が行動を誘発 |
| Incentives : 行動しない(する)と損(得)するように思える | Affect : 情緒、情動が行動に影響 |
| Norms : 他人がしていることに強く影響される | Commitments : 約束を公言すると実行 |
| Defaults : あらかじめ設定された選択肢の流れ | Ego : 自分にとって都合のいいことを実行 |
| Salience : 自分に関係のあるものに惹かれる | |

アンケート対象

福井駅周辺で実際に押し歩きをしている方(73人)

なぜ押しチャリする人に聞いたのか

乗りチャリしている人に聞くのは現実的に困難...

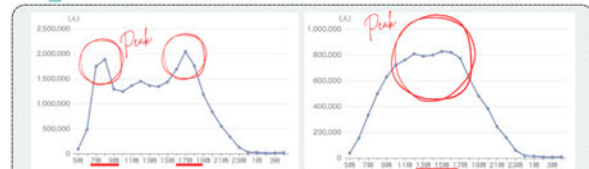
押しチャリする理由を探り、要因を強めることで、乗りチャリする人の押しチャリを推進しようと考えたため

本調査は押しチャリ行動を選択した人の動機把握を目的としており、乗りチャリ行動者の意識構造については今後の課題である。

アンケート期間

2025RESASデータから通行量が多い時間帯を特定し調査

平日：7～9時、16～18時 休日：13～15時



福井駅周辺通過人口の時間推移 2024年 左→平日 右→休日
【出典】RESAS人口マップ-通行人口(経済産業省「RESAS」)(2025年6月時点)

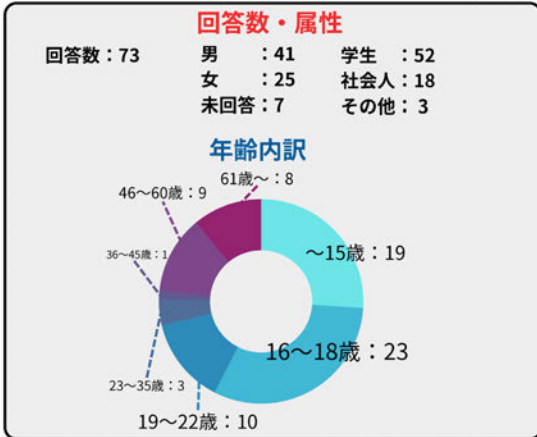
2-2 アンケート結果

実施年月日

2025 6/13(金) 8:00~12:00
6/15(日) 12:15~14:00
6/19(木) 16:00~17:30



アンケート収集の様子



アンケート内容

- ・属性
- ・通行頻度・目的
- ・押しチャリに影響した要素(MINDSPACE)を5段階で評価

評価項目質問文

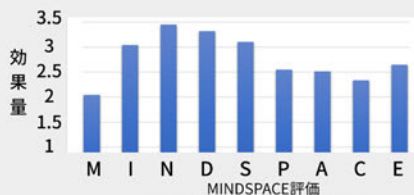
- Messenger** : 通路で警察から声かけがあったから
知人に押せと言われたから
- Incentives** : 指摘が怖いから、降りようと思った
罰金を払いたくないから
- Norms** : 他の人が押しているから自分も押そうと思った
マナーを守る人でありたいから
- Defaults** : ここでは自転車を降りることが決められているから
自転車用レーンがないから
- Salience** : 注意喚起の表示が目立っていたので降りたくなかったから
通行人がいるので自然と降りる
- Priming** : 周りで見られていると恥ずかしくて乗りにくい
道の雰囲気が自転車を降りないといけなさそうだった
- Affect** : その場で少し怖いと感じた
降りて押すことに安心感や納得感があった
- Commitments** : 自分の中で“押して歩こう”と決めていた
知人や家族に押して歩くと言言した
- Ego** : 周りの人に良い印象を与えたい
自分の行動に罪悪感を覚えたくない

2-3 アンケートデータ分析

MINDSPACE評価

一元配置分散分析

- ・3つ以上のグループの平均値に統計的に有意な差があるかを調べる統計手法
- ・少なくともひとつの組み合わせについて差があるかを検定



F境界値：1.63
P値：3.86-E
有意水準5%

なかでも、**Norms**と**Defaults**に
おしチャリを促す強い効果がある

仮説

現在乗りチャリをしている人もナッジの**Norms**と**Defaults**を使用した施策によって、押しチャリをするのではないか？

アンケート内容

- ・属性
- ・通行頻度・目的
- ・押し歩きに影響した要素(MINDSPACE)を5段階で評価

評価項目質問文

- Messenger** : 通路で警察から声かけがあったから
知人に押せと言われたから
- Incentives** : 指摘が怖いから、降りようと思った
罰金を払いたくないから
- Norms** : 他の人が押しているから自分も押そうと思った
マナーを守る人でありたいから
- Defaults** : ここでは自転車を降りることが決められているから
自転車用レーンがないから
- Salience** : 注意喚起の表示が目立っていたので降りたくなかったから
通行人がいるので自然と降りる
- Priming** : 周りで見られていると恥ずかしくて乗りにくい
道の雰囲気が自転車を降りないといけなさそうだった
- Affect** : その場で少し怖いと感じた
降りて押すことに安心感や納得感があった
- Commitments** : 自分の中で“押して歩こう”と決めていた
知人や家族に押して歩くと言言した
- Ego** : 周りの人に良い印象を与えたい
自分の行動に罪悪感を覚えたくない

2-4 ワークショップ実施

内容

福井大学学部生を対象に実施。

自転車の押しチャリを促す具体的なアイデアを考えてもらう。

集合知によって、効率的な問題解決策を模索。

使用するナッジ理論の要素は、アンケートで有意差があったNormsとDefaults。



ワークショップの様子

福井市役所の方とともに学生のワークに参加

方法

1. ペルソナの設定

「運転に絶対の自信がある」
「楽しんで、時間短縮したい」
「とりあえず周りにあわせがち」
→先行研究より、違反行動をしやすい3つのペルソナを設定。

2. N,Dのアイデア出し

”Norms””Defaults”の要素を含むアイデアをそれぞれ4つずつ考案してもらう。

3. アイデアの評価

考えたアイデアを
「コスト」「推定効果量」「労力」を基準に評価してもらう。足りない部分は似たアイデアと統合し、**良いものにブラッシュアップ**

3-1 実装開始



福井 押しチャリ天国

ピューコンセプトバリエーション法から3つの施策を決定

7月下旬の平日に、1案ずつの実施と3案すべての実施を行った

7/28(月)

7/29(火)

7/30(水)

7/31(木)

足音効果音



- 自由通路内で足音を再生する
- 歩行者が快適に通行しているDefaultsを設定することで自転車の押しチャリを促す

押し歩き看板



- 自転車を押し歩きしている人物の看板によりNorms効果で押し歩きを促す

足跡&タイヤ痕



- 自由通路内に足跡とタイヤ痕のシールを設置し、無意識のうちにシールに併せて押し歩きするようにdefaultsを意識

3案すべて

3案すべてを同時に行い、複合効果を検証(今後は2つの組み合わせも予定)



福井駅の西口と東口をつなぐ通路での自転車の押し歩き促進を

- 実施時間は午前9時~午後6時
- ナッジのnormsとdefaultsによる効果が期待できる施策で押し歩きを促すことを目的とする
- 福井駅自由通路に設置し、設置していない期間(実施前2週間)と押し歩き率を比較

NHK・FBC・福井新聞から取材
TVや新聞で報道された

3-2 実装概要

押し歩き看板

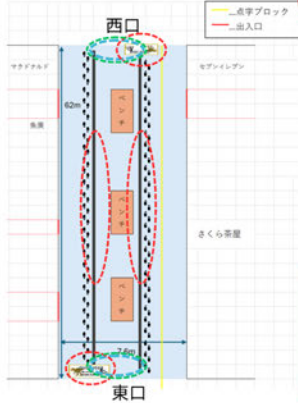
- 自転車を押し歩きしている若い男女の看板を設置
- Normsによる押し歩きを促す
- 押し歩きしている様子を見せるために文字は最低限



男女2種類のポスター



福井駅自由通路全体図



足跡&タイヤ痕

- 自由通路東西を繋ぐ足跡+タイヤ痕を設置
- 押し歩きするDefaultsを意識
- 兵庫県尼崎市のナッジ事例を参考に
- 「ここから押してね」のメッセージを「押してくれてありがとう」に変更



足跡&タイヤ痕



スピーカーと張り紙

足音効果音

- 自由通路入り口で足音を再生する
- 歩行者が快適に通行しているDefaultsを設定
- 視覚だけでなく聴覚からもアプローチ

3-3 分析結果まとめ

実験で収集したデータから、施策の有効性が示唆された

実験データ	分析方法	分析結果																								
<ul style="list-style-type: none"> • 実施期間の1時間を1サンプルとし、自由通路を通過した押しチャリ、乗りチャリの数をカウント • 1時間あたりの自由通路を通過した押しチャリ率をwelchのt検定で比較 • 通常日：R7/7/14~18,21~25 • 実験日：R7/7/28~31 	<p>welchのt検定</p> <p>2つのグループの平均値に「意味のある差」があるかどうかを統計的に判断するための手法。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 実施期間の1時間を1サンプルとし、自由通路を通過した押しチャリ、乗りチャリの数をカウント • 押しチャリ率をwelchのt検定で比較 • 有意水準5%とした 	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>押しチャリ率 (%)</th> <th>サンプル数</th> <th>p値</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>通常日</td> <td>67%</td> <td>n=962</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>足音</td> <td>64%</td> <td>n=105</td> <td>0.34</td> </tr> <tr> <td>看板</td> <td>77%</td> <td>n=97</td> <td>0.019</td> </tr> <tr> <td>足跡</td> <td>71%</td> <td>n=90</td> <td>0.27</td> </tr> <tr> <td>全て</td> <td>83%</td> <td>n=109</td> <td>0.0063</td> </tr> </tbody> </table> <ul style="list-style-type: none"> • リズム以外のすべてが押しチャリ率を増加 • 特に看板と3案すべてで有意に差 		押しチャリ率 (%)	サンプル数	p値	通常日	67%	n=962	-	足音	64%	n=105	0.34	看板	77%	n=97	0.019	足跡	71%	n=90	0.27	全て	83%	n=109	0.0063
	押しチャリ率 (%)	サンプル数	p値																							
通常日	67%	n=962	-																							
足音	64%	n=105	0.34																							
看板	77%	n=97	0.019																							
足跡	71%	n=90	0.27																							
全て	83%	n=109	0.0063																							

3案の実施結果を集計分析結果

全ての施策を実施した日に特に大きな効果がある傾向(自転車乗車率を約50% (通常日：33%→3案実施日：17%) 削減)
 ▶観測データに基づく探索的分析として、施策実施日には押しチャリ率が低下する傾向が確認された

【定量的なデータ以外でフィールドワーク時に気づいたこと】


足音が不気味だという意見、押しチャリをしなくてもぶつからない、人目がない、そもそも駅構内での人流が少ない

4-1 さらなる提案

福井新押しチャリ天国

効果検証により、来年度から
福井駅自由通路にて実装決定！

足跡&タイヤ痕



- ・ 駅自由通路に足跡+タイヤ痕を設置
- ・ 押し歩きするDefaultsを意識

常時設置するために道路にペイントする

押し歩き看板



- ・ 自転車を押し歩きしている人物の看板を設置
- ・ Normsによる押し歩きを促す

常時設置するために、適したデザインにブラッシュアップ

足音効果音



- ・ 自由通路内で足音を再生する
- ・ 歩行者が快適に通行しているDefaultsを設定することで自転車の押し歩きを促す

足音の不気味さを軽減するために違反者がいるときをAIで感知し、その時のみ足音が流れるようにする

Point

実際に行った政策を更にブラッシュアップし、自転車と歩行者の共存を目指すことで地方創生を図る

4-2 ふくい産学官金連携PBLマッチングへの応募

福井新押しチャリ天国の実施を経た課題として、

- ・ 乗りチャリが多い原因の1つとして人流が少ないこと
- ・ 施策実現に向けた課題として福井駅は公共機関・商業施設など様々なステークホルダーが複雑に絡み合っていること

福井駅テナント各社様とのマッチングを図るために

未来協働プラットフォームふくい ふくい産学官金連携PBLマッチング に応募

- ① データに基づく空間理解
- ② 回遊を促す活動づくり
- ③ 滞在価値を高める環境整備

三要素を一体的に進め、関係者全体で共有価値として育てていく協働体制を形成中

Point

押しチャリを促す仕掛けに始まり、将来的には福井駅周辺のにぎわいを創出し、その先にある利用者の安全・安心の担保を行うことでSDGsの11「住み続けられるまちづくりを」の実現に繋げていく

4-3 アウトカム①

産学官民を繋ぐ政策プラン

本提案は実証実験を通じて有効性を確認したが、持続的な実装には
産学官民の協働が不可欠である

駅前商業施設・保険会社等

- CSR/ESG活動の一環とし、事故削減・安全推進に参画
- 保険会社は事故減少データをリスク削減の証拠として活用可能

住民

- ボランティア団体等と協働し、駅周辺での安全啓発活動を展開



教育機関

- 高校・大学の探究活動や交通安全教育に本事例を取り入れ、若者の行動変容意識を育成

行政

- 自転車活用推進計画にナッジ施策を正式に位置づけ、常設化決定
- 交通安全条例・駅前再開発計画と連携し、予算・設置基盤を確保

課題



乗りチャリが危険
乗りチャリが減らない現状

Point

「押しチャリ天国」を足掛かりに**産学官民連携**で福井駅に導入することで、より自転車利用者の行動変容を促すことができ、課題解決につながる。

4-4 アウトカム②

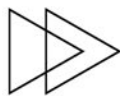
01



福井市の未来

福井駅周辺において、自転車押しチャリ区域での乗りチャリ行為が、歩行者の安全確保や交通秩序の維持の問題を引き起こしている。

押しチャリ天国実施



効果

- 乗りチャリ率の減少
- 歩行者との接触事故予防
- 歩行者の安心感・通路利用満足度の向上

自転車利用者と歩行者が共存できる環境になる

02 類似地域の未来

福井市のように**レンタサイクル**を導入している地域や**自転車活用推進計画**を策定している地域は数多く存在する。類似地域でも実装することで自転車利用者と歩行者が**共存**できる環境になり、歩行者の安全確保や交通秩序の維持が担保される。

03 日本全体の未来

地方創生2.0では安心して働き、暮らせる地方の生活環境の創生が示されている。

▽ **押しチャリ天国を行うと**

地方の自転車通行空間の整備に繋がり、国が掲げる理想の都市空間整備を加速させる。

Point

福井押しチャリ天国を起点に、類似地域や全国へと広がることで、全国各地での自転車と歩行者の**共存**とその先にある**地方創生**に繋がる

⑤ プロスポーツチームがもたらす定性的価値の可視化モデルの開発



助教 岡本 雅弘

講演資料



チームBWS 2025年度活動報告

福井大学大学院 竹本研究室

増井 優希 黄 子馨 山口 恭平
青山 天颯 宇都宮 笙太 國友 大陸
後藤 健史郎 中野 智貴 平川 大悟

指導教員

岡本 雅弘
竹本 拓治

共同研究企業

株式会社 ALL CONNECT (オールコネクト)

2026年 1月 20日

▶▶▶ 今年度の活動の流れ



1. 活動の背景



福井ブローウィンズ (BWS)



運営会社：株式会社福井ブローウィンズ
 設立年：2022年5月
 拠点：福井県
 活動場所：セーレン・ドリームアリーナ(福井市)、越前市アイシンスポーツアリーナ、敦賀体育館

オーナー企業：株式会社 ALL CONNECT
 所属リーグ：Bリーグ(B2)



スローガン：ブローウィンズは、福井をもっとにぎやかな場所にするべく福井の人々の背中を押す存在となる

クラブ運営事業

トップチーム運営

選手の育成や移籍を始め、トップチームの運営

ホームゲーム運営

ホームゲームの運営や開催日に実施されるイベントの運営

スポンサーアクティベーション

選手の育成や移籍を始め、トップチームの運営

パブリックビューイング

各市町村の公民館などの公共施設での試合観戦

地域貢献活動

アカデミー・スクール運営

ユースチーム(U-18,U-15)と幼稚園~中学生対象のスクール運営

運営ボランティア

「BLOWINDS CREW」
ホーム戦運営サポート活動

ブローウィンズ横丁 in Lpa

福井市内の大型ショッピングモールでの地元飲食店参加型イベント

BLOWINDS PARK

福井の子どもたちにワクワクを届けることを目的としたイベント

▶▶▶ クラブ運営事業のみならず、福井県の住民・企業を巻き込んだ地域貢献活動を多数展開している

Point!

福井ブローウィンズは福井県を拠点とするプロバスケットボールチームであり、福井をもっとにぎやかな場所にするべく地域貢献にも尽力している

1. 活動の背景

福井県が抱える課題

福井県民が求める「賑わい」

(問) 特に力を入れて取り組んでもらいたいと思う施策

- 1位：賑わいのある中心市街地をつくる
- 2位：安心して子供を産み育てられる環境を作る
- 3位：全ての人が安心して暮らせる地域社会をつくる

引用：福井県「県都福井の現状と課題」(2025/8/6)

北陸新幹線が開業したものの、福井駅前を拠点とした賑わい創出の評価は「ふつう」が多数
→県民が何に賑わいを求めているのか不明瞭



活動前のBWSへのイメージ



福井県のプロバスケットボールチームとして活動しているのは知っていたが盛り上がっているのかは知らない



友達がBWSの話題を話していて聞くことがある

現在のBWSへのイメージ



試合ではアリーナ全体での一体感があり、すごく盛り上がっていた



試合以外にも様々な地域で地域貢献活動を行っており、地域に密着したチーム

Point!

福井県の付加価値額が都市圏より有意に低い
福井県の付加価値を引き出しつつ「賑わい」にもアプローチする

4

2. SMILE開発理由

BWSの抱える現状の課題

- スポーツ事業にスポンサーとして関わる企業の多くは、「地域を盛り上げたい」などの定性的な想いを持って投資している



スポーツ事業という事業の特性上、定性的な価値が高い。だが、その価値を定量的に評価できる指標がない

(ヒアリングにて)



▶▶▶ 様々な企業・団体が行なっている活動が地域にもたらす定性的な価値を定量化できていない

現状の社会的意義を測ることができるモデル

経済波及効果

経済活動が直接の対象だけでなく、その周囲の産業や地域にも広がって影響を算出する指標で、観光振興や経済活性化のインパクトを直感的に伝えることができる

SROI

事業への投資が生み出す社会的・環境的な価値を金銭的に評価するフレームワーク。投じた資金や活動が生み出した社会的・環境的・経済的な価値を金銭的に換算することができる

▶▶▶ 上記の指標やモデルでは、感情などの定性的なデータは捉えきれず、定量的なデータ(金額)を扱っている

Point!

既存のモデルで定量的な価値を、私たちのモデルで定性的な価値を測ることで
スポーツチームが社会的にどのくらい価値があるのかを網羅的に把握することができる

5

3. 定性的価値を定量化するためのプロセス

step1 ロジックモデル作成

BWSが福井に与える定性的な影響を漏れなく把握するためにロジックモデルを作成

対象

1. ファン
2. 地域住民・企業
3. 運営
4. 福井県



step2 アンケート実施

N=1000を基準として、福井県の人口分布と各市町の年齢分布から必要数を収集



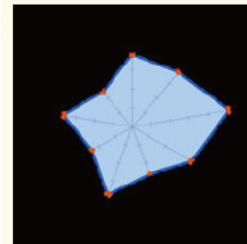
step3 分析

二項ロジスティック回帰分析を用いて定性的価値の定量化を行った



step4 モデル作成

分析結果からBWSが福井県に与えている影響を可視化したモデルを作成



Point!

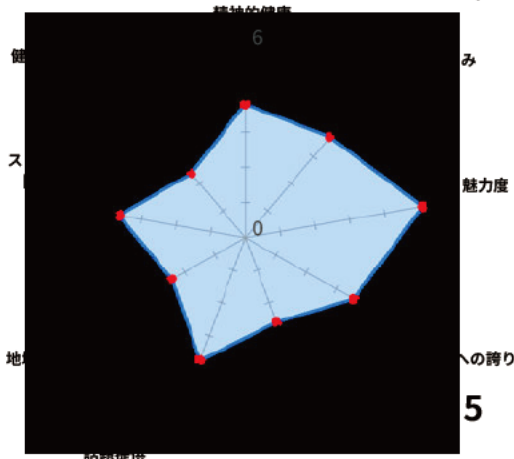
BWSの影響範囲を整理しアンケートデータの分析を実施
その分析をもとに、定量化モデル (SMILE) を開発

6

4. SMILEについて



社会的価値可視化モデルSMILE(Social Model for Invisible Local Evaluation)



「SMILE」モデルは、面積が大きければ大きいほど地域に対して影響を与えていることが視覚的にわかるもの

1. モデルの軸について

- アンケート項目は毎年同じに固定するが頂点の数は変動する場合がある
面積を計算するときに九角形を基準とした倍率をかける
ex)八角形の場合、面積比の1.023をかける
- 今後評価の点数の範囲を変えずに10段階評価を使う

Point!

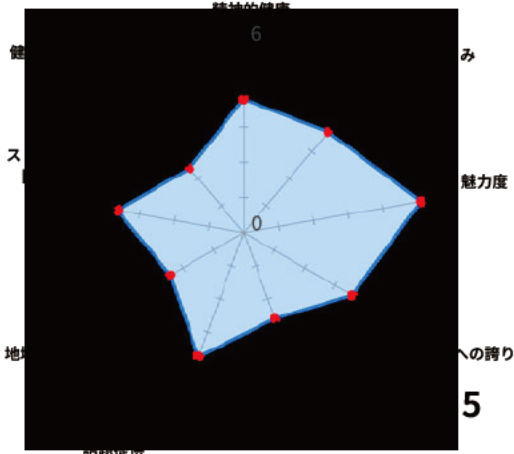
SMILEによって、スポーツの定性的価値を見える化し、
スポーツチームの社会的意義を明確にすることができる

7

4. SMILEについて



社会的価値可視化モデルSMILE(Social Model for Invisible Local Evaluation)



2.各点と面積の算出方法

頂点について

中心から各頂点への距離=

アンケート設問の点数の平均値×オッズ比を計算

各頂点は二項ロジスティック回帰分析で有効であった説明変数「オッズ比」は影響力の強さと考えることができる。

ex) 『健康意識』という項目のアンケート点数が高くて、それが『試合を見に行く』という行動に結びついていなければ、プロチームとしてのビジネス価値は低いと言える。

面積について

中心と隣り合う2つの頂点の3点から三角形面積を求め、それを9つ分足した値

各頂点から三角形の面積が求められる。これを全て足し、総面積 $33.46 \approx 33.5$ が算出できる。

Point!

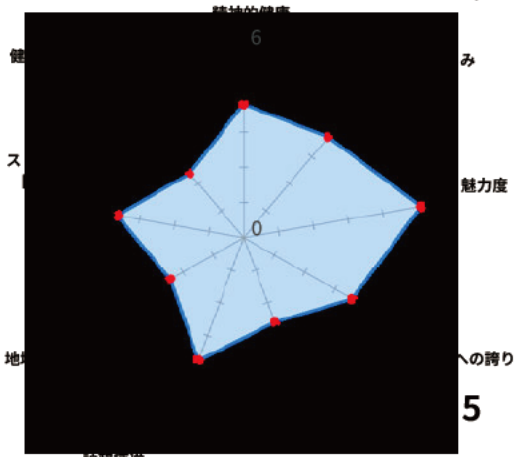
SMILEによって、スポーツの**定性的価値**を見える化し、
スポーツチームの社会的意義を明確にすることができる

8

4. SMILEについて



社会的価値可視化モデルSMILE(Social Model for Invisible Local Evaluation)



3.視覚化の力：面積が示す「社会的インパクト」

モデルの最大の特徴→『面積』

この多角形の面積が大きければ大きいほど、地域に与える『社会的インパクトの総量』が大きいことを意味する。

また、直感的な比較が可能である。

地域間比較：県内(例：嶺北と嶺南)、県外(例：福井と石川)

時系列比較：今年の面積と、来年の面積を比較すれば、『施策によってどれだけ地域への提供価値が増えたか』などを確認することができる。

Point!

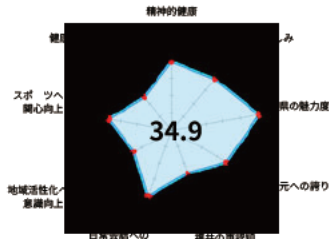
SMILEによって、スポーツの**定性的価値**を見える化し、
スポーツチームの社会的意義を明確にすることができる

9

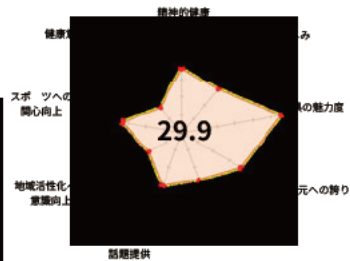
4. SMILEの活用 地域別での比較



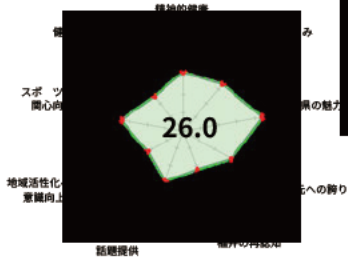
福井・坂井



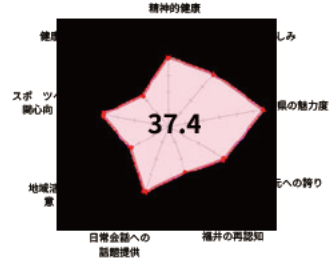
奥越



嶺南



丹南

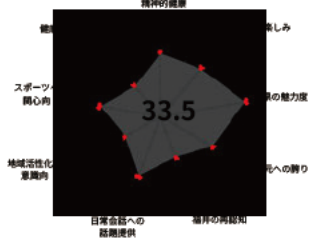


10

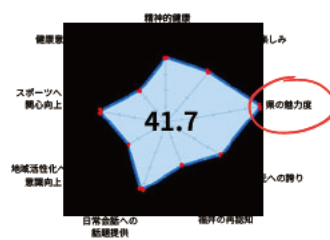
4. SMILEの活用 年齢別での比較



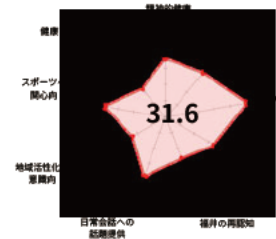
人口全体



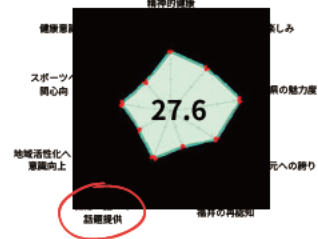
中年(30~59)



若年(~29)





高齢(60~)



11

5. SMILEが地域に及ぼす影響



1.福井県 意思決定の根拠が強化される 他部局との連携が進む 	2.スポンサー 出資の意義が明確化される 長期的関係の構築 
3.ファン 応援の意味が深まる コミュニティ意識の醸成 	4.地域住民 スポーツへの心理的距離が縮まる 新たな参画機会の創出 

Point!

SMILEを活用することによって、
スポーツを中心としたイベントや施策を行うための根拠とすることが可能である

12

6. 今後の課題とアウトカム



今後の課題

今回は、各市町村・各年代に分けてアンケートを1400件実施した。その結果、SMILEというモデルを作成し、BWSが地域にどれだけ影響を与えているかを示すことができた。
来年度では、スポンサー企業や試合会場、イベントにてアンケートを回収する。また、他チームでも同様にアンケートなどを実施してモデルを作成することで、横比較などを実施できるようにする。



BWSに与える影響

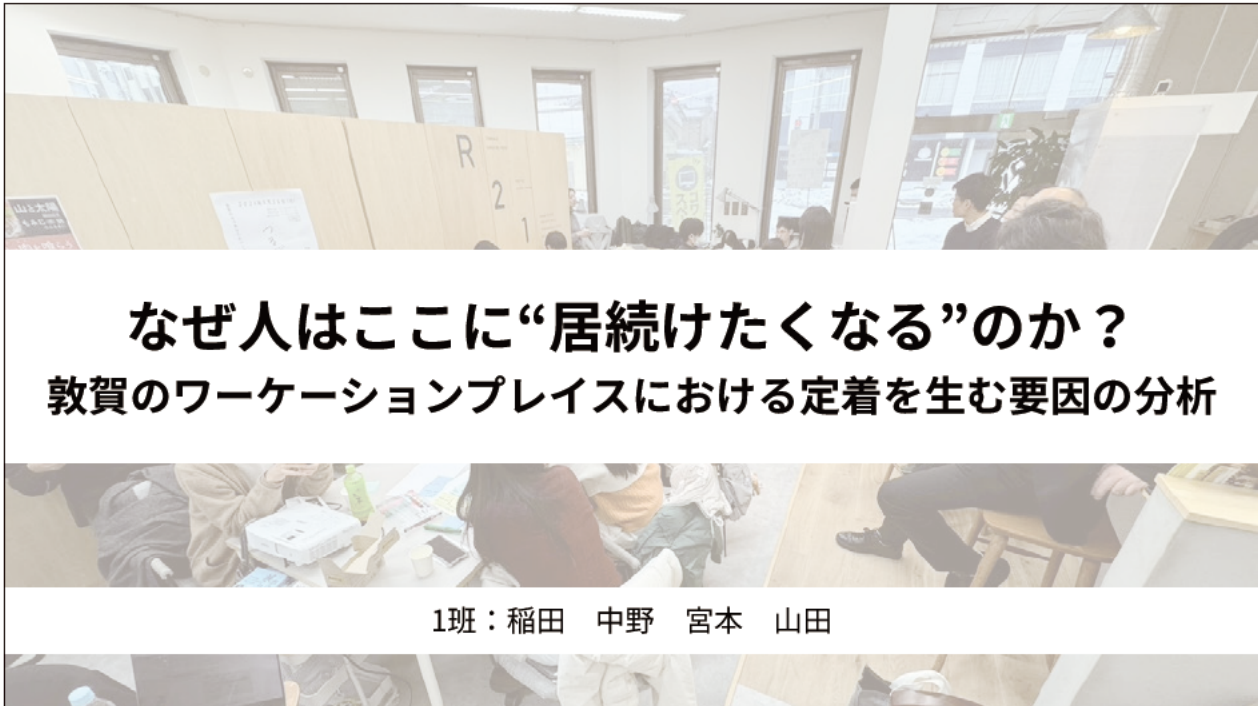
1. 賑わい創出の見える化として、福井県に与える影響が数値で明確になり、福井にとってBWSの必要性をデータで説明できる。
2. エリア戦略やイベント実施について改善ポイントが感覚ではなくデータで明確になり、影響の偏りを発見することができる。
3. BWSを支援すると地域はこう変わると数値で示せるので新規スポンサー獲得や継続など協賛価値の提示への根拠になる。

13

⑥ 創生人材センター調査活動報告（国内調査、海外調査）

⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

なぜ人はここに“居続けたくなる”のか？



「居続けたい」とは何なのか？



想定するターゲット
年齢：20～30代
職業：クリエイター・ITなどのノマドワーカー
困りごと：同じ空間で使い方が混同してしまう
→「交流」が思い切りできない
声がうるさい！

居続けたい場所

- ・家のベッド
- ・電車
- ・デスク

居続けたくなる要因

- ・集中できる環境（ON）
 - ・のんびりできる環境（OFF）
- 同じ空間に両方必要
- ・設備の充実（wifiなど）
 - ・環境の充実（解放感・個室など）
 - ・人との接点・会話・認識



自分でもできてしまう
→ワーケーションプレイスならではない

どんな仕組みで解決するか

- この空間に求めているもの
- ・オリジナル感(独自性) = 新鮮み
- 経験や刺激を得たい
- ・同じレベルや**興味**の**仲間**の**発見**や**交流**
 - ・意見交換がしたい

- 敦賀らしさ
(感じたまちの印象)
- ・自分を肯定してくれる
- つらくなった時に来たい街
- ・受容性の高さ
 - ・歩きたくなる
 - ・観光したくなるまち
 - ・シャッター街が多く、閉鎖的



貴重な体験



シャッター街

他人との交流をしやすくなる仕掛けづくりが必要

今後の展望

はじめの一步



金庫の場所へ入りやすい仕組み



自分のやりたいことを貼り出す

半年後

開いているフロアに
クッション・ソファ
(靴を脱げる空間)

⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

観光客との関係を「一度で終わらせない」ためには？

2班 山口 山口 オロ



観光客との関係を 「一度で終わらせない」ためには？

1.敦賀合宿を通して感じた、敦賀への来訪意欲

○ポジティブ

- ・人が多くないから、落ちついて、観光を楽しめる。
- ・季節ごとに行きたくなる。

○ネガティブ

- ・人がいなさすぎて、街の活気が伝わらない、さびしく感じる。
- ・観光のPRが下手すぎて、そもそも1回目も行く気にならない



2.インタビューからわかった再訪意欲

○ポジティブ

- ・きれいな景色が見れて、しっかりとパッケージ化されている場所がある
- ・氣比神宮など歴史的な建物があることと港で北前船など昔のことを知ることのできる場所が多いので歴史が好きだと行きたい場所が多い



○ネガティブ

- ・故郷とあまりにも似ているので、また来る理由がない
- ・原子力発電所が苦手な人は避けるかもしれない
- ・敦賀の魅力があまり伝わっていない。
- ・ライダーの休憩するような場所がない
- ・飲食店の安くて美味しいものが少ない



敦賀の課題

敦賀市は地元の魅力を

活かさきれていない
生み出しきれていないのでは？

3. 私達の提案 “地域発信のプラットフォーム化”

観光客

- ・フジオネWPのインスタグラムから情報をキャッチ
- ・観光客は投稿を見て、行きたい場所イベントに参加



起業家

- ・地域住民から課題を聞き出す
- ・その課題をリスト化して、共有

地域住民

- ・住民参加型で地元の良さを話し合う会
 - ・地元のイベント運営が紹介しあう会
- ↑定期的に開催

4. 既存サービスとの比較

カグヘル

- ・氣比神宮前という立地を活かしたまちなかの立ち寄り拠点
- ・観光客と地元の人が自然に交わる交流・滞在スペース
- ・イベントや展示などが行える多目的利用が可能な空間
- ・敦賀の情報（観光・地域活動・イベント）が集まる情報発信のハブ
- ・既存建物を活用したリノベーション施設で、まちづくりの象徴的存在

→敦賀の良さを知るために敦賀に行く必要がある

敦賀ビー旅

- ・知らない観光客のための情報提供をInstagramで行っている
- ・今の敦賀の雪や積雪の状態を発信することで観光客の不安や疑問にも応えられるよう発信している
- ・敦賀で新しく行われている活動の宣伝を行っている

→地元民しか知らないDeepな部分であったり地元イベントの発信が不足している

また、地域の交流の拠点としては成り立っていない

5.はじめの一步

観光客

インスタにて、地域の良さ、イベントを発信する



起業家

- 意見箱の設置
- 地元課題を解決したい、
新たなビジネスを起こしたい人を募集する

地域住民

- 地元のイベントに声掛けを行う
- WPにてイベントを実施する

⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

ワーケーションプレイスが生み出す事業への付加価値とは？



敦賀市調査 最終報告



テーマ

ワーケーションプレイスが生み出す事業への付加価値とは？

チーム3

安倍誠明

清水友翔

キン・テイビ

グエン・ヴァン・ティエン

現状の敦賀の課題

小さい子どもが、「やりたいこと」「好奇心を満たす体験」を出来る環境が不足している

環境が不足すると...

成長とともに行動範囲が広がり、市外・県外へ行く機会が増える

⇒外の充実した環境を見ると「外ならやりたいことができる」という認識が強まる



「敦賀ではやりたいことが限られてしまう」というイメージが形成される

県外に出たい気持ち が生まれる

嶺南地域の課題である「人材が残らない」ことにつながる



フジオネの付加価値・ありたき姿

Point

〈フジオネの付加価値〉

後藤さんの人脈を活かした、**人との繋がり**の創成
「リハーサルオフィス」を通じた、**実証実験の場**の提供



〈私たちが考えるありたき姿〉

子どもから大人まで、**多様な世代が交流できる環境**を整備
フジオネを「リハーサルオフィス（試し・実証の場）」として活用
➔ **子どもの「やりたいこと」を試せる場**を提供

FUJIONE WORKATION PLACE.
創造と協働の場となるコラボレーションスペースです。
体験の場として、
人々の交流と新たな価値創造を目指します。
あるべき「リハーサルオフィス」です。

私たちに



提案

1ヶ月でできること

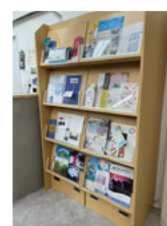
「**子どものやりたいことを語るDAY**」を実施

中期的にできること

「**自由研究をフジオネでしてみよう**」を実施

長期的にできること

「**子どもやりたいことを実験してみよう**」を実施



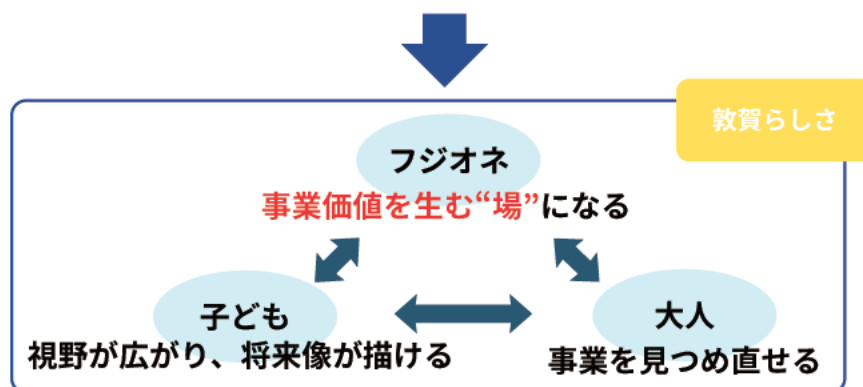
神山町教育応援プロジェクト（先行事例）

- 子どものメリット：地域や外部の大人と関わり、自分の「やりたい」を実行する経験が得られる
- 大人のメリット：教育・地域貢献を通じたやりがい獲得と、地域・人材との継続的な関係づくり
- マネタイズ：企業・個人からの寄附（ふるさと納税）を原資に、教育プログラムを運営



期待される効果・まとめ

子どもの好奇心の充足・自己肯定感の向上・自己実現への意識醸成



フジオネの活動に子どもを巻き込むことにより付加価値を最大化することができる

⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

フジオネを知らない人の隙間時間に『価値提供』を行うには




tsuruga

フジオネを知らない人の隙間時間に
『価値提供』を行うには



4グループ
大川倫太郎 近藤隼人
コウ カライ ショウ セイウ

テーマ変更の流れ

元テーマ：不便な移動こそが濃いコミュニケーションを産むか

元々考えていたこと

- ・敦賀駅からここまで遠い、道中何もない
- ・駅前からフジオネまでの道のりで価値提供ができないか



↓しかし...

- ・フジオネは現状の活用法だと、元々目的ある人しか来ない
- ・導線強化しなくても目的がある人は来る
- ・導線を強化してもフジオネを知らない人が来た時に価値提供ができない

↓ここからの方針

目的のない人に価値提供できる方法を考える

まちあるきでの気づき

- ・敦賀市は一つの観光地が滞在時間が短くなる
- ・目的地で来る街ではない（乗り換えなどで降りるだけのところ）



想像した課題

- ・観光客やこの街を通るだけの人は時間を持って余しているのではないか（隙間時間がある）

新テーマ

フジオネを知らない人の隙間時間に
『価値提供』を行うには？

提案内容

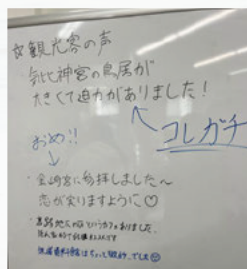
ユーザー同士でどこに行ったか、ここが良かったなどを
ホワイトボードかノートなどで共有する場所にする。
（フジオネを核とした数時間の敦賀体験の提供）

これを考えた理由

- ・ホテルという旅人が多い施設である
- ・街歩きで細い道に良さげなお店が多い



ホワイトボードや壁に
直接書き込めるようにする！



- ・情報が視覚でわかりやすい
- ・ユーザーの体験による感想の共有がしやすい

カグ〜ルとの差別化点

カグ〜ル

チラシや案内人による
一般的な観光地紹介



観光地の詳細な情報や
ルートなどが知れる

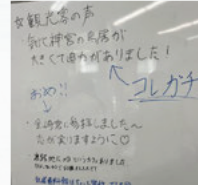


フジオネ

ユーザーの感想での
観光紹介



体験をもとにした
意見を知れる



⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

なぜ「夜の敦賀」は観光客が少ないのか

なぜ「夜の敦賀」は観光客が少ないのか



グループ5

森 泰

中平 悠基

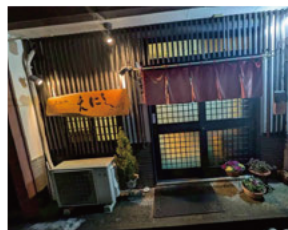
高石 悠人

チョコティ・カーティック

01 現地調査からの気づき



駅前から商店街までは除雪が行き届いているため簡単に行くことができる



夜間、営業している飲食店が多い。
後藤さんもフジオネの宿泊客の大半が
夜は外食をすると仰っていた。

02 仮説

観光客は同行者と飲食店に入って
食事を楽しんでいるため外におらず、
少ないように見える



観光客の食に対する需要が高い

03 食についての情報発信の実態



観光についての広告はあるが、飲食に関するポスターはない



商店街によって販売に対する意識の差がある
→観光客が知れる飲食店の数に限りがある

04 提案

1度の食事で訪れる店舗数は限りがあり、敦賀商店街は食べ歩きの文化も少ない
→敦賀に来た人が複数の飲食店を知れる機会が少ない

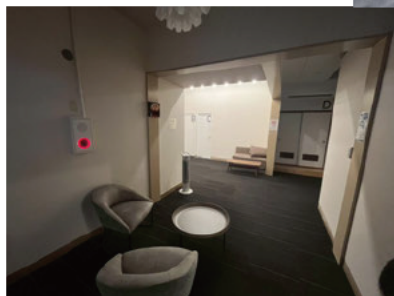
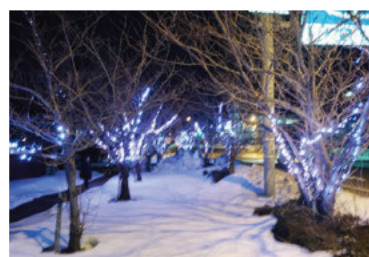
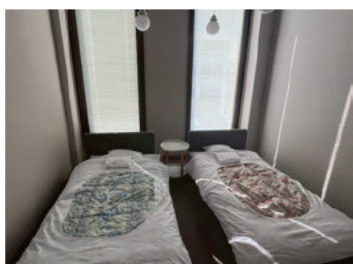
敦賀商店街グルメ博覧会を実施！

→フジオネを拠点として多くのお店を知れる機会を創出する



「新田珈琲」を軸に
第1回企画を開催！
中道源蔵茶舗など
新田珈琲を中心として
つながる飲食店に共同
開催を依頼する。

05 なぜフジオネワーケーションプレイスなのか





THANK YOU

ご清聴ありがとうございました。

⑥-1 国内調査（敦賀市・令和8年2月）

未開拓層へのアプローチ

敦賀合宿最終発表

未開拓層へのアプローチ

調査期間: 2026年2月9日～2月10日
発表者: 平川 大悟 後藤 健史郎

目次

- 仮説
- 敦賀での発見
- 提案1
- 提案2



敦賀での発見

インタビュー調査 in本町

質問内容

どのようなものがあればレンタルスペースや
ワーキングスペースを利用がしたいか？

- ・設備が整っているところがいい
- ・防音スペース欲しい
- ・価格設定を安くしてほしい
- ・フリードリンクが欲しい

調査期間: 2026年2月9日 PM20:00頃

調査人数: 15人 (社会人)

仮説

利用目的別に金額・プランを
作ることで需要があるのではないか？

一日目の本町での
インタビュー調査など
敦賀を歩いてみて、
利用者別に金額を変えること
で需要があるのではないか？

敦賀での発見

インタビュー調査 in アル・プラザ敦賀

- ・認知がない
- ・何をしているところかわからない。
- ・敦賀の人は熱しやすい冷めやすい
- ・知っていたら使ってみたい
- ・無人カフェみたいなどこなら行きたい

調査期間: 2026年 2月10日

調査人数: アル・プラザ(昼) 20人



Point!

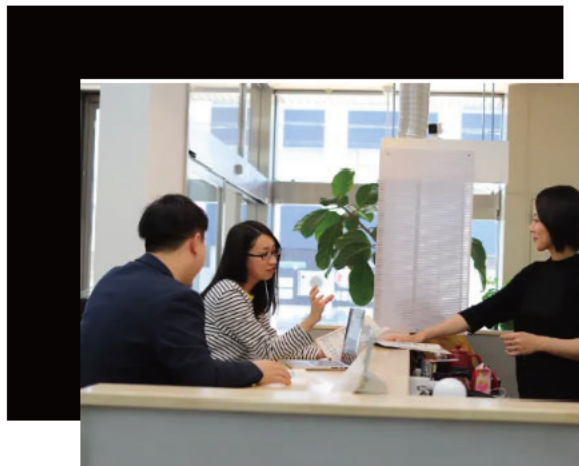
価格設定が問題ではなく、認知度の低さが問題だった！

提案1

- 壁面広告
- 外装広告

 屋外広告

 ラミネート



提案2

福井大学×敦賀市民

イベント開催



まずはこの場所に来てもらえる
機会を作る

認知をしてもらう



FUJIONE WORKATION PLACE
の利用例を理解する。

リピート



興味のある方や、団体様に
今後も利用していただく。

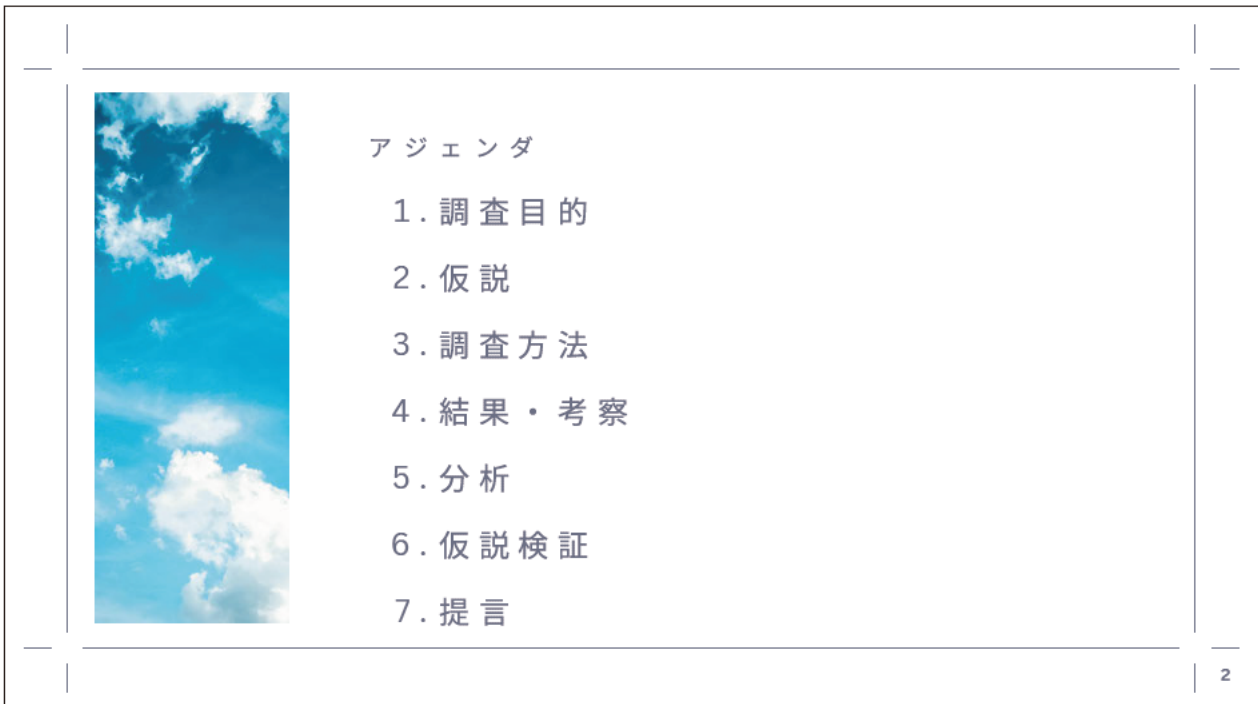
Point!

今までの集客では行き届いていなかった分野から新たな顧客を探す！

ご清聴ありがとうございました

⑥-2 国内調査（小浜市・令和8年3月）

新幹線延伸による飲食店の変化



01 | 調査目的

3



01 背景 | 調査目的

北陸新幹線延伸で観光客増加が見込まれる中、小浜市飲食店の値上げも予想される。

飲食店と観光客のニーズを知ること
で、観光振興と飲食環境の方向性を
探ることを目的とする。

4



01 背景 | 先行事例1

福井駅前に新商業ビル「東参道ビルヂング」完成に伴いミシュラン一つ星の和食店など入居

福井駅周辺の店舗改修などを支援する「県都まちなか再生ファンド」を活用し、老朽化した建物を建て替えミシュランガイド一つ星の和食店「料理屋みや崎」が同市の繁華街「片町」から移転し入居。2、3階にはラウンジやバー、会員制の高級時計店が出店するなど新幹線延伸により駅の周りでは高価格帯のお店が増えている

引用：福井新聞

5



01 背景 | 先行事例2

飲食店における地域空間体験の典型的構造に対する観光者の選好構造 —大分県由布市由布院地区での試行的研究—

飲食店における地域空間体験の典型的構造は、観光客と料理と店舗との関係から、“生産地”、“生産者”、“屋内”、“屋外”、“精算”の5つの概念を見出した。観光者の“精算”意識が向上するときに“屋外”と“生産地”の複合的な組合せが関係していることが明らかになった。

引用：J-STAGE 観光研究
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jitr/29/2/29_5/_article/-char/ja

6

02 | 仮説

7

02 仮説



H1 「北陸新幹線延伸で、小浜市飲食店は高級路線にシフトする」

H2 「観光客は価格よりも、小浜特有の体験を重視する」

「食」の体験要素

「観光客が単に食事を摂るだけでなく、視覚・味覚・嗅覚・触覚・聴覚など五感や文化体験を通じて、地域の魅力・価値を実感できる食に関する活動やサービス」



8

03 | 調査方法

9

02 調査方法 | 調査対象

- **飲食店**：稲村食堂、旬彩厨房、濱の四季、
グリーンカフェ緑茶房、 濱の湯、津田孫兵衛、
ブランジェリーオカモト、ごそん、酒葉屋どんど、La
Verita
- **観光客**：道の駅若狭おばま、吉のぶ、濱の四季、
フィッシャーマンズワーフ

10

02 調査方法

• 方法

飲食店 アンケート(口頭、電話)

観光客 アンケート

• 分析観点

飲食店の戦略(価格・体験導入)

観光客の期待(満足度分析・ニーズ抽出)

クロス集計

11

03 調査方法

観光客へのアンケート

5. 小浜市での食事について各項目の満足度を1~5段階で回答してください。

	1非常に不満	2不満	3どちらでもない	4満足	5非常に満足
1. 価格の安さ					(12345)
2. 料理の質					(12345)
3. 小浜らしさ					(12345)
4. 体験型要素の魅力					(12345)
5. 接客・サービス					(12345)
6. 店舗の雰囲気					(12345)
7. アクセスの良さ					(12345)
8. SNS映え					(12345)

6. 小浜市での食事の際、一食あたりどのくらいの金額使いましたか。

(円)

12

03 調査方法

飲食店へのアンケート

1. 店舗情報について教えてください。

店舗名について教えてください。 ()

客層(地元客と観光客の割合)について教えてください。 (:)

2. 現在の価格帯について教えてください。

昼食の平均価格帯について教えてください。

1,000円未満 2,000円未満 4,000円未満 4,000円以上

夕食の平均価格帯について教えてください。

2,500円未満 5,000円未満 10,000円未満 10,000円以上

3. 北陸新幹線延伸後の価格戦略について教えてください。

高くする予定 変えない予定 安くする予定

変更予定のある場合どの程度変更しますか。 (% 増 / 減)

4. 現在導入している「小浜らしい食の体験」について教えてください。(複数選択可)

- 地元食材(若狭くじ、サバなど)の使用 郷土料理(へしこ、鯖寿司など)
 漁港直送の新鮮魚介 食文化解説や調理体験 季節イベントとの連動メニュー
 その他 ()

5. 今後「小浜らしい食の体験」について新たに取入れたいものはありますか。

はい いいえ

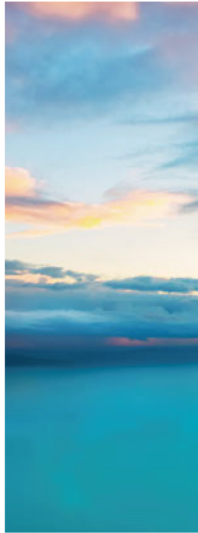
5ではいと答えた店舗のみお答えください。

6. 具体的にどのようなものを導入する予定ですか。

- 体験型メニュー(調理体験/握り体験/魚さばき実演など)
 テイクアウト・お土産商品の強化
 英語など多言語メニューの導入
 SNSや写真映えを意識した盛り付け・撮影スポット設置
 店内展示や食文化の解説(ストーリー性の導入)

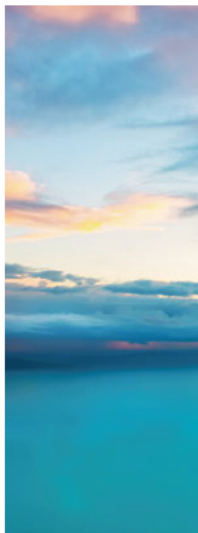
04

結果・考察



04 結果・考察

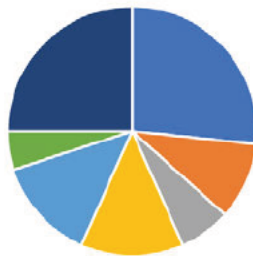
観光客アンケート：61件
飲食店アンケート：11件



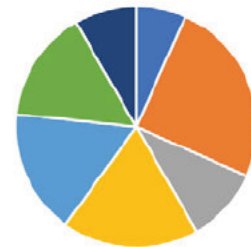
04 結果・考察

-単純集計-
観光客の特徴

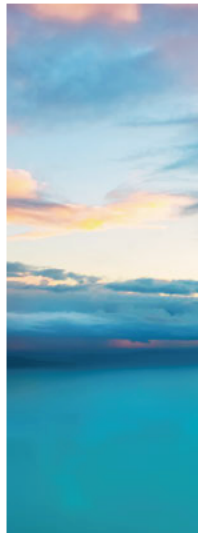
出身割合



年代別割合



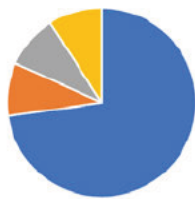
■ 福井・石川 ■ 愛知 ■ 岐阜 ■ 滋賀 ■ 大阪・兵庫 ■ 東京 ■ 京都 ■ 10代 ■ 20代 ■ 30代 ■ 40代 ■ 50代 ■ 60代 ■ 70代



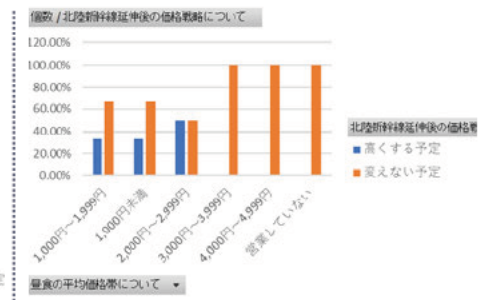
04 結果・考察

- 新幹線延伸に対してまだ実感がなく、お店側が自分事としてとらえられていないため、商品の値段を変動させる店は少ない
- 価格を上げようとするお店は低価格なお店が多い傾向
- また、調査したお店でインスタの運営を行っていたのは4/11件

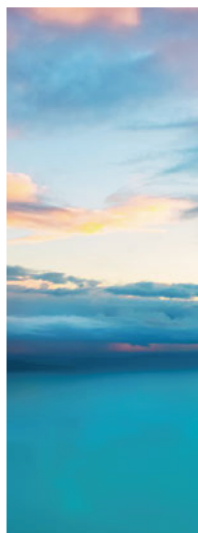
飲食店の価格戦略の予定



■ 変える予定はない ■ 5%増加予定 ■ 10%増加予定 ■ 15%増加予定



17



04 結果・考察

1. 年代 × 満足度 × 一食金額

10代・20代

SNS映え・体験型要素を高く評価（特に濱の四季、カフェ、こだま食堂）、支払い金額は1,800～2,600円と2,000円付近に集中

30代・40代

「小浜らしさ」「質」を評価する傾向、支払額は2,000～3,000円前後

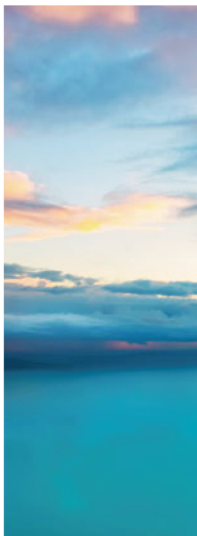
来訪目的が観光や仕事、釣りなど複数ある

50代・60代以上

支払額は高め（3,000～7,000円）、SNSに対する満足度が低い

18

05 | 分析



05 分析

1. クロス集計

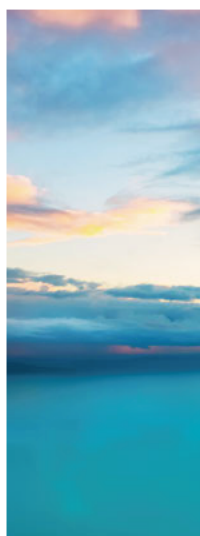
複数の変数を組み合わせて集計し、属性ごとの傾向や差異を明らかにする分析手法

SNS映え×価格帯×年齢

平均 / SNS映え	列ラベル							
行ラベル	10	20	30	40	50	60	70	総計
～1000円		2.00				3.00	3.00	2.67
1001～2000円	4.00	4.20	4.00	3.50	3.75	3.00	3.00	3.73
2001～3000円	5.00	5.00	2.33	3.00	4.75	3.00	4.00	3.92
3001～4000円			3.00			4.00		3.50
4000円以上		3.00		3.50	4.00	4.50	3.00	3.67
総計	4.25	4.00	3.00	3.45	4.20	3.44	3.20	3.70

10代、20代、50代は高い値だが30代からの評価が低い

価格帯があがっても評価が上がるわけではない



05 分析

1. クロス集計

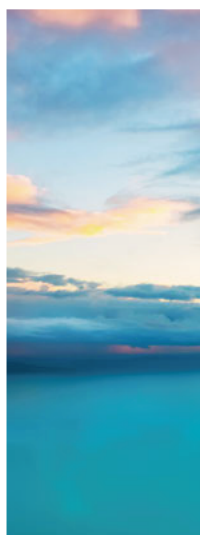
複数の変数を組み合わせて集計し、属性ごとの傾向や差異を明らかにする分析手法

小浜らしさ×価格帯×年齢

平均 / 小浜らしさ	列ラベル							
行ラベル	10	20	30	40	50	60	70	総計
～1000円		2.00				2.00	3.00	2.33
1001～2000円	4.67	4.20	4.50	4.00	4.00	3.50	3.50	4.06
2001～3000円	4.00	5.00	3.00	4.00	4.75	4.00	4.00	4.15
3001～4000円			3.00			3.00		3.00
4000円以上		2.50		4.50	4.00	3.50	4.00	3.67
総計	4.50	3.93	3.50	4.09	4.30	3.33	3.60	3.90

10代、20代、40代、50代は高い値だが30代からの評価が低い

21



05 分析

1. クロス集計

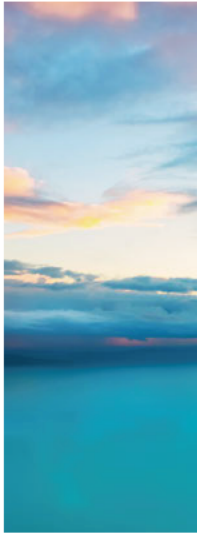
複数の変数を組み合わせて集計し、属性ごとの傾向や差異を明らかにする分析手法

体験型×価格帯×年齢

平均 / 体験型要素	列ラベル							
行ラベル	10	20	30	40	50	60	70	総計
～1000円		1.00				3.00	4.00	2.67
1001～2000円	2.67	2.60	4.00	2.88	2.00	3.00	3.00	2.76
2001～3000円	4.00	3.50	3.00	2.00	3.00	3.00	4.00	3.15
3001～4000円			3.00			3.00		3.00
4000円以上		4.00		4.00	4.50	4.00	2.00	3.89
総計	3.00	2.80	3.33	3.00	2.90	3.22	3.20	3.02

10代、20代の若者の体験型と価格帯において特に正の相関（相関係数0.58）があるので、体験型は若者向けが良いことが示唆される

22



05 分析

1. 相関分析(体験型×価格帯)

誰が支出しているのかどの年代に体験型のアプローチをすべきか特定するために分析

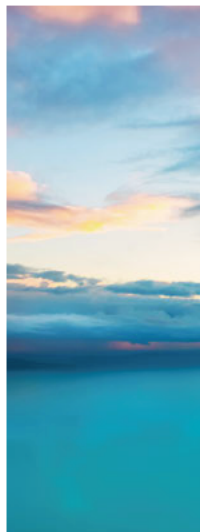
値が1に近いほど2項目の相関が高くなる。

10、20代	30、40代	50代以上	
	0.58	0.22	0.37

10代、20代は特に価格帯が上がるにつれて体験型要素の満足度が上がることがわかる。

価格の満足度と体験の間には相関あり

06 | 仮説検証



06 仮説検証

仮説1

飲食店はほとんど価格を
変更しない

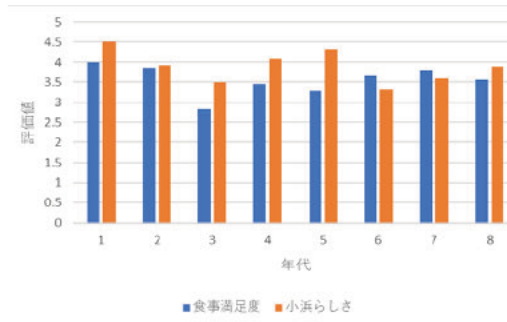
→新幹線延伸を

自分事として考えていない

仮説2

相関分析の結果、60,70歳以外
は価格よりも体験を重視する
ため一部立証

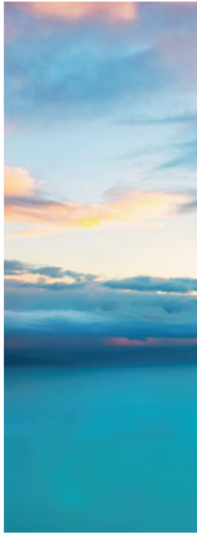
→特に10、20代の若者は体験
を重視する傾向にある



25

07 | 提言

26



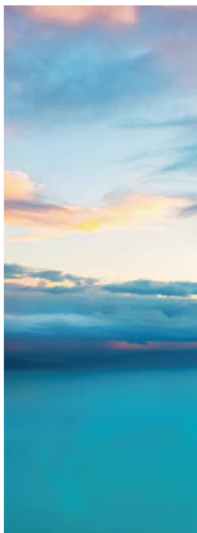
07 提言

小浜食体験-グルメグリ-

小浜の食体験の活性化へグルメ×巡る



27



07 提言

小浜市の施策案

「食のまちづくり」

条例や計画を策定し、御食国の歴史を軸に食文化・食育・体験

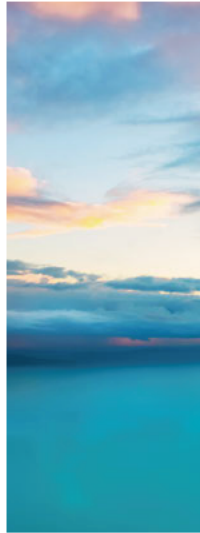
「新幹線街づくり」

「住む人・訪れる人が心惹かれるまち」を目指すまちづくり

狙い

1. 食文化の魅力可視化 - 御食国の歴史・食体験を促進
2. 周遊促進 - 体験後に次店舗へ誘導して滞在時間延長
3. 若者集客 - SNS映え・体験型で新規観光客を呼び込
4. 地域経済活性化 - 複数店舗・商品への消費波及

28



07 提案内容

小浜食体験-グルメグリ-

飲食店への訴求

- データから、体験型メニューは価格が高いほど満足度が上がる傾向
- →興味の薄い飲食店にも体験価値で訴求

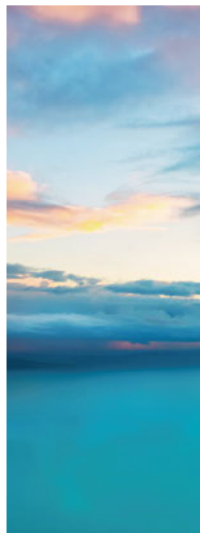
SNSでPR

- 参加店の「食の体験」PR動画を市が発信
 - →五感の中で最も訴求力の高い要素をピックアップして動画化
- 若者にターゲティング
#グルメグリ小浜

一口体験

- 認定メニューを体験した観光客には、小浜の特産（干物や調味料など）を一口提供軽い宣伝も兼ね、次の店舗や商品の周遊を促す

29



07 提言

先行事例

少量試食の効果

少量試食は心理的負担が小さく五感体験で満足度向上、次の店舗訪問や購買意欲を促進する



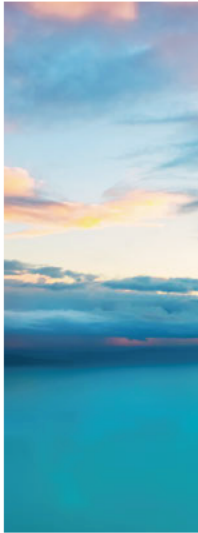
静岡県富士宮市（富士宮やきそば）

専門店だけでなく、喫茶店やスナックなど多くの店が「富士宮やきそば」をメニューに載せている。

- 「富士宮やきそば学会」が定義した特徴（蒸し麺、肉かす、だし粉）を守れば、どんな業態の店でも提供可能にした。
- 観光客にとって「わざわざ行列店に並ばなくても、地元の馴染みの店で名物が食べられる」という選択肢が生まれ、周辺の飲食店への顧客流入に成功した。

https://www.researchgate.net/publication/228923232_Experiential_Marketing_Schmitt

30



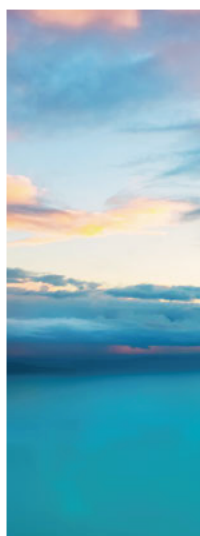
07 提案内容

小浜市 食体験施策で得られる効果

- 観光客の満足度向上体験型メニューを掲載
→ 高評価・SNS拡散
- 飲食店の訴求力向上：市公式PR動画で自店の強みを発信
- 周遊・滞在時間延長特産一口提供
→ 他店舗・観光地への誘導
- 地域ブランド価値向上：御食国の食文化・小浜らしさを広く発信
- 市民・事業者の参加意識向上：参加店舗のメリットを明示
→ 施策の定着促進

31





戦略提言: 体験価値の最大化と全顧客層への展開

- 戦略の軸:
 - 「小浜特有の体験価値の最大化」を最優先課題
- 価格設定の原則:
 - 単なる値上げは不可。体験型要素のコストを反映させ、顧客が価値を納得できる形で客単価の引き上げを正当化する。
- 投資の優先順位:
 - アクセス改善や低価格競争への投資は回避。
 - 「料理の小浜らしさ」「体験型要素」「接客サービス」といった、高支出層と強く関連する評価項目への投資を最優先する。



目次



- 01 調査背景
- 02 調査内容
- 03 調査結果・分析
- 04 提案と効果

調査背景

01

01 小浜市の特徴と背景

調査背景

北陸新幹線延伸に
開通に向けた新し
進めようとしてい

延線
小浜・京都ルート
京都まで19分



2024年
北陸新幹線敦賀開通

敦賀開業から約2年



調査内容

02

02 調査内容

調査目的

北陸新幹線延伸により、小浜市の観光に対して
観光客と地域住民が抱く期待や不安を明らかにする。
特に、観光地としての発展（小浜に求められる要素）と、
小浜らしさの維持（小浜に残してほしい要素）の両立に向けて、
課題点と工夫点を探り、今後のまちづくりへの提言を行う。



仮説

新幹線延伸後、
小浜市は外部からの新規店舗の参入が望まれ、
独自の文化や景観といった小浜らしさが軽視されていく。

新規参入が増える

観光客と地元住民は
新規参入を望んでいる

小浜らしさが失われる

観光客と地元住民は
小浜らしさを重視していない

調査方法

- 現地調査
- アンケート調査



対象者 : 地元住民と観光客

場所 : フィッシャーマンズワーフ、バロー、
道の駅若狭おばま、おばまSC

分析観点 : 小浜の現状評価、小浜らしさの重要度評価、
新幹線延伸による変化予測、属性別比較

分析方法

• t検定

2つの集団の平均値に、統計的に意味のある差があるかを調べる手法

• クロス集計

複数のカテゴリ変数を掛け合わせ、分布や傾向を表に整理する方法。
顧客属性や傾向を直感的に比較したいときに使用し、
「カテゴリ同士の関係をざっくり見る方法」として用いられる。

• 重回帰分析

複数の要因が目的変数にどの程度影響するかを数値的に示す統計手法。
結果に影響を与える要因を知りたいとき、
「影響の大きさを数値で測る方法」として用いられる。

調査結果・分析

03

現地調査

夏季調査

調査日：令和7年8月18～20日

小浜の海を体験



アンケート調査



新駅建設予定地の探索



新駅予定地周辺は建物が少なく、自然豊かな風景などに小浜らしさを感じた

夏季調査

アンケート内容

観光客 有効回答件数：75件

1. 回答者について
2. 行動範囲
3. 観光体験の評価（5段階評価）
4. 小浜らしさの重視度
（5段階評価・記述）
5. 新規外部参入への意向
（5段階評価・記述）

地元住民 有効回答件数：73件

1. 回答者について
2. 生活や観光環境の評価
（5段階評価）
3. 小浜らしさの重視度
（5段階評価・記述）
4. 新規外部参入への意向
（5段階評価・記述）

観光客の満足度

係数:影響の大きさを示す値 P-値:統計の有意度合(信用度合)

要素	係数	P-値
観光施設の充実度	0.424784	0.00000692
宿泊施設の魅力	0.22674	0.007268

「観光施設の充実度」
「宿泊施設の魅力」が
正の影響を与えている



有効回答件数：75件

観光施設の充実度

観光客は「訪れる場所が充実しているか」を重要視しており、選択肢が多いと滞在時間の延長・リピーター化につながる。

宿泊施設の魅力

宿泊は「食」「体験」「温泉」などをパッケージ化できる強力な観光資源。単に泊まるだけでなく「小浜らしさを体験できる宿泊施設」(例：海鮮料理、歴史的建築、温浴施設との連携)が求められている。

地元住民の満足度

係数:影響の大きさを示す値 P-値:統計の有意度合(信用度合)

小浜に残してほしいこと	係数	P-値
寺社・歴史文化	0.439686	0.000355
価格の手頃さ	0.255253	0.007045
素朴さ(観光地化されすぎ ていない)	0.251081	0.013356

「寺社・歴史文化」「価格の手頃さ」
「現在の生活環境」が正の影響を与えている

有効回答件数：73件

寺社・歴史文化

地元住民は、小浜が持つ歴史的背景や寺社仏閣に対して誇りや愛着を持っており、それが満足度向上につながっている。

価格の手頃さ

小浜らしさの一つである「素朴で気軽に楽しめる環境」を維持するには、観光開発によって価格水準が大きく変動しないことが重要。

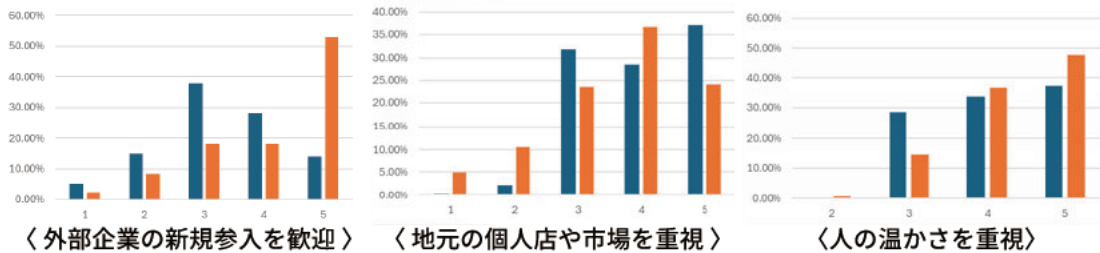
観光地化されすぎではない

地元住民は観光振興を全面的に否定しているわけではないが、「自分たちの生活環境が犠牲にならない範囲」での発展を望んでいる。

地元住民の傾向

有効回答件数：73件

■観光客
■地元住民



住民は「新規参入を歓迎する」の評価が高い。また、「個人店や市場」「人の温かさ」の評価も高い

新規参入する店舗が地域の食材を活用したり、個人店と共同で商品開発・イベントを行ったりすることで、新規性と小浜らしさの共存が実現

新規参入歓迎度t検定

	観光客	地元住民
平均	2.853333	3.616438
分散	1.316036	1.823059
観測数	75	73
プールされた分散	1.566075	
仮説平均との差異	0	
自由度	146	
t	3.70885	
P(T=<t) 片側	0.000148	
t境界値 片側	1.655357	
P(T=<t) 両側	0.000295	
t境界値 両側	1.976346	

新規参入への意識に有意な差がみられた

- 住民は利便性の向上を期待してチェーン店を強く歓迎していると考えられる。
- 観光客は小浜らしさを重視し、チェーン増加に価値を見出していないと考えられる

このまま外部資本（チェーン店）が増えると、「住民の利便性」と「観光の魅力（小浜らしさ）」が共存できない可能性がある

歓迎する業種と単純統計

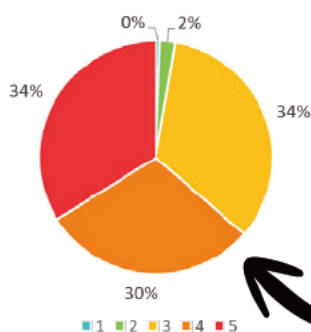
	観光客 (N=75)	地元住民 (N=73)
カフェ	21	32
ファストフード	23	32
ホテル	20	9
ドラッグストア	4	11
その他	2	8

自由・複数回答

観光客、地元住民ともに「カフェ」「ファストフード」を歓迎する票が多い

「小浜らしさ」の重要度評価

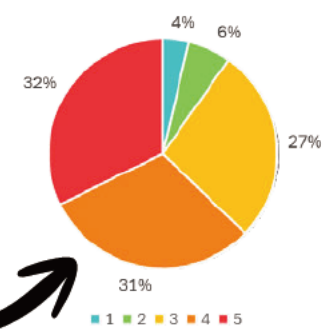
5：非常にそう思う
4：ややそう思う
3：どちらともいえない
2：あまりそう思わない
1：全くそう思わない



〈観光客 (N=75)〉

新幹線延伸後、小浜市では外部からの新規参入に対する需要が増加し、独自の文化や景観といった小浜らしさが軽視されていく

地元住民と観光客ともに小浜らしさを重視している



〈地元住民 (N=73)〉

アンケート結果(自由記述)

観光客

1. 小浜で「残してほしいもの」
 - ・海
 - ・景観
 - ・食文化
 - ・宿泊施設 など
2. 小浜で「増やしてほしいもの」
 - ・飲食店
 - ・体験施設・イベント
 - ・交通の利便性 など

地元住民

1. 残してほしい「小浜らしさ」
 - ・海
 - ・景観
 - ・食べ物
 - ・人柄 など
2. 新幹線開通後に、増えてほしい施設・サービス
 - ・交通インフラ
 - ・レジャー施設
 - ・ショッピングモール など

追加調査

冬季調査

調査日：令和8年3月25日

新駅建設予定地の探索



ヒアリング調査



⑤-2 国内調査（敦賀市・令和7年2月）

敦賀調査活動2025・Dチーム

04 提案

冬季調査

新駅予定地について周辺調査



南側



北側



空間の印象

在来線の南と北で異なる性質を持つ。

南側 → 住宅地。小浜駅の方とは違った雰囲気。

北側 → 田園景観が広がる。警察署や工場がある。

04 提案

冬季調査

追加ヒアリング調査

観光客

美味しいものが楽しみで、友人に会いに来た。敦賀に迎えに来てもらった。
(大阪・女性)

初めて来訪し、一時間だけ滞在。食を求め、フィッシャーマンズワーフに行った。(オーストラリア・男性)

地元住民

東小浜駅付近

在来線は中高生の交通手段として残してほしい。
(50代・女性)

マナーが悪い人などの観光公害が不安。
(70代・女性)

寺社などの文化面やブランド魚などを残してほしい。(20代・女性)

ありたき未来

条件付き歓迎

- 地元住民と観光客は新規参入を望んでいる傾向が高い
- 地元住民と観光客は小浜らしさを重視している



→ 小浜への新規参入に対して、**小浜らしさを求めていく必要がある**

地産地消

食文化
価格の手頃さ

地域雇用

地元の個人店や市場
人の温かさ

景観配慮

寺社・歴史文化
観光地化されすぎていない
(素朴さ)

提案と効果

04

提案

「外資・チェーン参入条件」の設定

地産地消・地域雇用・景観配慮



小浜パートナーチェーン
認定証を発行



無秩序な外部資本流入ではなく、小浜らしさを守りながら発展していける！

小浜の政策や認定制度

第3期小浜市総合戦略

総合計画によるめざす将来像

みんなで描く、悠久の歴史と風土が活きるまち～新たな時代の御食国若狭おばま～

基本方針：市民一人ひとりが活躍し、豊かな生活を実感できるまち

基本目標1：「ひとづくり」新たな時代を担う人を育むまち

基本目標2：「しごとづくり」活力ある産業と雇用の創出による稼ぐまち

基本目標3：「まちづくり」地域資源を活かし安心して暮らせるまち

小浜市地産地消をすすめる店認定事業

- ・お店に付加価値を生む
- ・特に強い制限なし → 努力目標が多い
- ・認定証が交付され、認定看板の購入が許可される
- ・市のHPなどでPR



事例紹介

地産地消 愛媛県今治市の学校給食

地産地消を推進するため、独自の推進条例を制定
学校給食における地元産食材の利用率（品目ベース・金額ベース）を高く設定し、
達成状況を公開

地域雇用 岩手県北上市

工場やオフィスが進出する際に支払う「**企業立地補助金**」の要件に、
具体的な雇用人数や居住条件を定めた

- 新規雇用10人以上かつ、その大半が市内居住者であること
- 企業立地に伴う補助金交付の条件として、新規地元常用雇用者数などの基準

地産地消の推進や地域雇用の創出を行うことで帰属意識の向上を目指す

事例紹介

景観配慮 京都府京都市

2007年市内全域を地域特性に応じて区分し、看板の大きさ、高さ、
色（マンセル値による指定）を詳細に規定



- 周囲の景観に合わせて「黒色」や「木製・銅製のシックな色調」に変更
- 「暖簾（のれん）」をくぐって入る畳敷きの店舗



- 店舗正面のガラス面や軒下にも木目調のデザイン
- 看板の背景色を全面的な青ではなく、「白地」や「茶色・黒色」に変更

構造や色彩を工夫することで小浜の町に合った景観を維持できる

私たちの提案について 具体案



地産地消

現制度と同じ強度or年間
調達金額の？%以上を、
小浜市内の生産者または
「地産地消認定店」から
仕入れること。



地域雇用

店長職を含む全従業員
の？%以上を市内居住
者から採用すること



景観配慮

小浜の町並み（商家
や漁村風景）に調和
する低彩度・木質化
のデザインを徹底す
ること

認定チェーンには・・・

PR支援

小浜の食器の提供

駅前優先的区画割り当て

などの特典

非認定チェーンにはメリットなし（出店は自由）

個人店との共存・・・

限定メニューの共同開発

特産物を使用

などをチェーン店との共存

具体例(ファストフードの場合)

住民と観光客双方が誇れる
“小浜ブランド”を築くことができる

- ・ 価格の手頃さを維持しつつ、地元食材を 期間限定メニューに導入

例) 「小浜限定・若狭牛バーガー」「鯖バーガー」 など

鯖バーガー



- ・ 店舗の内外装を、景観に合わせる

例) 控えめな看板色、瓦屋根風デザイン など

- ・ 地元の高校生・大学生のアルバイト採用枠を増やす
→ 地域雇用につながる



提案による効果

第3期小浜市総合戦略

基本目標1：「ひとづくり」新たな時代を担う人を育むまち

- 産業のデータ化により3S学習への利用やふるさと教育の推進に繋がる。担い手育成のきっかけづくり。

基本目標2：「しごとづくり」活力ある産業と雇用の創出による稼ぐまち

- 安定した雇用の確保。地域のブランド化。横のつながりを生み出し、エリア化や普及促進を狙う。

基本目標3：「まちづくり」地域資源を活かし安心して暮らせるまち

- 対話の機会を創出し、まちづくりへの参画を促す

スケジュール

短期

- 小浜の名産に関するデータ化
(収穫量や収穫時期、生産量や生産時期など)
- 認定基準の設定
- 個人店への協力依頼
- 市の広報強化
(特典の価値を上げる)

中期

- 景観重点地区の拡大と色彩規制
- 認定店の優遇税制
- 補助金の支給

長期

小浜市地産地消
経済圏の構築



ご清聴ありがとうございました!

⑥-2 国内調査（小浜市・令和8年3月）

ふるさと納税を軸とした観光戦略

C班

ふるさと納税を軸とした 観光戦略

福井大学 工学部
経営・技術革新工学研究室

青山天颯 加藤健斗

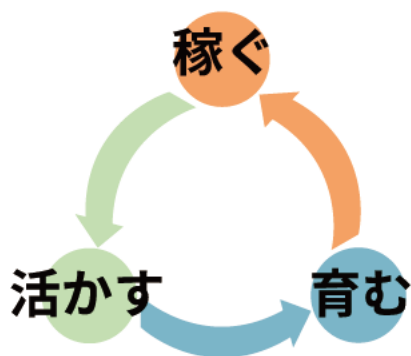


1. 背景



調査の背景

- ・小浜市長が掲げる政策(循環システム)



稼ぐ 短期・中長期の財政改革

計画では小浜市の貯金（財政調整基金）はこれから4年で6.2%減少見込み。ふるさと納税を4年で10億円にし、市役所の経営感覚・経営力を強化することで財政を改革します。

活かす ブランド戦略で選ばれるまちへ

北陸新幹線の小浜・京都への早期延伸と並行して、テクノロジーを取り入れ小浜がもつ食文化や地域産業などの豊富な資源のブランド化を徹底し、外からの需要・投資・人材・観光を呼び込みます。

育む 徹底的な若者流出対策

20年後には22,000人にまで減る予測の小浜市の人口。兵庫県明石市での成功事例などを参考に徹底的な子育て・教育支援による経済循環を生み、若者流出・人口減少を防ぎます。



小浜市長が掲げる「稼ぐ」「活かす」「育む」の循環システムの中でも、「稼ぐ」が最重要だと考え、ふるさと納税を4年で10億円にする計画に着目した。

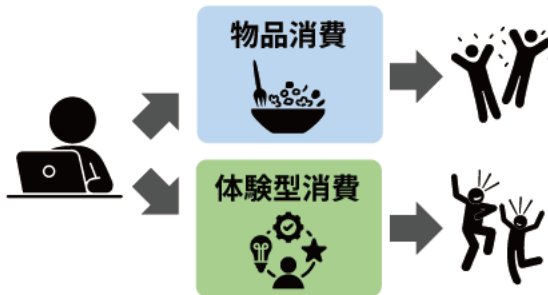
2. 仮説

仮説H1.2

H1: 体験型消費を行った観光客は、物品消費中心の観光客に比べて旅の満足度が高い

H2: ふるさと納税の体験型返礼品は、物品返礼品よりも旅行誘引効果が高い

・ H1のイメージ



・ H2のイメージ



3. アンケート

アンケート内容

【小浜市観光アンケート】

※本アンケートは小浜市への観光意欲やふるさと納税の活用について調査するためのものです。

基本情報について教えてください。

1. あなたの年代を教えてください。 (1) 10代 (2) 20代 (3) 30代 (4) 40代 (5) 50代 (6) 60代以上

2. あなたの性別を教えてください。 (1) 男性 (2) 女性 (3) その他

3. お住まいの地域を教えてください。 都道府県名: _____

4. 今回の旅行での主な移動手段を教えてください。(複数回答可)

(1) 自家用車 (2) 電車 (3) バス (4) 飛行機 (5) その他 _____

5. 旅行を計画する際に、検索ツールに用いる移動手段は何ですか。(複数回答可)

(1) 自家用車 (2) 電車 (3) バス (4) 飛行機 (5) その他 _____

6. あなたの小浜での観光体験について教えてください。

7. 小浜市での観光における全体の満足度を教えてください。(複数回答可)

(1) とても満足 (2) 満足 (3) 普通 (4) 不満 (5) とても不満

8. 今後、小浜市を再訪したいと思えますか。 (1) はい (2) いいえ (3) わからない

ふるさと納税に関する質問について教えてください。

9. ふるさと納税の活用経験はありますか。 (1) ある (2) ない

10. (9)で「ある」と答えた方のみ)どのような返礼品を選んだことがありますか。(複数回答可)

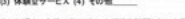
(1) 食品 (2) 工芸品・物品 (3) 体験型サービス (4) その他 _____

11. 次のふるさと納税返礼品があった場合、今後1年以内に小浜市を訪れたいと思えますか。

A. 体験型返礼品(例: 舟作り体験、工芸体験など)



B. 体験型返礼品(例: 舟作り体験、工芸体験など)



あなたの希望順に最も近い1-4の数字を選んでください。

(1) Aの返礼品があれば訪問したい

(2) Bの返礼品があれば訪問したい

(3) どちらでも訪問しない

アンケート実施場所

- ・ フィッシャーマンズワーフ
- ・ 道の駅小浜



ターゲット：



アンケート目的

ブランド戦略を明確に策定し、効果的なマーケティング施策を検討する際、観光客がどのような**価値観**や**動機**を持ってどのような**体験に魅力を感じているのか**を理解するため。

旅行動機の中でも**ふるさと納税**に着目

4.分析結果



H1:体験型消費を行なった観光客は、物品消費中心の観光客に比べて旅の満足度が高い



t検定とは

(n=124,観光客,2025年8月実施)

2つのグループの平均値に統計的に意味のある差があるかどうかを調べるための統計的手法

観光における全体の満足度	いいえ	はい
平均	3.83	3.666667
分散	0.829394	1.275362
観測数	100	24
仮説平均との差異	0	
自由度	31	
t	0.658977	
P(T<=t) 片側	0.257388	
t 境界値 片側	1.695519	
P(T<=t) 両側	0.514776	
t 境界値 両側	2.039513	

結果

体験型消費を行なった観光客と体験型消費を行なっていない観光客で旅行の満足度に有意差は見られなかった。

考察

満足度を5段階で聞いた。体験型消費を行なった観光客(n=24)で、分散が1.27と満足度にばらつきがある。体験型消費の内容によって満足度に大きな差が生まれている可能性がある。

4.分析結果



H2:ふるさと納税の体験型返礼品は、物品返礼品よりも旅行誘引効果が高い



二項ロジスティック回帰分析とは

(n=124,観光客,2025年8月実施)

複数の要因から2値の結果が起こる確率を求め、その因果関係の強さを明らかにする「多変量解析」と呼ばれる分析手法のひとつである

帰属確率係数の推定										
あなたの来訪意向に実	取	帰属確率係数	下乗積	上乗積	オッズ比	下乗積	上乗積	Wald	自由度	P 値
4.中団の部	0.5755	0.0727	-4.7430	1.8940	1.7390	0.1757	6.5460	0.7319	1	0.3923
7.小浜市で	-0.0589	0.2110	-4.4724	0.3546	0.9429	0.3235	1.4256	0.0779	1	0.7801
8.午後、小	-1.2900	1.0317	-1.2532	0.6733	0.2753	0.0386	1.9606	1.6585	1	0.1978
9.ふるさと	0.1822	0.4312	-6.6629	1.0274	1.1999	0.1554	2.7937	0.1788	1	0.6726
定款済	1.0064	1.3445	-1.6288	3.6417	2.7358	0.1962	38.1564	0.5603	1	0.4541
4.中団の部	0.6813	0.8176	-4.9212	2.3838	1.9365	0.3980	9.8139	0.6044	1	0.4047
7.小浜市で	0.2384	0.3215	-4.3918	0.8685	1.2692	0.5759	2.3833	0.5497	1	0.4585
8.午後、小	-0.8622	1.4876	-1.7386	2.0141	0.4222	0.0238	7.4942	0.3452	1	0.5568
9.ふるさと	-0.2468	0.6526	-1.5455	1.0519	0.7813	0.2132	2.8631	0.1367	1	0.7095
定款済	-1.8000	1.9345	-5.5916	1.9916	0.1653	0.0037	7.3273	0.8658	1	0.3521
分割表										
		予測値								
	1	1	2	3						判別率
観測値	1	59	0	8						86.89%
	2	13	0	4						0.00%
	3	35	0	10						21.74%
				全体						50.81%

結果

体験型返礼品の消費と物品型返礼品の消費によって旅行誘引効果に有意差は見られなかった。

考察

- ・交通費、アクセス時間、同行者の希望など、より大きな決定要因が存在しており、体験か物品かの違いが相対的に弱かった可能性が考えられる。
- ・ふるさと納税の体験型返礼品が、本調査では来訪意向にそこまで影響を与えていないことが分かった

5.追加アンケート

アンケート内容

以下のふるさと納税返礼品について、あなたが感じる魅力度を1~10段階でお答えください。



1	2	3	4	5	6

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1.塩さば 切り身(物品、御食国ブランド) | 4.若狭 宿泊券(体験 御食国ブランド) |
| 2.ガイド付き シーカヤック体験(体験) | 5.新米ハナエチゼン(物品、小浜1位) |
| 3.若狭フグセット(物品、御食国ブランド) | 6.若狭塗箸(物品、伝統工芸品) |

6.分析結果

どのようなふるさと納税の要素を観光客は魅力と感じるのか



一元配置分散分析とは

(n=38,観光客,2025年8月実施)

1つの因子が、それぞれ結果に影響を与えているかを同時に分析する手法

		平均1	平均2	統計量	P 値
1.塩鯖切り身	2.ガイド付き シーカヤック体験	6.8684	4.3947	4.0160	0.001191
1.塩鯖切り身	3.若狭フグセット	6.8684	7.2632	6.6409	0.987167
1.塩鯖切り身	4.若狭 宿泊券	6.8684	6.7632	6.1709	0.99998
1.塩鯖切り身	5.新米ハナエチゼン	6.8684	5.3947	2.3925	0.163329
1.塩鯖切り身	6.若狭塗箸	6.8684	4.8947	3.2043	0.019135
2.ガイド付き シーカヤック体験	3.若狭フグセット	4.3947	7.2632	4.6569	8.17E-05
2.ガイド付き シーカヤック体験	4.若狭 宿泊券	4.3947	6.7632	3.8451	0.002157
2.ガイド付き シーカヤック体験	5.新米ハナエチゼン	4.3947	5.3947	1.6235	0.5839
2.ガイド付き シーカヤック体験	6.若狭塗箸	4.3947	4.8947	0.8117	0.965158
3.若狭フグセット	4.若狭 宿泊券	7.2632	6.7632	6.8117	0.965158
3.若狭フグセット	5.新米ハナエチゼン	7.2632	5.3947	3.0334	0.031955
3.若狭フグセット	6.若狭塗箸	7.2632	4.8947	3.8451	0.002157
4.若狭 宿泊券	5.新米ハナエチゼン	6.7632	5.3947	2.2216	0.232017
4.若狭 宿泊券	6.若狭塗箸	6.7632	4.8947	3.0334	0.031955
5.新米ハナエチゼン	6.若狭塗箸	5.3947	4.8947	0.8117	0.965158

結果

魅力度に関して、

1位 若狭フグセット

2位 塩鯖切り身 食マーク

3位 若狭 宿泊券 若狭フグ×体験型マーク

→物品型返礼品が、体験型や商品×体験型の返礼品より魅力度が有意に高いことが分かった。

考察

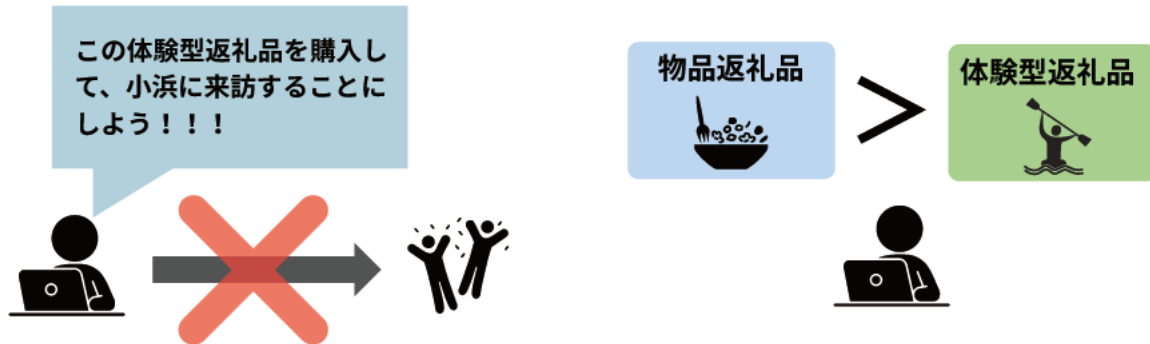
「ふるさと納税」というコンテンツを入口に寄付地域を訪れるといった旅行形態自体が旅行者の中で主流ではないことが若狭フグの魅力度が宿泊要素が入ることにより低くなった要因だと考えられる。

7.夏の調査の整理



夏の調査について

1. 体験型返礼品は、来訪誘因になっていない
2. 物品型消費の内容は、体験型消費の内容に比べて、有意に魅力が高い



8.夏以降の調査について



A班の「新幹線延伸による飲食店の変化」の調査結果比較と観光客への街頭インタビューを実施(2026年3月)

8.夏以降の調査について

A班の調査について(一部抜粋)

体験要素は観光客の支出を上げる傾向があった。

年代×満足度・体験要素

10代・20代

SNS映え・体験型要素を高く評価（特に濱の四季、カフェ、こだま食堂）、支払い金額

は1,800～2,600円が中心

体験型・写真映えを仕掛けると強く刺さる層

30代・40代

「小浜らしさ」「質」を評価する傾向、支払額は2,000～3,000円前後

観光用と仕事用とで二極化する層なので戦略を分ける必要あり

50代・60代以上

「価格」に敏感で、満足度は3点台に留まるケースが多い、支払額は高め（3,000～

7,000円）でも必ずしも満足度に直結しない

8.夏以降の調査について



体験要素は客単価向上のオプションとして機能する可能性がある

- 1.A班の分析で、体験要素は支出を上げることがわかった。
- 2.C班の分析で、体験要素は満足度を有意に上げないことがわかった。

➡ **体験要素は全体の満足度を有意に高めるものではないが、観光の主目的ではなく付加価値であることを示唆している**



8.夏以降の調査について



観光客への街頭インタビューを実施(2026年3月)



JR小浜駅と道の駅でのインタビュー

- 実家が小浜であるが、ふるさと納税を使ったことがない(50代,京都,男性)
- ふるさと納税で食材などの物品を選ぶのは、**自分が遠くて行けない場所**。車で行けるところは自分で観光して買いたい。また、車で1時間くらいの観光地だと、体験型の返礼品も視野に入ってくる。(50代,大阪,女性)
- 小浜は車で来れるので、道の駅などで買うことが多い。道の駅に置いてある商品が**ふるさと納税にあることを知らなかった**。(70代,滋賀,女性)



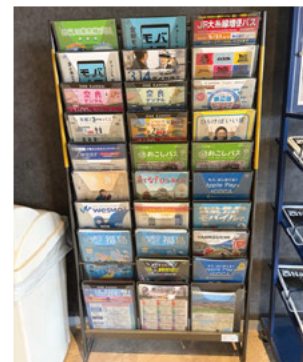
株式会社まちづくり小浜「おばま観光局」,商品開発部 藤田様

- ふるさと納税で人気一位は小浜のお米!(でも、実際に訪れた人は...)
- 体験型返礼品として、高級民宿(1泊10万ほど)を市内に展開。だが、ふるさと納税経由での**宿泊は1年に5件**であった。
- ふるさと納税を推し進めるのは良いことだと思うが、商品の生産や保存などのサプライチェーンの川上から中流が小浜はまだ弱く、限界を感じる。

8.夏以降の調査について



道の駅やJR小浜駅の待合室でも観察を行った。



ふるさと納税返礼品であるとの明記がどこにもない!!

8.夏以降の調査について



調査結果全体のまとめ

【夏の調査より】体験は「集客の武器」ではない

→体験型返礼品が来訪動機や満足度に与える影響は限定的（有意差なし）

【A班の調査より】しかし、体験は「客単価」を上げる機能を持つ

→観光の主目的ではなく付加価値であることを示唆している

【3月の追加調査より】距離によって「求める価値」が激変する

→ふるさと納税利用者の居住地域によって、返礼品に求めるニーズが異なる

【3月の追加調査より】現場の「購買」が「納税」に繋がっていない

→小浜のふるさと納税について、小浜来訪者にも訴求が足りないと感じた

9.提言



居住地に基づいたターゲットセグメンテーション戦略

体験要素



🎯 関西地域・近隣地域

- 小浜に訪れることのできる地域居住の観光客には観光地や道の駅でふるさと納税をアピール。
- 対象のふるさと納税は物品や体験を問わなくても良い可能性がある。
- 来訪客にふるさと納税品としても物産を購入できることを認知させる。

🎯 遠方地域

- 小浜の物品型のふるさと納税を重点的に認知を拡大させる。
- 来訪へのハードルは高いため、体験型返礼品はミスマッチの可能性がある。



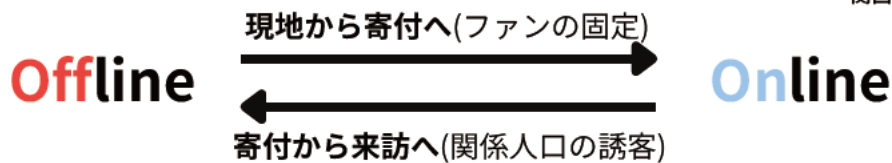
9.提言



居住地に基づいたターゲットセグメンテーション戦略

🎯 O2O (Online to Offline / Offline to Online) 作戦

関西地域・近隣地域



🎯 「米+α」による認知拡大戦略 遠方地域

米は小浜市のふるさと納税で人気1位の返礼品であるが、その理由は生活必需品だからである。実際に小浜に来た人にとった魅力度アンケートではお米は一位ではない。米以外の魅力が伝わっている。そのお米に「へしこ」などの小浜の特産品を添えることで、小浜の特産品の認知度を上げる。



9.提言



居住地に基づいたターゲットセグメンテーション戦略

ふるさと納税をまずは関係人口形成の手段として用いる





ご清聴ありがとうございました。





海エリアからまちエリアへの誘致促進

観光客の消費行動・観光先への価値観調査

D班：國友，河野，渋谷，富岡

目次



1. 調査背景
2. 目的・仮説
3. 調査方法
4. アンケート・分析結果
5. 追加調査
6. 最終提言





小浜市の現状



- “食を核としたまちづくり”を通じた観光戦略を進めている
- ターゲット層の明確化と差別化戦略を進めている
- **里海・里山・まちエリア間の周遊性向上**を目指している



小浜市の現状



(1)里海エリア
若狭湾に面し、海産物が豊富に獲れるエリア
若狭フィッシャーマンズ・ワーフ 等

(2)里山エリア
古い神社や仏閣が多数存在するエリア
明通寺本堂・神宮寺 等

(3)まちエリア
駅前の通りや歴史的街並みが広がるエリア
旧小浜・西津・小浜駅前 等

https://www1.city.obama.fukui.jp/kanko-bunka/kanko/osirase/p005786_d/fil/7.pdf



目的

海エリアに訪れる観光客のニーズを調査し、
まちエリアへの周遊を促進するための具体的な提言を行う

仮説

H1: 海エリアに訪れている観光客で、食を重要視している人は
まちエリアにも行きたいと感じる

H2: “体験”を重視する観光客は海エリアにしか訪れない



アンケート実施場所

里海エリア

(フィッシャーマンズワーフ、おばま食文化館)

アンケート実施方法

里海エリアに来ている観光客に対して対面でアンケートを実施

アンケート概要

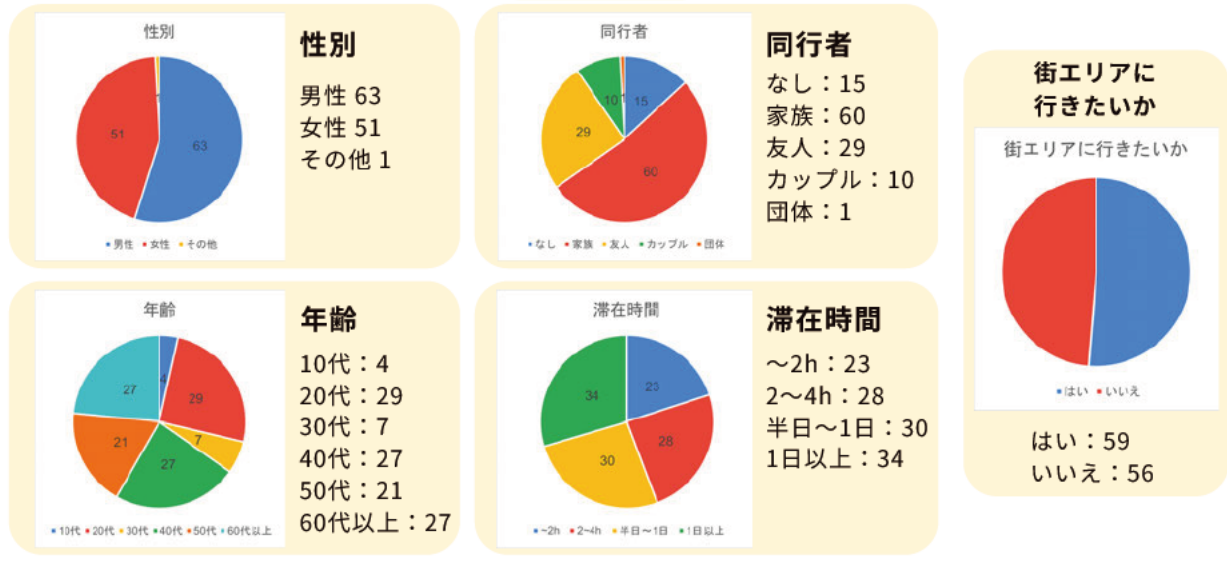
- ・ 基本情報
- ・ まちエリアへの訪問意欲
- ・ 観光において重要視する要素
(自然、美しさ、歴史・文化的価値、体験活動)



アンケート結果



基本属性 n=115



分析結果と仮説検証

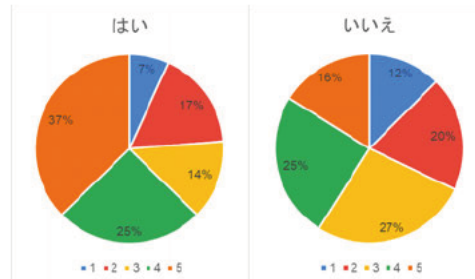


アンケート結果をもとに対応のない2標本t検定を実施したところ、次の項目で有意差が見られた

- ・自然
- ・整備状況
- ・体験活動
- ・食文化
- ・美しさ
- ・観光スポットの歴史的 / 文化的価値
- ・SNS

・ まちエリアに行きたい人は食文化を重視している (H1)
→支持された

・ “体験”を重視する観光客は海エリアにしか訪れない (H2)
→統計的に検証はできなかったものの、体験を重視する海エリアを訪問した観光客はまちエリアにも興味があると解釈できる





「食文化」「体験」「景観」評価が高い人ほど周遊意向あり



動機不足ではなく、“導線不足”と考えられる



エリア間周遊を促進するシステム エリア別の地域通貨「おばマネー」の発行

- ・登録施設（飲食，体験系，交通など）で使用可能。
- ・対象施設などでモノコト消費（購入）をすると通貨が発行される。
- ・別エリアの地域通貨しか発行しない（海エリアでは山か街でのみ使える通貨を配布）
- ・使用期限は発行時の年の次年末(2025年中に発行であれば2026年12月末期限)

想定される効果

- ・地域限定の通貨のため，指定地域にお金を落としてくれる可能性が高まる。
- ・別のエリアの通貨しかもらえないので周遊に繋がり得る。
- ・対象店舗を調べることで，多くのお店やサービスを知ってもらえる可能性がある。

(イメージ)





1. さるぼぼコイン



【概要】 岐阜県高山市・飛騨市・白川村で導入されているデジタル地域通貨

【加盟店数】 2063店舗

【経済見込】: 2億円相当の流通で、
約**4.2億円** (約2.1倍) の経済波及効果が試算されている⁽¹⁾

【成功要因】

- 継続的改善
- 地域イベント連携
- データ活用

2 小江戸ペイ



【概要】 埼玉県川越市が導入したデジタル地域通貨

【加盟店数】 734店舗

【経済見込】 売上倍増効果が期待され、過去の実施では店舗の売上が平均20-30%向上した事例がある

【成功要因】

- 観光連携
- 商店街活性化
- イベント連動

(1) 土木学会. (2020). 地域通貨「さるぼぼコイン」が岐阜県高山市にもたらす経済効果. 土木学会論文集, 61, PS2-10. http://library.jsce.or.jp/jsce/open/00039/202006_no61/61-PS2-10.pdf

追加調査



観光案内所や地域住民の方へのヒアリング



エリア別で存在する観光資源

里海: 海鮮、船や海での観光体験

里山: 寺院などの歴史的建造物

まち: 歴史的街並みやカフェなど幅広く

エリアごとの観光やサービスのジャンルが異なっていることがわかった。
若年層やファミリー層には体験系は刺さるものの、高齢層は歴史的なエリアに訪れていることが多いということがわかった。

御食国若狭おばま観光まちづくり戦略によるエリアの区別



フィッシャーマンズワーフから鯖街道起点までの徒歩の所要時間を調査



- 目的地への適切な経路が明確ではない
- 道中に活気が感じられない
- 寄り道する場所がない
- 視覚的にゴール設定がなくあとどれくらいで着くのか分からない

➤➤➤ 移動過程にも仕掛けをつくる



エリア間の道案内を行う「サバナビ」



具体案：鯖の魚影の誘導

目的

それぞれのエリアを移動するとき、次のエリアまでの時間、方向を調べることなく進むことができる

鯖のイラストにすることによって海から街へ、鯖の流通の歴史も表現できるのではないかと考えた



①おばマネーの発行

- ・まちエリアでのおばマネー消費のための海→まちエリア間の移動の目的
- ・地域へお金を落としてくれる
- ・お店単位でおばマネーがどれくらい使用されているかを把握できる
- ・現段階での提案では持続のために資金をどう調達するかが提案できていない

②鯖の魚影の誘導

- ・道に迷うことがなくなり、エリア移動への心理的ハードルを下げる目的
- ・簡易的に鯖が海からまちへ流通してきたことを伝えられる可能性がある
- ・同時に鯖街道の歴史を看板で示すとより興味を持ってくれる可能性がある

本調査での制約

本調査では、海→まちエリアに実際に足を運んだかなどは調査できておらず、あくまで意思を調査したのみだったため、実際に周遊した人に具体的になぜ周遊したかなどを調査できるとより今回の提言の精度の向上が図れると考える

⑥-3 海外調査（タイ国・バンコク市・令和7年9月）

Verification of the Effectiveness of Automated Replies in Sales LINE



Verification of the Effectiveness of Automated Replies in Sales LINE

Research Presentation

Sota Kento Same Jung

TABLE OF CONTENTS

- 01 Introduction
- 02 Previous Research
 - The case of Thailand
 - Overview of AI
- 03 Activities
 - Questionnaire survey
 - About the Companies
 - Discussion with students
- 04 Survey Results
- 05 Consideration
- 06 Conclusion

01

Introduction

How AI-powered automated replies affect repeat rates compared to human replies

Background

• Maintaining customer relationships is extremely important in service industries (ex: cafes, beauty salons, spas, nightlife businesses). In particular, **aftercare and continuous communication** are essential to encourage customers to revisit after their first visit. However, due to staff shortages and heavy workloads, it is often difficult for businesses to provide timely replies to all customers.

• Advancements In AI Technology and the Spread of Automated Replies

With the development of natural language processing AI such as ChatGPT, AI-powered automated replies have become capable of providing more “human-like” interactions. AI chatbots are already widely adopted in corporate customer support and the e-commerce industry. By applying this technology to sales-related LINE communication and one-to-one chats in the service sector, businesses can potentially reduce labor costs while maintaining consistent reply quality.

02

The case of Thailand

Use of digital communication

- Customers can select menu items directly within the chat interface to make reservations or inquiries.
- At the bottom, options such as “Reservation Method,” “Pricing,” “Point Card,” and “Map” are available, enabling a complete customer experience without the need for a dedicated app.
- If a similar system were introduced in Japan, for example at salons or restaurants, it could reduce the need for phone calls to confirm reservations while also providing integrated support for repeat customer acquisition (through the point card function) and directions to the location.



Official LINE account of a nail salon

A system utilizing chat applications provides customers with a convenient experience while enabling businesses to streamline operations and foster customer loyalty.

02

Overview of AI

How It Works

About the AI Being Developed

• LINE Setup

Create a Messaging API channel in the LINE Developer Console and obtain the channel access token.

• Server Code with Google Apps Script (GAS)

Write code in GAS and define a doPost function to handle webhook events from LINE. Retrieve the message content (text) from the event and send it to the OpenAI API. The prompt can include user text as well as system-role instructions for customization, e.g., appending phrases like “Shiran kedo” after the answer.

• Request to Open AI

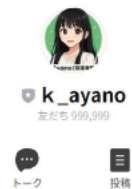
Use the chat/completions endpoint to send chat-format messages, including the user’s message, to a model (e.g., gpt-3.5-turbo). Retrieve the generated text from the response.

• Reply to LINE

Use the Open AI response to send a text message back via the LINE Reply API, including the reply Token.

• Webhook Setup

Deploy the GAS script as a web app and register the generated URL in the LINE Developers webhook settings. This ensures that when a LINE message is received, GAS’s doPost function is triggered.



02

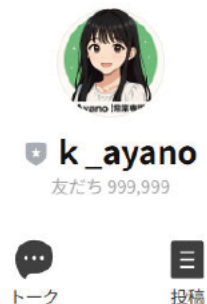
Overview of AI

Current situation

- Now, we are developing AI-powered automated reply software using the official LINE account.
- The system is already capable of responding to customer messages to some extent.
- Customizations have not yet been implemented.

Issues

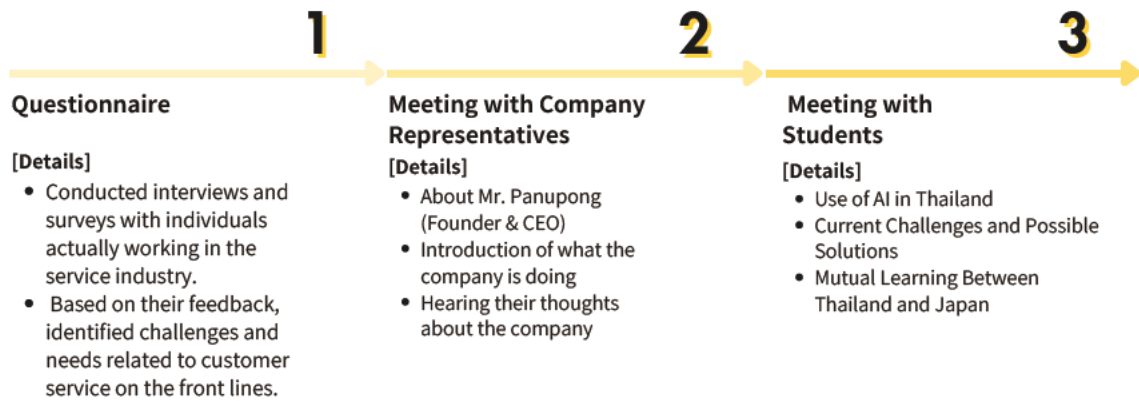
- it sometimes fails to process messages containing typos or spelling errors.
- If AI were to take over all responses in place of humans, it could give rise to ethical concerns.



03

Activities

What we did during the week



03

Questionnaire survey

Conducted a survey of people working in the service industry

Survey method: Implemented using Google Forms

Questionnaire contents

- Do you use LINE to contact your customers?
- Do employees with a high repeat rate tend to reply quickly?
- If a human-like auto-reply system were available, do you think it would help increase customers?
- Would you like to use such an auto-reply system?

1. คุณใช้ LINE เพื่อติดต่อลูกค้าของคุณหรือไม่?
LINEや他のチャットアプリでお客様に連絡することはありますか?

1 2 3 4 5
☆☆☆☆

2. เวลาที่คุณได้คุยกับลูกค้าของคุณแล้วพวกเขาก็รีบตอบกลับไหม? (お客様にメッセージを送るときは毎回自分で送りますか? それとも自動返信などの仕組みを使っていますか?)

1 2 3 4 5
☆☆☆☆

3. หากมีระบบโต้ตอบอัตโนมัติที่เหมือนคนเราบ้างจะช่วยเพิ่มลูกค้าได้หรือไม่? (売上が高い子や、リピート率が高い子は他の人と何が違うと思いますか?)

03

About the Companies

ATTRA INTER Group identifies itself as a "Creative Innovation Company" and undertakes the following areas and activities.



ATTRA INTER GROUP
**Panupong
Thanarukwuttikorn**

Areas of expertise

- Design and implementation of software development and hardware systems
- Support for a wide range of technical fields including ERP, CRM, RPA, AI/machine learning (ML), cybersecurity, and server infrastructure construction
- Process automation for factories and industrial sectors
- A system called ATTRA CARD that digitally represents and stores business cards

Insights gained

- While embracing grand visions, it is essential to demonstrate practical skills and a proactive spirit by first delivering small, tangible products.
- It is important not only to deepen individual skills but also to integrate them to generate meaningful value.
- Regardless of possessing technology and ideas, progress cannot be achieved without effective communication skills and the ability to garner empathy.
- Learning arises not only from outcomes but also from the process of taking on challenges itself.

03

Discussion with students

Human-AI coexistence



How much work and decision-making should be entrusted to AI

- There may be ethical issues in having AI handle all responses instead of humans.
- Therefore, rather than leaving everything entirely to AI, as in Thailand, it is preferable to share the work between humans and AI.

A G I



Artificial intelligence that can think flexibly and generally like a human

- Current AI systems are strong at handling "fixed patterns" or FAQ-style responses, but they are weak when faced with unexpected questions.
- With AGI, however, it would be possible to understand context, background, and emotions, enabling more flexible and human-like responses.

flexibility

Using AGI will certainly increase versatility.

- There is potential for AI to be introduced in various industries, including the service industry.

04

Survey Results

What we found in this survey

01

About the use of LINE in the Thai service industry

- It was found that many female hosts regularly contact their customers via LINE.
- They use it as a tool to encourage repeat visits from new customers, send reminders about upcoming visits, and engage in personal communication.
- This reflects a culture very similar to that of Japan’s nightlife industry.

02

Being human” is the key to gaining repeat customers

- Highly successful hosts with strong sales tended to respond quickly, provide personalized replies, and carefully manage the psychological distance with customers, demonstrating a human touch in their communications.
- This aligns with the premise of this study —that if AI could generate human-like automatic replies, it might be able to substitute for these interactions.

03

To increase the number of customers

- There is a tendency to anticipate an increase in customers with the implementation of a "human-like automated reply system."
- A significant number of respondents indicated a willingness to use automated replies if they appear natural, and some expressed that managing all replies personally is challenging, thereby showing interest in AI support.
- These findings suggest that there is room for AI adoption in this domain.

05

Consideration

Next-Generation Customer Service through Optimal Role Sharing between AI and Humans

Current Challenges

AI alone tends to provide mechanical responses, often lacking subtle nuances and emotional consideration.

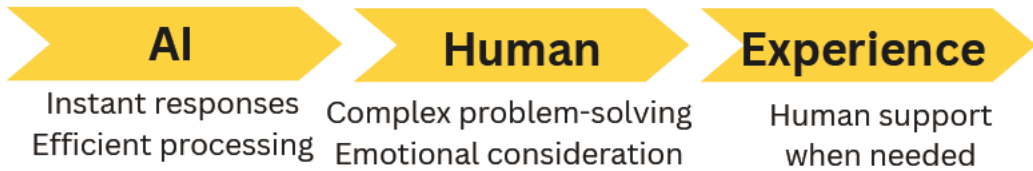
solution

In this role-sharing model, AI efficiently handles routine tasks, while human staff take charge of complex inquiries and delicate interactions.

Outlook for the future

The advancement of AGI will enhance AI’s responsiveness, but for now, working in collaboration with humans is the most effective solution.

By combining the efficiency of AI with the empathy of humans, customers can enjoy an ideal service experience that offers both quick responses and heartfelt care.



06



Conclusion

A new customer service model shaped by collaboration between AI and humans

The survey conducted in Thailand revealed that for Japan, promoting digitalization and enhancing service flexibility are essential for future growth. Specifically, the combination of efficiency through AI and reliability ensured by humans can be seen as a new model for the Japanese service industry.

⑥-3 海外調査（タイ国・バンコク市・令和7年9月）

A Venture Originating from the University of Fukui Joint Research Aimed at Business Development



The Future of Educational Support Addressing the Learning and Emotional Needs of Non-Attending Students

A Venture Originating from the University of Fukui Joint Research Aimed at Business Development

安倍 誠明	Tomoaki Abe
河野 颯人	Hayato Kono
Kanta	Anli
Kawai	Simon


September 23 - 30, 2025

Company Overview

Minakano Inc.

Mission
Expanding Everyone's Potential

Vision
Realizing Personalized Learning through Generative AI



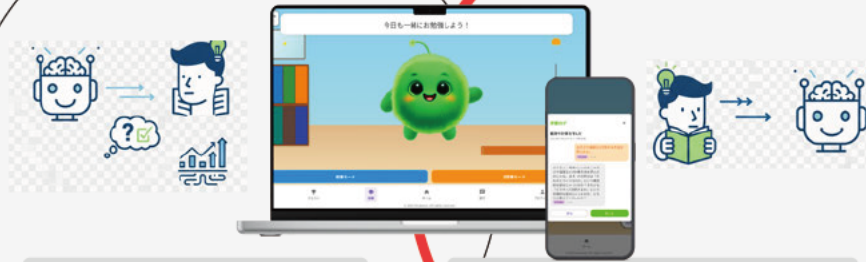
<p>Challenges</p> <ul style="list-style-type: none">• Not even knowing where one is stumbling• Lack of a sense of belonging in the classroom• Decline in self-esteem	<p>Solutions</p> <p>Develop an application from the perspectives of "personalized learning" and "enhancement of self-esteem."</p>
---	--

Service Overview

EdTech : Education & Technology

AI teaches Students

Students teaches AI



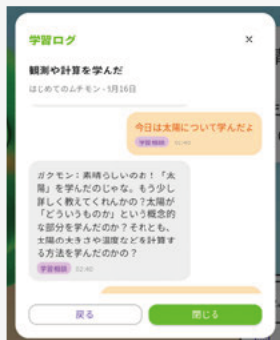
- Provision of Personalized Learning
- Immediate Questions and Solutions
- As many times as needed until understood
- Do what you want, when you want

- Immediately Output What You've Learned
- Confirmation of Understanding and Application
- Optimal Knowledge Retention
- Character Grows Motivation Support

Two key features

Reverse Learning Mode

A unique experience in which learners take on the role of "teacher" and teach the AI. This promotes knowledge retention and enhances self-efficacy through the successful experience of "having taught."



Trust-Building Mode

Through free dialogue with Muchimon, learners cultivate a sense of security and lower the psychological barriers to learning.



[June Survey] Workshop in University of Fukui



Purpose

Identify the potential challenges the service faces and explore directions for improvement.

Method

Present the service concept and conduct group discussions.



Theme

1. Challenges of the consecutive login feature: difficulty in returning after temporary disengagement
2. Motivation decline caused by the growth limits of the character

[June–September Progress] Prototype Development and Improvement

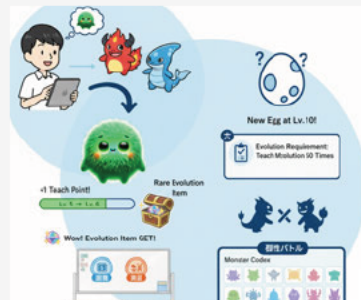
Mission

Planned and developed an app prototype to address the two challenges identified in the workshop.

Implementation of the Login Function



Expansion of Characters (In Planning)



Implementation of the Friend Function



Platform		Features	Limitations of the Free Version
DEK D-School	For Students	Offering courses for students to prepare for Thai university entrance exams (TCAS), A-Level, TGAT/TPAT, and others.	Only some topics are available to view. By upgrading to the paid version, users can access post-learning Q&A support and take self-assessment tests.
Monkey Everyday		The main target is elementary to high school students preparing for entrance exams and school tests.	Lessons can be taken for free for a limited period, similar to a subscription. By upgrading to the paid version, users receive features such as test result analysis and personalized study guidance for future learning.
FutureSkill	For Professionals and Job-Hunting Students	An online learning platform for acquiring future skills. It offers courses in business, creativity, technology, data, and other fields.	Only some topics are available to view. By upgrading to the paid version, users can access all courses without limitations and obtain completion certificates.
SchoolDio		Offering online courses, workshops, and bootcamps for individuals and companies to acquire essential digital and technology skills.	Only some topics are available to view. By upgrading to the paid version, users can access all courses without limitations, obtain completion certificates, and also use features such as analytics and progress tracking.

[ummary of the Thai App Survey]

Distinction Between Free and Paid Versions

The key points of distinction lie in the scope of access to learning materials, the availability of practice and analysis features, and the inclusion of support and certificates.

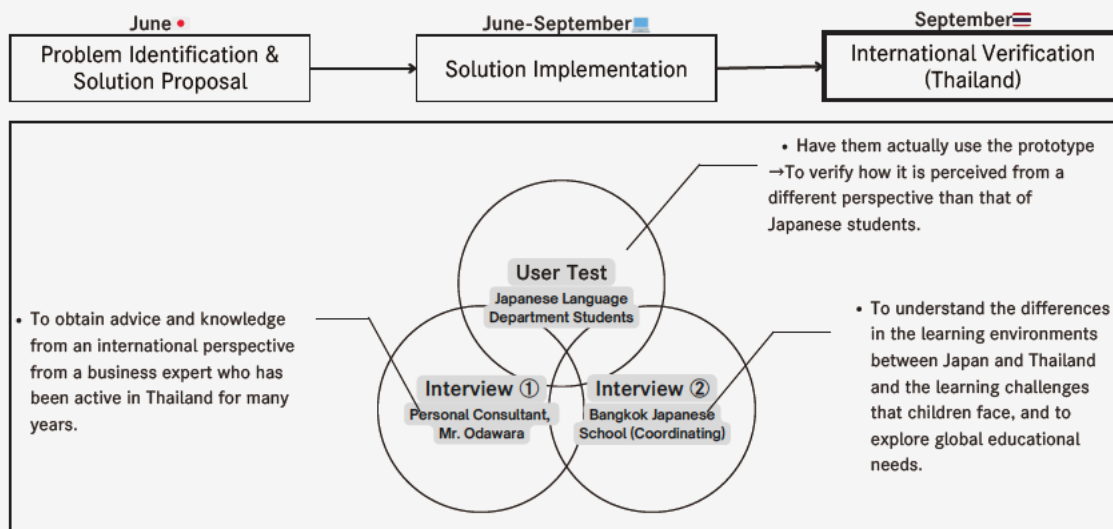
Polarization of Target Users

In Thailand, in addition to student-focused content, content that allows learners to acquire practical skills for the workplace has already become widespread.



Muchimon is currently focused on “student-oriented content,” but in the future, we aim to expand into skill areas for professionals, such as “design” and “video production.” Since such professional learning apps already exist in Thailand, there is potential for a relatively smooth entry into the Thai market when expanding the app in the future.

Action Plan for September Research



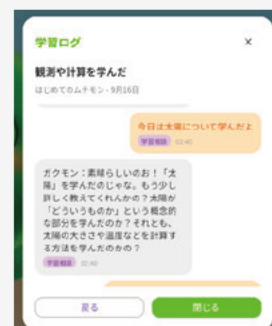
Method: Online
Participants: Thai students studying in the Japanese language department

【Comments from the Pilot Experiment】

Q. To what extent do you find the concept of this app appealing?

Answers

- When studying, I'm not alone but can study with the character, so I think it motivates me more.
- Muchimon's cheerfulness gives me some strength. It makes me feel like I want to keep trying together. But since it only sends short messages, it always feels not quite human.
- Because it allows users to keep learning enjoyably.



【Comments from the Pilot Experiment】

Q. What improvements would make you want to use it more continuously?

Answers

- I think it would be better if there were more features! For example, a microphone would be useful when I want to talk with the bot.
- It would be good if a conversation goal were set, so I wouldn't have to keep asking questions for too long.
- If the learning content could be adjusted to match the user's level, I'd want to keep using it longer.
- I'd like more human-like qualities to be added.
- Since the character speaks in a dialect, I need to understand the dialect. → It should use language that anyone can understand, while still allowing for increased intimacy.

【Summary of the Pilot Experiment】

- Studying through conversations with a character is effective.
- The gamification element of "teaching the character" is also effective in this app.
- It is necessary to further develop the app so that users feel as if they are talking with a real person, not just a machine.
- For students in Japanese language departments, it has the potential to become a valuable service, as they can actually use Japanese to communicate.

[HARBOUR.SPACE @UTCC]

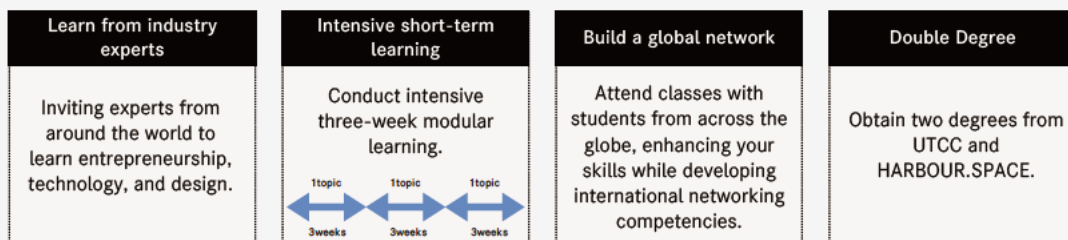
A cutting-edge institute for entrepreneurship, technology, and design.



The Philosophy of [HARBOUR.SPACE @UTCC]

→ Theory alone is not enough; deeper learning must be pursued through practice.

Four Key Features of [HARBOUR.SPACE @UTCC]



Harbour.Space Interview Survey
2025/09/26

[Potential of EdTech]

- Education × Technology is a field gaining attention with the rapid growth of AI.
- In Thailand as well, multiple startup companies have been established and apps are being developed.



[Applicability to Language Learning Apps]

- Existing apps often focus on repetitive learning such as test-based output, but using generative AI for applied output is a highly unique idea.
- Conducting language learning through conversations with generative AI is considered very effective, and there was feedback expressing strong interest in trying it out.



Hearing with Mr. Odawara from Personnel Consultant
2025/09/28

In Thailand, there is not much of a culture of output in the form of teaching others.”

- ▬ Study (input) → Use at work (output)
- Study (input) → Present / Teach others → Use at work (output)



Differences in Learning Motivation

- ▬ Studying with a clear purpose (e.g., studying Japanese because they want to be able to speak it)
- Unclear purpose: studying to get good grades or to enter a good university / company



【Conclusion】

Possibilities Revealed in This Survey

- “Personalized learning” through dialogue with AI
- Using “gamification” in learning is effective

Cultural Differences Between Thailand and Japan

In Japan, the concept focuses on “enhancing self-esteem,” whereas in Thailand, people are often noted for “already having high self-esteem” and “strong sense of purpose,” among other differences.

→Even when expanding the same service internationally, it is necessary to design the app with a clear primary learning objective — for example, positioning it as a learning app specifically for acquiring ○○.

【Recommendations】

Our app has been developed to address social issues in Japan, but it has become clear that **some of its features may also contribute to language learning abroad.**

Minakano Co., Ltd. has the mission of
“Expanding Everyone’s Potential.”

We aim to address challenges in learning through solutions utilizing generative AI.

From this survey,
we were able to envision not only establishing our business in Japan but also expanding it internationally in the future.

⑥-3 海外調査 (タイ国・バンコク市・令和7年9月)

UF Entrepreneurship Club × KU

KU & UF summer camp! 2025

UF Entrepreneurship Club KU



University of Fukui
INNOVATION AND MANAGEMENT LABORATORY
Kyohei Yamaguchi Tenso Aoyama



Kasetsart University
Faculty of international Business
Chayanin Kim (Seong) Piyarid Rodthanong (Bank)

About UF Entrepreneurship club



Mission

Fostering entrepreneurial spirit and providing hands-on experiences essential for starting a business through the Entrepreneurship Club

Further Details

members : 12
faculty members : Yasuo Yamaguchi
 Takuji Takemoto
Founded on : June 2025

Purpose of this activity

Exploring and proposing the future development potential of UF Entrepreneurship Club by incorporating an international perspective

Research Goals

- ① Improving the activities of the Fukui University Entrepreneurship Club**

- ② Learning from KU Startup Club for university of Fukui's Business Idea Contest**

About Our Survey

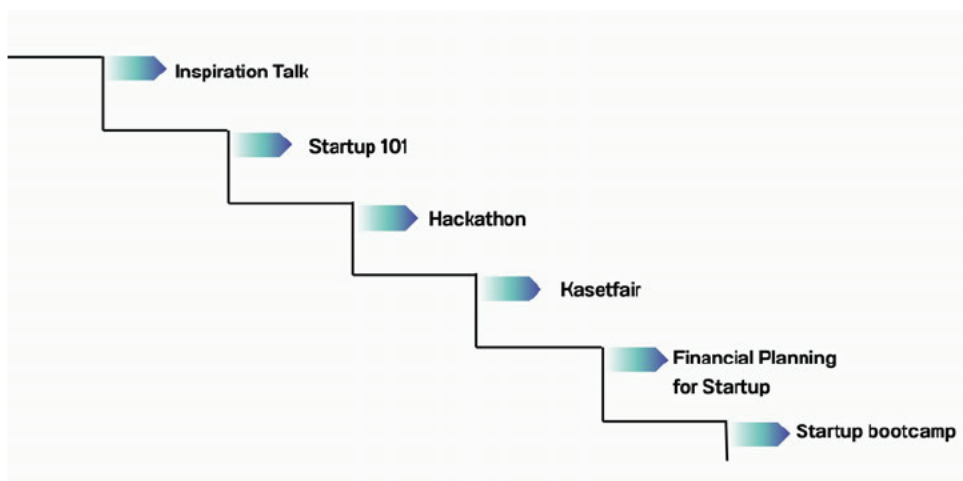
Conducting Interviews and Surveys



Survey Items

- Q1. How can sponsors be attracted to the Entrepreneurship Club?
- Q2. What is the composition of the club's members?
- Q3. What motivates students to join the club?
- Q4. How does the club maintain and enhance members' motivation?

KU startup club Road Map2025



a series of events conducted in phases

KU Startup Projects



Inspiration Talk 2024



Startup 101 2024

KU Startup Projects



Hackathon 2024



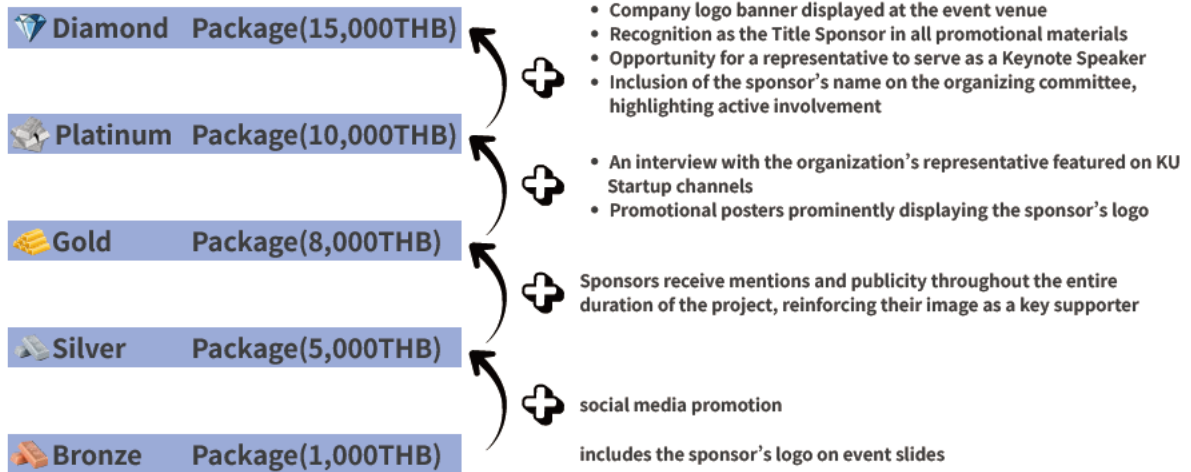
Kasetfair search 2024

Achievements



To hold a business competition

How to Present Student-Based Benefits to Companies



To hold a business competition

Systematizing our activities

Systematizing the activities

Plan and coordinate the overall contest operations.

Operator Assignment

Manage participants and ensure smooth execution.

Finance

Handle budgeting, funding, and financial records.

Public Relations

Promote the event and engage with the community.

Application to UF Entrepreneurship Club

① Improving the activities of UF Entrepreneurship Club

- A system to enhance entrepreneurship step by step
- Gradually refining ideas toward submission to Thai business idea contests



- Continuous operation of the club to ensure its sustainability.
- Ability to involve a large number of students.
- Building a relationship with the university by enhancing its reputation.
- Supporting students with business ideas throughout the year and helping them create new ventures.

Application to UF Entrepreneurship Club

② Learning from KU Startup Club for university of Fukui's Business Idea Contest

- Creating benefits for sponsor companies → Managing social media
- Dividing into teams



- Clarifying the significance of sponsor companies' cooperation
- Learning how to approach sponsors
- By dividing into teams, tasks within the entrepreneurship club can be organized and responsibilities shared

⑥-4 海外調査（タイ国・コンケン市・令和8年2月）

日タイ社会調査プログラム



日タイ社会調査プログラム

● ● ● ● ●

最終発表

Fukui University × KhonKaen University

安倍誠明
パースリー

調査目的

● ● ● ● ●

問い

④ The wall KohnKaenは昔の村をリノベーションし、
モダンさを取り入れることで
学生に選ばれている理由は何か？

【日常空間】

- ・日常的に利用する場所
- ・大学・図書館・通常カフェなど

【非日常空間】

- ・普段の生活空間とは異なる環境
- ・記念日や特別イベントではなく“空間的に異質な環境”を指す

仮説

④ The Wall Khonkaenは、昔の村という**非日常的な空間**に、
作業・勉強をするカフェ利用といった**日常的要素**を組み合わせることで、
若者が**気軽に訪れやすい魅力**を生み出している可能性がある。

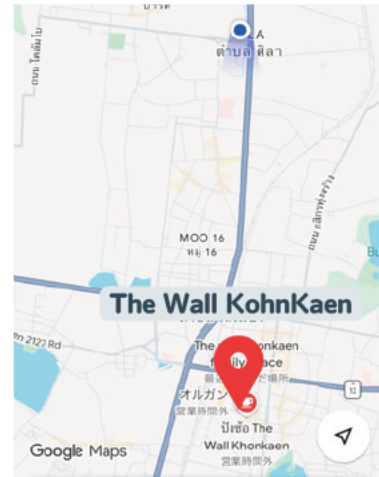
「非日常空間 × 日常利用機能」が学生の利用を促進している

調査対象

調査場所

- ✓ The Wall KohnKaen
→コンケン大学から南に約7.2km

- 昔の村の街並みをリノベーションした空間
- 木造建築やレトロな外観を活かしたデザイン
- カフェ、雑貨店、飲食店などが集積
- 写真撮影スポットとしても人気



調査方法

観察調査

- ✓ 観察内容
 - 来訪者の人数
 - 滞在行動（勉強／撮影／会話など）
 - 店舗別利用状況
 - 空間構成と利用行動の関係

アンケート調査

✓ グループ分け（t検定）

A群：The Wall KohnKaenをよく利用する学生
B群：図書館・通常カフェを主に利用する学生
→ 平均値の差を検定

自由記述

- The Wall Khonkaenを選ぶ理由
- The Wall Khonkaenの最大の魅力

■ 測定項目（5段階評価）

- ① 雰囲気の魅力であるか
- ② デザインの心地よい
- ③ 勉強・作業しやすい
- ④ 写真を撮りたくなる場所であるか
- ⑤ 非日常感を齎られる場所であるか
- ⑥ 日常的に利用しやすい場所であるか

調査結果

観察調査の結果 実施日：2/22(日)、2/23(月)

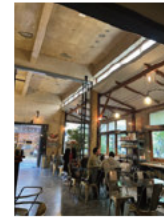
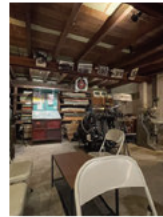
- 2月22日(日) @The wall 14:00頃
 - 規模は想定より小さいが、多様な店舗が集積
 - 5人組の観光客が写真撮影をしながら回遊
 - カフェでは勉強・作業利用が多数
 - 他店舗では作業利用はほぼ見られず

▶ 観光利用 × 作業利用 が同時に存在



- 2月23日(月) @The wall 17:00頃
 - 観光客は少数
 - 前日と同じカフェでは作業利用者が継続
 - 二人組の会話利用も見られた
 - 他店舗は少人数利用

▶ 平日は「観光」より「日常利用(作業・会話)」が中心



調査結果

観察調査の結果 実施日：2/24(火)、2/25(水)

- 2月24日(火) @KKU Library 16:00頃
 - 日本の図書館と同様に非常に静かな環境
 - 多くの学生が集中して勉強していた
 - 私語はほとんどなく、緊張感のある空間
 - 静かすぎるにより、やや息苦しさを感じた

▶ 図書館は「集中」に特化した空間
▶ 一方で、心理的な緊張感も伴う可能性



- 2月23日(水) @COLUMBO CRAFT VILLAGE 17:00頃
 - 屋外だが涼しく、開放感のある空間
 - 勉強している学生や絵を描いている人がいた
 - テスト期間には学習利用が増えるとの情報
 - 緑や自然と共存する環境

▶ タイには「屋外で学ぶ」文化が存在
▶ 開放感 × 日常利用 が成立している空間



調査結果

■ 観察調査の結果 実施日：2/26(木)

- ④ 2月22日(日) @The wall 16:00頃(平日)
 - ・カフェは休日並みに混雑
 - ・観光客も一定数見られた
 - ・パソコンやタブレットでの作業利用が多数
 - ・作業と会話が共存する雰囲気

- ▶ The Wallは平日でも「日常利用拠点」として機能
- ▶ 観光地というより“滞在型空間”の性質



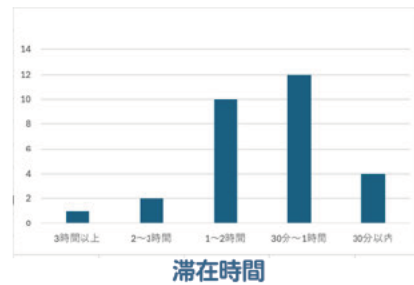
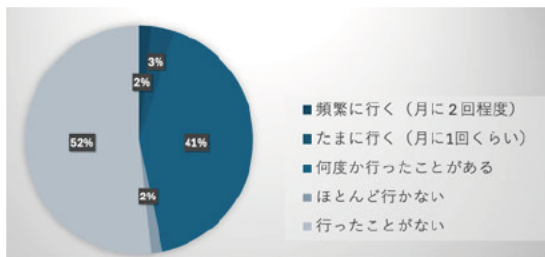
図書館は「**静寂と集中**」に特化
通常カフェは「**日常性と開放感**」を持ち合わせている
The Wallはその中間に位置する「**緊張しすぎない集中空間**」として機能している可能性がある。

調査結果

■ アンケート調査

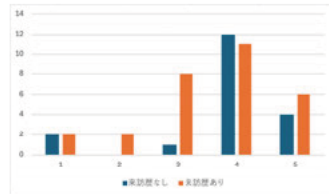
④ 期間
2月23日(月)~26日(木)

④ 回答者
人数：60人
年齢：18~22歳
対象：コンケン大学の学生

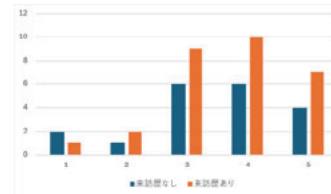


調査結果

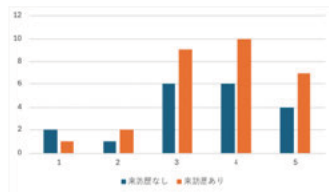
The wallを訪れたことがある・ないで2郡に分けてイメージについて分析を行った



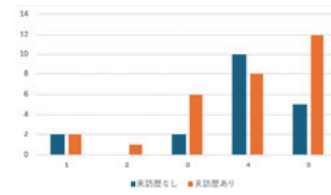
非日常感を感じられる場所である



勉強・作業がしやすい環境である



昔の村の雰囲気が魅力的である



モダンなデザインが心地よい

調査結果

アンケート調査

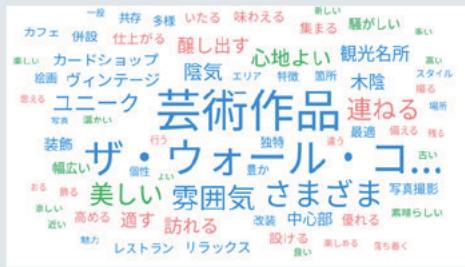
項目	p値(両側検定)
非日常感を感じられる場所である	0.443
勉強・作業がしやすい環境である	0.529
昔の村の雰囲気が魅力的である	0.443
モダンなデザインが心地よい	0.799



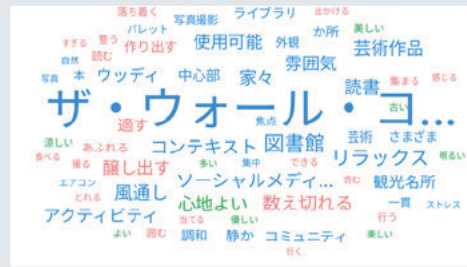
有意な差は見られなかった

調査結果

テキストマイニング



✓ 通常カフェよりも
「芸術作品」「雰囲気」「美しい」
に価値がある



✓ 図書館よりも
「風通し」「心地よい」「リラックス」
に価値がある

調査結果

テキストマイニング

図書館との違いにだけ出現	図書館との違いによく出る	両方によく出る	他のカフェとの違いによく出る	他のカフェとの違いにだけ出現
図書館 優しい 明るい すぎる 感じる 食べる ストレス エアコン 自然 風通し あふれる させる とれる 会う 作り出す 出かける 出す 含む 囲む 当てる 数え切れる 整う 知る 買う おかげ 場所 すべて アクティビティ ウッドイ カラフル	心地よい できる 読む リラックス ザ・ウォール・ コンケン 本 よい 古い 多い 涼しい 読書 静か コミュニティ 芸術 集中	美しい 雰囲気 行う 撮る 楽しい 落ち着く 写真 行く くれる 適す 醸し出す レストラン 最適 独特 装飾	集まる カフェ さまざま 場所 芸術作品	おる 訪れる 違う 素晴らしい 良い いたる 仕上がる 備える 備れる 味わえる 思う 思える 持つ 楽しめる 残る 設ける 連ねる 飾る 高める 幅広い 新しい 温かい 近い 騒がしい 高い エリア スタイル ユニーク 一般 個性

- 図書館に比べThe Wall内のカフェは**風通し**がよく**ストレス**を感じづらい
- The Wallと図書館に比べて**雰囲気**がよく**落ち着く空間**である
- 他のカフェに比べてThe Wall内のカフェ**个性的**である

調査結果



調査のまとめ

☑ The Wall KhonKaenの本質

図書館のような「**静寂と集中**」に特化した空間でもなく、

通常カフェのような「**日常性と開放感**」だけの空間でもない

The Wall KhonKaenは「**緊張しすぎない集中空間**」として機能している可能性があることが示唆できる



学生に利用されている背景には「**非日常性**」そのものではなく、

芸術作品や雰囲気にもまれた

心地よく、風通しがよく、ストレスを感じづらい空間である。

最終提言

「このじながや」への提言

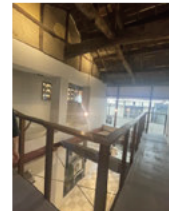
「このじながや」はThe Wall KhonKaenと似た空間ではあるが現状の利用者は少ない



【提言】 学生を対象とした、居心地の良い**学習・作業利用を目的としたカフェ**を設置すること



県内には少ない新たな**学習・作業空間**
としての役割を担える場所を作り出せる可能性がある
「このじながや」の新規の利用者層の獲得・増加を見定める



⑥-4 海外調査（タイ国・コンケン市・令和8年2月）

コンケンの博物館から学ぶ地域活性化の仕組みと福井県への応用

コンケンの博物館から学ぶ 地域活性化の仕組みと 福井県への応用

27 February 2026

2班 コラワン・稲田チーム

導入-Introduction

目的

コンケンにおけるアート等を用いた地域創生の日泰ペア調査

日本の地方都市（福井県）における地域創生の参考となる事例を、コンケンにおいて調査し、アート等を活用した**地域活性化の仕組み**や住民意識を明らかにする。

得られた示唆を福井県の**地域創生政策**に応用する提言としてまとめる。

地域創生政策

人・仕事・暮らしを豊かにするための政策・取り組み

中間発表

問い

自然史・科学博物館のどのような要素が、
来館意欲・満足度・地域への関心を高めているのか？

仮説

クイズなどでコンケンの知識を知ると、「コンケンへの愛着」や「博物館満足度」
が高くなる可能性がある。

→「学び×楽しさ×地域性」が鍵となる

中間時点での課題

- 来館者が少なく、来館者インタビューが困難
- 職員インタビューが未実施
- 福井恐竜博物館との比較軸が弱い
- 「福井恐竜博物館」に無理に寄せすぎている



最終的な調査方針 プーウィアン恐竜博物館



- 職員インタビューを実施
- 学生（来館者）への追加インタビュー
- 「別の種類の博物館」の調査（インタビュー）も追加
 - コンケン国立博物館
 - プーウィアン恐竜博物館
 - 化石発掘現場（プーウィアン恐竜博物館近く）
- 「地域活性の仕組み」に重点
- 福井県への応用を念頭に、
「なぜ人が集まるのか」を重点分析しフラットに提案先を検討

調査内容① -インタビュー結果-

自然史博物館

学生スタッフ（案内・イベント手伝い）3人

平日：学校の団体、小学生・中学生中心

休日：家族連れ（100人前後）

イベント（月1開催）で地域活性・集客に結びつけている

若者が運営に関わることで、地域の大学 × 博物館の連携が生まれている。



学校の生徒・先生

楽しかった展示 ⇒ 化石発掘砂場・反応速度ゲーム

楽しみながら学ぶことで「好き」が育つなど地域理解 × 体験学習が成功している

✔ ポイント

- 子どもを中心とした“学びの場”として機能
- 体験×遊び×学びの導線
- 季節イベントの活用で来館者が増える
- 地域文化（イサーン）を自然に学べる仕組み

調査内容② -インタビュー結果-

科学博物館

学生スタッフ（案内）

子供の日、Science Dayなどイベントで集客
お化けが人気

館長

教育：学校利用が圧倒的に多い

体験：子どもが遊びながら科学を学ぶ

地域：イサーンの自然・文化を科学で理解させる

イベント：年間を通して集客の要

地域資源を科学で紐づける

子どもたちに科学が大好きになってほしい



✔ ポイント

- 子どもを中心とした“学びの場”として機能
- 「イベント」が科学館の集客と運営の中心
- 季節イベントの活用で来館者が増える

調査内容③ -現地観察-

コンケン国立博物館

イーサン地域の歴史・文化を保存する施設
「学びの場」よりも「知るための場」
客層の年齢が高めな可能性
「落ち着いた学ぶ博物館」としての役割が強い



✔ ポイント

- 国立博物館だけ“文化・歴史 × 大人中心”という独自ポジションを持つ
- 文化・歴史を保存し「地域の魅力を高める」形の地方創生として機能

調査内容④ -インタビュー結果-

プーウィアン恐竜博物館・化石採掘場

スタッフ (案内) 2人

タイで最初に恐竜が発見された場所を中心とする博物館

平日：学校団体が中心

土日：家族連れ・観光客・年配層、しかし観光客比率が高い

本物の化石展示が最大の魅力

恐竜研究はタイではまだ新しい。子どもたちにインスピレーションを与えたい

「科学の日」などイベント日は科学博物館同様に学校団体が集中

来館者

アトラクションみたい



✔ ポイント

- 役割は知識普及・次世代育成・地域の誇り形成
- 恐竜は「地域の誇り」に直結するコンテンツ
- 季節イベントの活用で来館者が増える、観光客メイン

仮説検証

仮説

クイズなどでコンケンの知識を知ると、「コンケンへの愛着」や「博物館満足度」が高くなる可能性がある。
→ 「学び × 楽しさ × 地域性」が鍵となる



一部示唆

- 「体験型 × 遊び × 学び」の組み合わせは子どもや学生の興味・滞在時間を高める可能性がある
- 「地域文化」や「地域の自然」をテーマにした展示・イベントは地域への関心を高める可能性がある
- イベントが来館意欲を大きく左右する



今回の短期間の調査では、「体験型の遊び × 地域素材 × イベント」の組み合わせが来館意欲・満足度を高める可能性が示唆された。

まとめ

自然史・科学博物館

- ターゲット：子ども・学生
- 強み：遊びながら学べる体験プログラム
- 集客：月1以上のイベント
学生スタッフの参加
- 価値：地域文化（イサーン）を自然に学べる



地域密着型 × 体験型 × イベント
強い

コンケン国立博物館

- ターゲット：大人・歴史に関心ある層
- 強み：静的展示
保存・研究に重点
- 観察：落ち着いた雰囲気
観光資源としての格式



地域文化の保存・継承の役割が
大きい

プーウィアン恐竜博物館

- ターゲット：観光客・学校団体
- 強み：本物の化石
希少資源
発掘現場体験
- イベント：科学の日
子どもの日



観光 × 科学 × 本物の資源が
強み



ポイント

体験型のにぎわい・文化の深み・本物資源の唯一性
この3つを組み合わせることが地域創生の鍵となる

福井県への提言

① にぎわい創出（体験 × イベント）

- 福井県立恐竜博物館を中心に、子ども・学生向けの体験型企画をさらに強化
※文化の深みを担う他館に“無理に体験を押しつけない”区分が重要
- 福井県立大学との既存パイプを活かし、学生の参画を促進
- 福井県立歴史博物館、福井県立若狭歴史博物館を含む県内各施設でも、地元高校生・大学生と連携して「通いたくなる場」をつくる
→ 若者が企画・運営に関わることで、継続的ににぎわいを創出

② 文化の深み （歴史 × 地質 × 恐竜のストーリー発信）

- 福井の歴史・地質・恐竜を一つの「地域物語」として再整理
- 各博物館の“唯一の魅力”を確認できる横断パンフレットを作成
- 観光客が、「なぜ福井で恐竜が多く発見されたのか」「福井の歴史・文化と自然環境の関係」まで理解できる展示・解説を強化
→ 複数館をめぐる“ストーリールート”が新しい回遊性を生む

にぎわいの場と文化の深みを両輪で整備し、**福井全体の価値を底上げ**する。

Thank
You

⑥-4 海外調査（タイ国・コンケン市・令和8年2月）

最終発表



☘ 問いと仮説

問い

体験型カフェは、通常のカフェに比べ地域の観光や集客にどのような影響を与えているのか

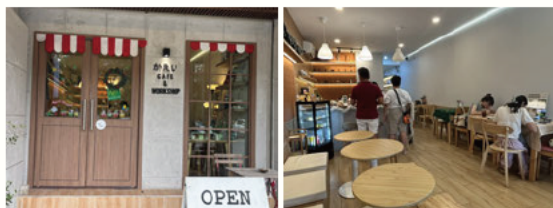
仮説

体験型カフェは、「体験」や「非日常性」を提供することで通常のカフェよりも「目的地」として選ばれやすく、地域の観光資源として集客力を高めている。

☘ 調査場所

体験型カフェ

Clay i Cafe



場所：KKUから南に車で15分
広さ：14席
2階に陶芸をできるスペースあり



Clay i Cafeで出来ること：
Ceramics Workshopで陶芸と陶器にデザイン
キャンドルづくり
すでにしてある陶器やキーホルダーサイズの物に
好みにデザイン

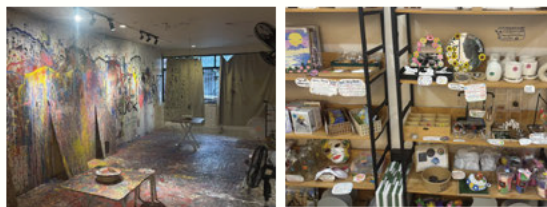
☘ 調査場所

体験型カフェ

Kuck Kuck Art Space



場所：KKUから南に車で10分
広さ：19席
2階にSplash Paintingをできる
スペースあり



Kuck Kuck Art Spaceで出来ること：
陶器にデザイン、キャンドルづくり
すでにしてある陶器やキーホルダーサイズの物に
好みにデザイン 小さなキャンバスに絵をかける
ビーズでのネックレス、プレスレットづくり
Splash Painting

☘ 調査場所

通常のカフェ

Chanmai Cafe



場所：KKUから南に車で6分
広さ：1階 22席
2階 16席

Chanmai Cafe：
課題やリラックスをするために
訪れず人がほとんど。非常に静かな
空間で、課題をするのに向いており
滞在時間が3～4時間と長めになっ
ている

☘ 目的地化の定義と測定方法

目的地化の定義

「その場所に行くこと自体が訪問の一番の目的になっている状態」

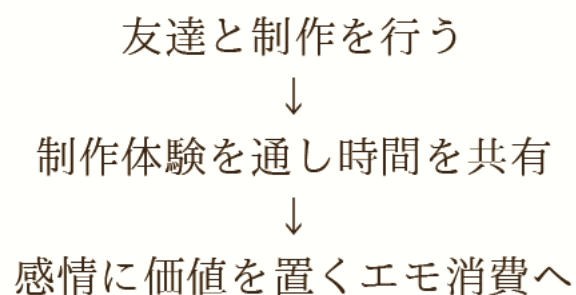
測定方法（5指標）

- ①主目的率
- ②県外客割合
- ③滞在時間
- ④SNSへの投稿意欲
- ⑤この店がなければ、このエリアに来たか
→「いいえ」の割合

☘ インタビュー結果分析

	Clay i Cafe	Kuck Kuck Art Cafe	Chanmai Cafe
主目的率	0%	100%	約30%
県外客割合	0%	0%	0%
滞在時間平均	約1.9時間	約2.7時間	約3.1時間
SNS投稿意欲	40%	100%	約54%
この店がなければ来なかった割合	40%	50%	約31%
インタビュー数	5人	6人	13人

☘ 体験型カフェの価値は「体験」だけではない



仮説の検証

仮説：『体験型カフェは、「体験」や「非日常性」を提供することで通常のカフェよりも「目的地」として選ばれやすく、地域の観光資源として集客力を高めている。』は一部支持されているといえる。



体験特化型は目的地化になり得るが
「体験の独自性」が重要
体験型カフェでカフェ要素が強くある場合、通常カフェに近くなる

現地の調査で分かったこと

体験型カフェは部分的に目的地化しているが
コーンケーン独自の文化との繋がりは弱い

このような体験は他の地域でも再現可能



地域の独自性の不足

福井への提言

福井での体験型施設について

福井の文化

繊維産業、伝統工芸品



いかに体験と地域を結びつけ意味消費にするかが重要

反省点

- ・日曜日にアンケートをとっていたら、異なる結果をえられたかもしれない
- ・体験型カフェでのサンプル数が十分に確保できなかった点

 結論

- ・ 体験型カフェは目的地化を生み出す可能性があるが**独自性**が必要
- ・ 体験を地域と結びつけいかに**意味消費**にするか

62 Blocs Marketにおける 来訪者行動について

4班 竹内彩・ジダーパー



問い

62 Blocs Marketにおいて、飲食・音楽・交流・装飾といった空間要素が来訪者の滞在時間や消費行動にどのような影響を与えているのか？

初期仮説

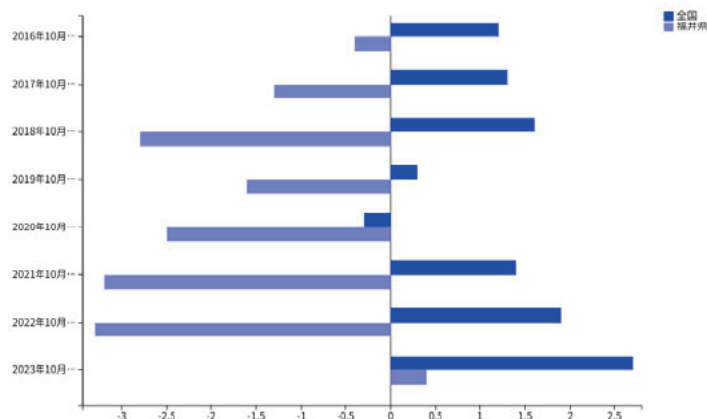
飲食・音楽・交流空間が組み合わさることで、
来訪者の滞在時間が延び、
支出や店舗間の回遊といった消費行動が促されている。

調査を進めて気づいたこと

- ・ 若者（10・20代）・女性の客の割合が高い
- ・ インタビュー調査：
女性の割合が多いと感じる 6人/8人中

→ 仮説を **若者・女性** に注目

背景①



福井県は全国に比べ
社会人口減が大きい

都道府県別社会増減率-総人口(e-Stat)

背景②

「現在、20代の県外転出による社会減が福井県においても進んでいます。

福井県の20代女性の人口社会増減割合は-3.7%、20代男性の人口社会増減割合は-2.8%と、特に20代女性の人口流出が高い傾向にあります。

持続的な福井の成長のためには、女性が自分らしく生きることができる地域づくりが必要です。」
(福井新聞社 one womanプロジェクトチーム)

「社会減の進行に関して、誰がどのような理由で、1.福井県から出ていくのか、2.出ていかずに残るのか、についてアンケート調査のデータ分析を通して検討した。…(中略)…女性の居住経路の予測に有効な因子は、「余暇評価」、「生活評価」、「寛容性評価」の3因子(10%水準で有意傾向)であった。」

(福井県立大学 地域経済研究所)

→暮らしやすさや過ごしやすい空間が女性の定住に影響

修正した仮説

飲食・音楽・交流が組み合わさった空間は、若い女性が安心して滞在できる環境を生み、滞在時間や消費行動を促進する。

調査方法

■ 調査場所

62 Blocs Market

■ 調査方法

- ・ アンケート調査(女性50件)
- ・ 追加インタビュー(男性4人 女性4人 計8人)

場所の分け方



写真スポット



市場
(飲食の店舗のみ)



ナイトマーケット

アンケート内容

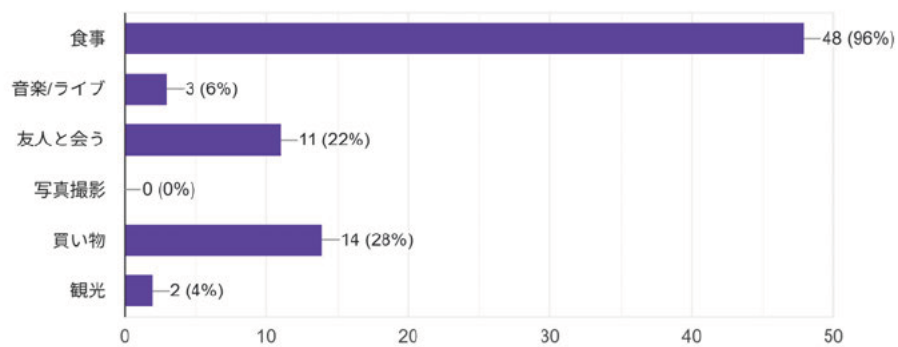
- ① 年齢
 - 20歳未満
 - 20～29歳
 - 30～39歳
 - 40歳以上
- ② 性別
 - 男性
 - 女性
 - その他
- ③ 誰と来ましたか？
 - 1人
 - 友人
 - 家族
 - 恋人
- ④ どこから来ましたか？
 - KKU／大学周辺
 - ガンサダル地区
 - コンケン県内
 - コンケン県外
- ⑤ どのくらいの頻度で来ますか？
 - 初めて
 - 月に1～2回
 - 週に1～2回
 - 週に3～4回
 - 週に5回以上
- ⑥ 今日この市場に来た主な目的は何ですか？（複数回答可）
 - 食事
 - 音楽／ライブ
 - 友人と会う
 - 写真撮影
 - 買い物
 - 観光
- ⑦ どのくらい滞在する予定ですか？
 - 30分未満
 - 30分～1時間
 - 1～2時間
 - 2時間以上
- ⑧ いくらくらい使う予定ですか？
 - 使わない
 - 20～100パーツ
 - 100～300パーツ
 - 300～500パーツ
 - 500パーツ以上
- ⑨ どのゾーンに行きましたか？
 - 写真スポットゾーン（日本風エリア）
 - カンナイトゾーン
 - 62ブロックゾーン
- ⑩ 音楽・ライブ・スクリーンについてどう感じましたか？
 - とても良かった
 - 良かった
 - 特に気にしていない
 - あまり良くなかった
 - 気づかなかった
- ⑪ 62 Blocs Marketで最も魅力を感じるものは何ですか？（1つ選択）

対象：62 Blocs Market

 - 食べ物／飲食店
 - 音楽／雰囲気
 - 友人と過ごせる場所
 - 写真スポット／装飾
 - 価格の安さ
 - 店舗の多さ・種類の豊富さ
 - 夜遅くまで滞在できること
 - その他

結果

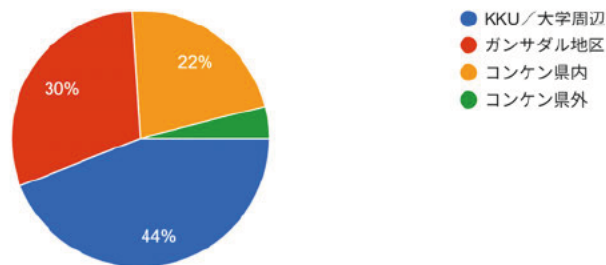
結果① 女性の来訪者の特徴



→食事・買い物・友人と会う目的が多い

結果① 女性の来訪者の特徴

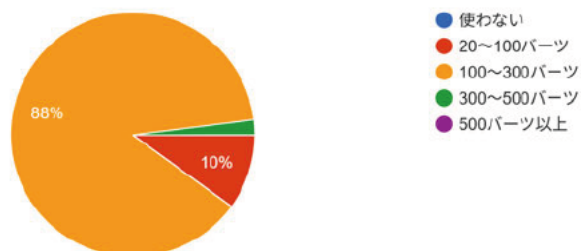
④ どこから来たか
50件の回答



→近隣からの来訪者が多い

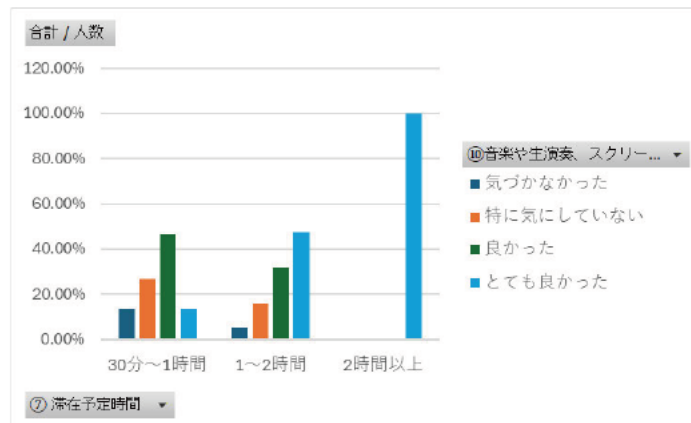
結果② 支出額に大きな差なし

⑧ 支出予定額
50件の回答



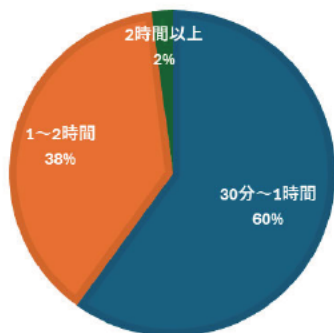
→他の要素との明確な関係は見られなかった

結果③ 音楽と滞在時間の関係



結果③ 交流と滞在時間の関係

■ 30分～1時間 ■ 1～2時間 ■ 2時間以上



合計 / 人数	列ラベル	30分～1時間	1～2時間	2時間以上	総計
1人		100%	0%	0%	100%
家族		100%	0%	0%	100%
友人		57%	41%	3%	100%
恋人		56%	44%	0%	100%
総計		60.00%	38.00%	2.00%	100.00%

→交流要素が滞在を促す

インタビュー結果①

62 Blocs Marketは
女性が安心して過ごせる場所である
→8人全員が「はい」と回答

62 Blocs Marketは
女性が安心して過ごせる場所である

インタビュー結果②

女性が安心できる理由として

- 明るい
- 人が多い
- 店が多い
- 音楽や雰囲気が良い
- 新しい施設である

仮説の検証

飲食・音楽・交流が組み合わさった空間は、
若い女性が安心して滞在できる環境を生み、
滞在時間や消費行動を促進する。

滞在時間→

消費行動→

仮説の検証

飲食・音楽・交流が組み合わさった空間は、
若い女性が安心して滞在できる環境を生み、
滞在時間を促進する。

提言

福井県の大学付近に、
飲食・音楽・交流空間を組み込んだ
若者向け飲食施設を導入する

提言

- 夜でも安心できる明るさ
- 人が集まりやすい配置
- 交流スペース
- イベントや音楽

調査の反省点

- ・ アンケート調査
1人の割合が3/50と非常に低い
- ・ インタビュー調査
数が十分にとれなかった

まとめ

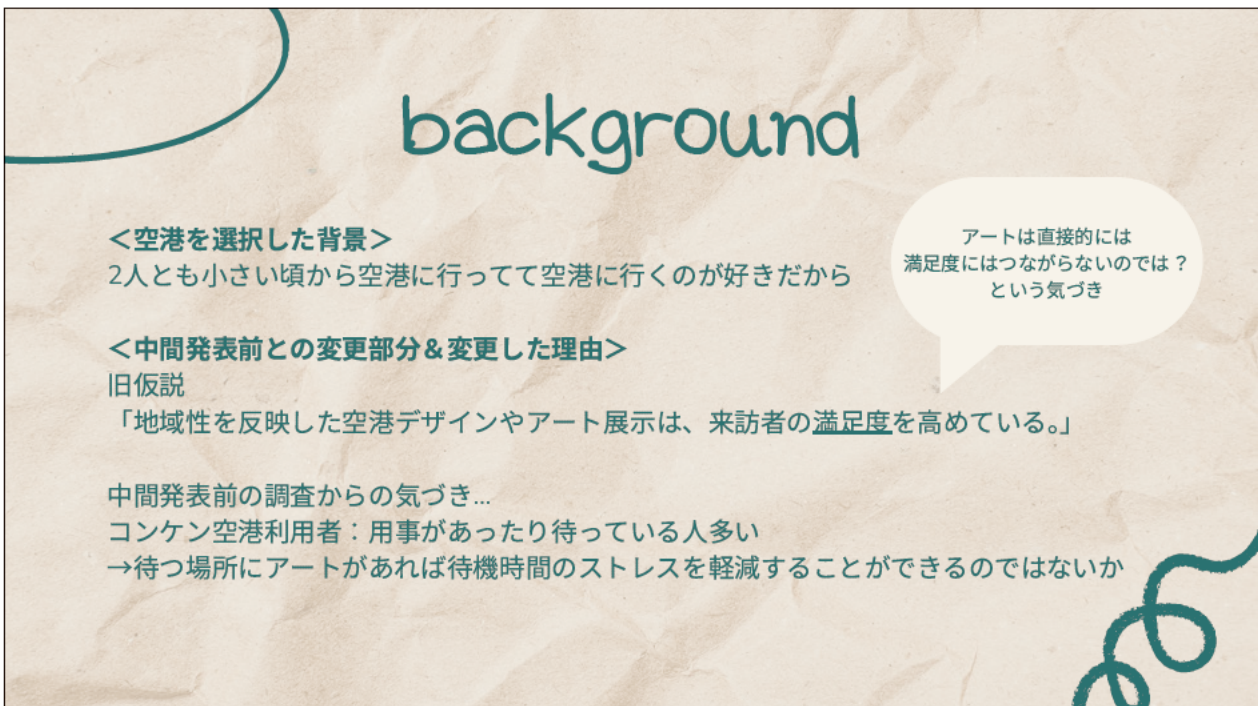
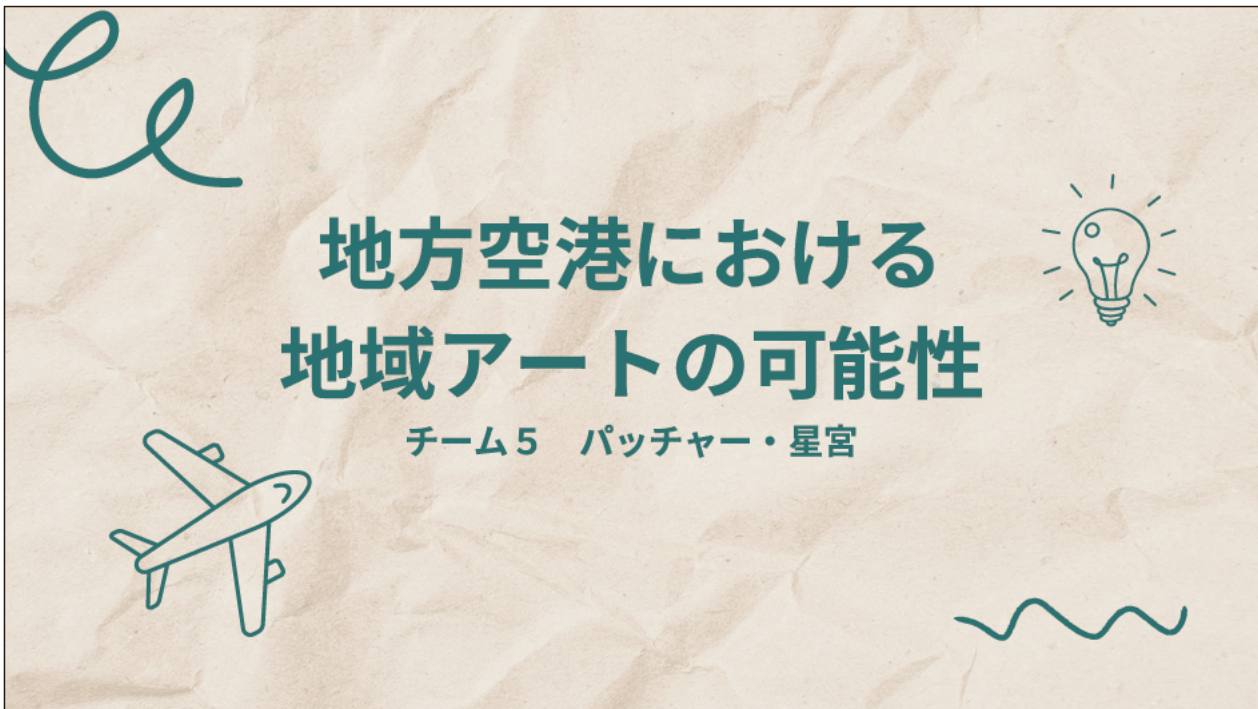
空間の要素は人の行動に大きな影響を与え、
特に安心して交流できる環境が
若い女性の滞在を促す

→地域の魅力度を上げ、
社会人口減の課題解決につながる

**Thank you for
listening !!**

⑥-4 海外調査（タイ国・コンケン市・令和8年2月）

地方空港における地域アートの可能性



Research location : Khon Kaen Airport



Problems

課題

空港でのアート作品の展示方法や
空港自体のデザインは、空港利用
者や来訪者数にどのような影響を
与えているのか。

(新)仮説

H1. 空港において、
その地域を表すアートはその地域の
アイデンティティを高めている。
H2. 空港利用者のストレスを軽減す
ることができる。

Definiition of 「アイデンティティ」 → 地元への理解

Comparison between Khon Kaen Airport and Komatsu Airport

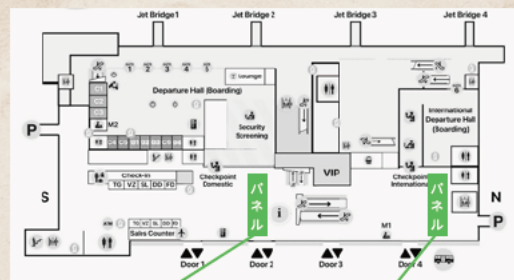
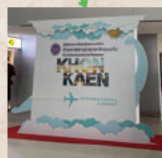
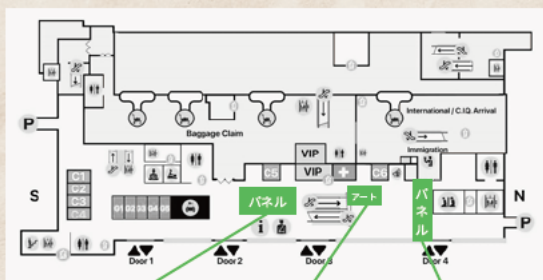
共通点

- 旅客機の運行
- 地方空港
- 首都との運行が中心

相違点

- 発着便数
コンケン 21便/日
小松 15便/日
- ターミナルビルの面積
コンケン 4.45万㎡
小松 2.3万㎡

Comparison between Khon Kaen Airport and Komatsu Airport



Comparison between Khon Kaen Airport and Komatsu Airport



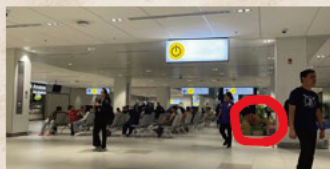
detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法	回答数
①空間観察	パネル付近にいる人	1階到着ロビー — 2階出発ロビー —	2/25 15:45~ 16:15(1階) 16:25~ 17:55(2階)	到着便・出発便15分前後のパネル周辺の様子を観察	—
②空港のアートについて	コンケン空港、小松空港	—	2/23 13時頃	メールの送信	一通 (コンケン空港)
③アートを置いている理由	空港職員 1名	2階インフォメーションカウンター	2/25 17:50	インタビュー	1名
④パネルの効果	1,2階のパネル前で写真を撮っている人	1,2階のパネル前	2/25,26	インタビュー	5組
⑤パネルの存在感	1階到着ロビーで待っている人	1階到着ロビー —	2/25,26	インタビュー	5組
⑥アートの必要性	コンケン空港を利用したことがあるコンケン大学生	Google Form	2/25 13:00 ~ 2/26 15:00	アンケート	26人

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
①空間観察	パネル付近にいる人	1階到着ロビー、 2階出発ロビー	2/25 15:45~16:15(1階) 16:25~17:55(2階)	到着便・出発便15分前後のパネル周辺の様子を観察

@1階到着ロビー



15:50 (Arrival 10分前)



16:02 (Arrival 2分後)

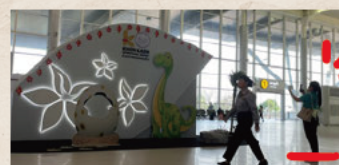
1階のパネル 写真撮った人：0組
→近くや前を通ってもチラ見だけか、素通り

2階のパネル 写真撮った人：5組
→1階よりは写真撮る人が多いが、やはり素通りが多い

@2階出発ロビー



16:25



16:33

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
②空港のアートについて	コンケン空港、 小松空港	—	2/23 13時頃	メールの送信

回答の有無：コンケン○、小松×

<質問内容>

1. 空港内のアートや装飾は、どのような目的で設置されていますか。
2. 地域の文化を考慮した、または反映した装飾はありますか。
3. 利用者はアート作品や装飾に対して、どのような反応や意見を持っていますか。
4. 装飾スポットやフォトブースで写真を撮る利用者は多いですか。
5. 地域のアイデンティティを表現する上で、何か課題はありますか。
6. 予算やスペースの制限はありますか。
7. 今後、アート展示を増やす計画はありますか。

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
◎アート을置いて いる理由	空港職員 1名	2階インフォメーションカウンター	2/25 17:50	インタビュー

<質問内容>

- ・どこのアート・パネルが一番人が集まっている？
- ・その人たちは何をしている？
- ・空港にコンケンぽさを表すアートを置いている理由
- ・誰をターゲットに置いているのか

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
◎パネルの効果	1,2階のパネル前で 写真を撮っている人	1,2階のパネル前	2/25,26	インタビュー

回答数：5組

<質問内容>

- ・属性
- ・パネルで写真を撮っている理由
- ・パネルにコンケンらしさを感じるか
- ・用事がない時に空港に行くか

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
⑥パネルの存在感	1階到着ロビーで待っている人	1階到着ロビー	2/25,26	インタビュー

回答数：5組

<質問内容>

- ・属性
- ・後ろのパネルの存在に気づいているか
- ・このパネルにコンケンらしさ感じる？→どこに？
- ・待ち時間をストレスに感じますか？
- ・用事がなくても空港に来る？

detail of the study

目的	対象	場所	期間	調査方法
⑥アートの必要性	コンケン空港を利用したことのあるコンケン大学生	Google Form	2/25 13:00 ~ 2/26 15:00	アンケート

回答数：26名

- ①属性
- ②空港にアートがあることに気づいている？
- ③空港内のアート4つがコンケンぽいかの5段階評価とその理由
- ④空港にアートが必要だと思うか、その理由
- ⑤（④でYesの人）以下のうちのどのアートがあると良いと思う？
 - ・コンケンぽいアート
 - ・イサーン全体を表したアート
 - ・コンケンやイサーンとは全く関係ないアート
- ⑥地域アートを飾ったらもっと空港が面白くなるか5段階評価
- ⑦空港内のアートはコンケンの観光を促進できるか、その理由



Conclusion

<仮説の検証>

H1. 空港において、その地域を表すアートはその地域のアイデンティティを高めている（地元への理解を深めている）。

→支持された。

アートがコンケンっぽいと感じ写真撮影する地元民もいた。

空港側の設置目的も、地域理解を促進するため。

H2. アートは空港利用者のストレスを軽減することができる。

→今回の調査のみでは証明できなかった。

待機時間にスマホを触ることによってストレスを感じない、という人がほとんど。

Conclusion

<福井県への提言>

新しく福井に旅客機を運行する空港ができるなら...

- ・スマホを持っていても見てもらえるようなアート→五感を刺激するもの
- ・地域性のあるもの

ボタンを押したら
恐竜が動いたり鳴いたりする
モニュメント



<made by genspark>

Conclusion

<課題点(今回調査できなかった点)>

- ・アートとストレスの直接的な関係
 - ・利用客が求める空港のあり方
 - ・アートが空港の満足度を与えている直接の影響の有無
 - ・子どもが遊ぶ場所がないために走り回ったり子どもだけで歩いたりしていたのが何度も目に付いた
- 大人だけでなく子どもも過ごしやすい空港とは何か

ℓ



Thank
you



(2) 嶺南地域共創センター


① 高解像度カメラと画像解析によるウメ樹の三次元モデル化と樹構造解析



福井大学工学系部門
知能システム工学講座
講師 築地原 里樹


講演資料

地域創生推進本部附属創生人材センター・
嶺南地域共創センター共催 シンポジウム



国立大学法人
福井大学
UNIVERSITY OF FUKUI

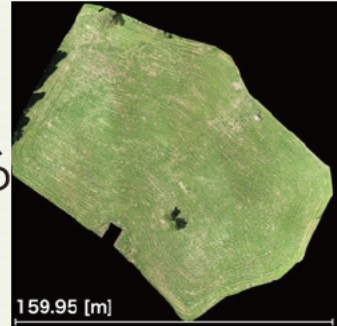
高解像度カメラと画像解析による ウメ樹の三次元モデル化と 樹構造解析



福井大学 知能システム工学講座
インタラクティブ・ロボティクス研究室 講師
講師 築地原 里樹

農業・園芸における工学への期待

- 福井県の農作物の収穫量が低迷し、工学技術を用いた技術伝承に着目
- 従事者不足による、目視徘徊による状態確認・点検時間確保が困難



□ 牧区の例：

目視徘徊に1人2時間必要

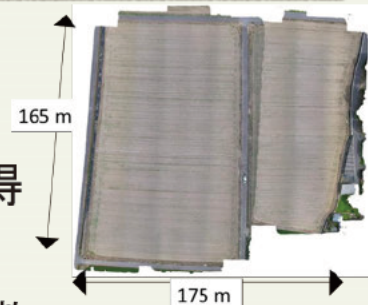
- ドローンの自動操縦中の空撮画像を用いた点検
 - 二次元画像で、作物圃場内の雑草を自動検出
 - 二次元画像・三次元モデルで、要剪定樹の三次元形状把握や剪定枝の検出



【MORIO-Exam】「農業のためのドローンの空撮画像を用いた画像処理」福井大学 園芸学専攻

ドローン空撮実験の例

- 福井県鯖江市エコファーム舟枝
 - 167.5 [a] と 95.5 [a] の圃場
 - 2台のドローンで異なる画像取得 (DJI Air2S と Phantom 4M)



研究で使用した大豆畑

- RGB画像：高解像度，形状特徴
- スペクトル画像：反射率，成長度合い

- 3時間の計測時間
- 撮影高度
 - 標準対象：50 [m]
 - 微小対象：10 [m]



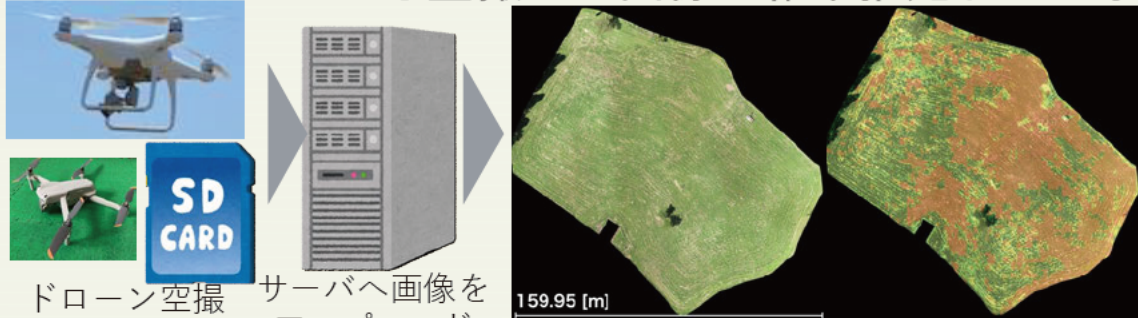
RGB画像

スペクトル画像

【MORIO-Exam】「農業のためのドローンの空撮画像を用いた画像処理」福井大学 園芸学専攻

ドローン空撮雑草推定の手順

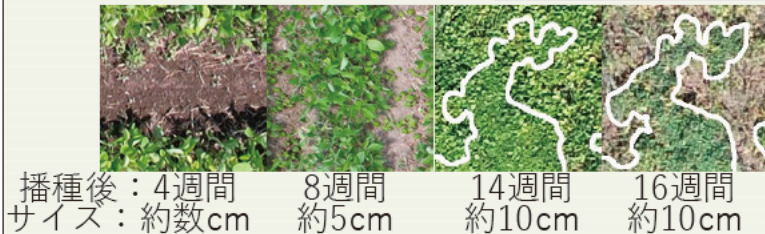
- ドローンによる空撮から画像内雑草推定までの手順



ドローン空撮 (SDカード保存) → サーバへ画像をアップロード

アップロードされた画像群からフル自動で牧場の採草地から雑草ギンギシ (赤色) を検出 (左: 構成された全体画像, 右: 雑草位置)

- 雑草のサイズ例



- DJI Air2S
15万円程度, 4K画像取得
- Phantom 4 Multispectral
80万円程度, 1Kスペクトル画像取得

雑草検出と機械学習

- 機械学習: 事前データを用いたデータ分類

- 作物, 雑草領域として右図のような教示 (アノテーション) が必要
- 多様な生体データの分類で高い精度を保つために, 大量のデータが必要
- 教示のために農学の知識が必要
- 既存のデータベースは存在するが, 地域や国などにより多種多様に適用可能なモデルの構築が必要



築地原の研究目的: 事前画像処理による

アノテーションの自動化・効率化

位置合わせ用のマーカ板設置

- 認識結果の精度向上のため、異種ドローン間画像において位置合わせが必要
- RGBドローンとマルチスペクトルドローンの両方を用いて空撮



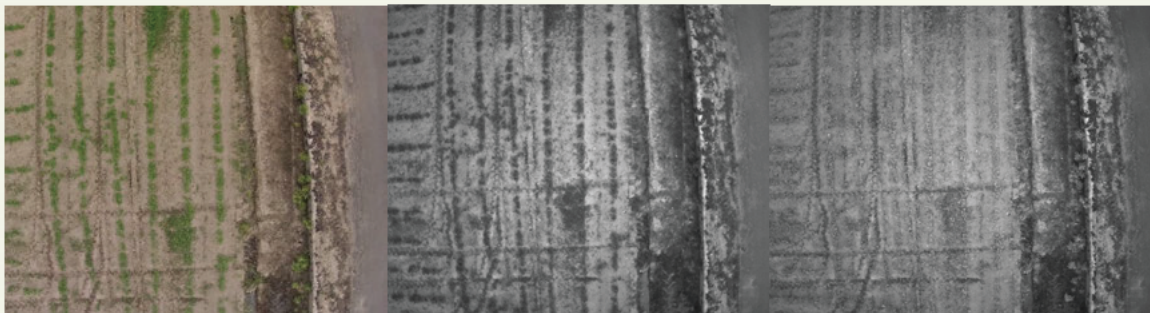
マルチスペクトルドローン
RGB画像



安価高解像度ドローン
RGB画像

Presentation: Satoki Tsuichinara, Japan

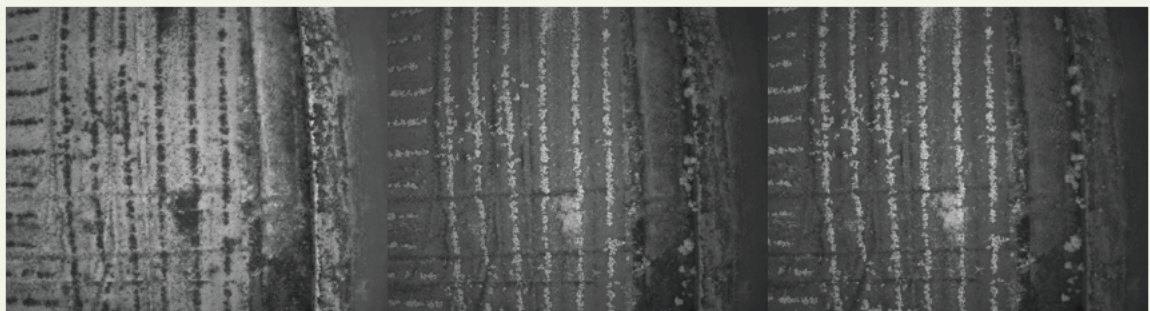
マルチスペクトル画像：6/27, 10 m



RGB

Blue

Green



Red

Red Edge

NIR

エコファーム 産地連携研究会

スペクトル画像と深層学習による微小雑草検出例



入力画像

正解画像

推定検出画像

- 微小アサガオは5cm程度の大きさで，目視の確認が困難
- 高度10mから撮影した画像内の微小アサガオ検出
 - 7割程度の精度，葉1枚ごとの検出漏れが少ない

[Mochida, SI, 2024]

スペクトル画像と深層学習による微小雑草検出例

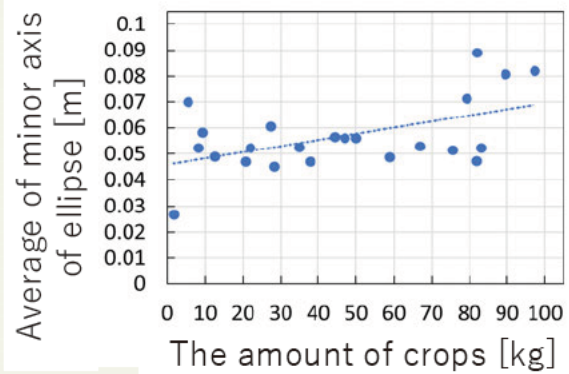
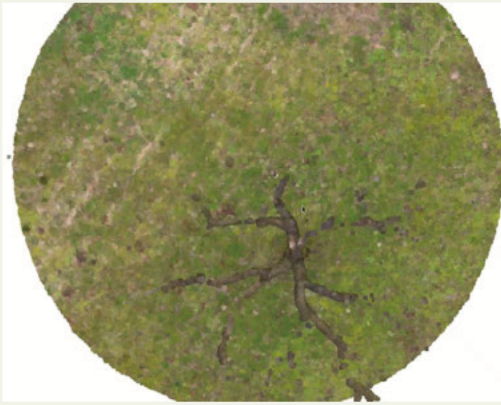
60 m x 150 m (0.9 ha) 程度



[Mochida, SI, 2024]

点群処理を用いた園芸のためのデータ計測

- 木の全ての枝の計測に時間・人的コストがかかる
- 枝の太さに対する園芸農家の直感で収穫量を向上することができる
- 剪定方法は農家ごとに異なり，言語化されない経験値に基づく
- 木の三次元点群（左動画）の枝の太さと収穫量の比較



Presentation: Satoki Tsuchihara, Japan

アクションカメラを用いた木の点群構築

使用する機材

GoPro HERO 10 Black[3]

撮影場所

福井県園芸研究センター

撮影方法

対象の樹の周囲にマーカーを設置し，樹を一周して撮影

撮影日

2024年12月26日



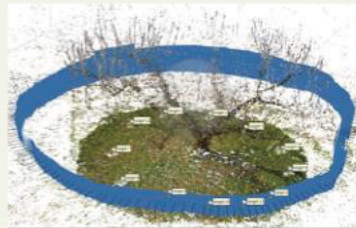
三次元点群データの作成

Agisoft Metashapeを用いて
樹の三次元点群データを生成



スライス画像

→
アライメント



画像から生成したタイポイント

→
点群構築



構築した三次元点群データ

12

福井県嶺南のウメ樹の三次元点群構築

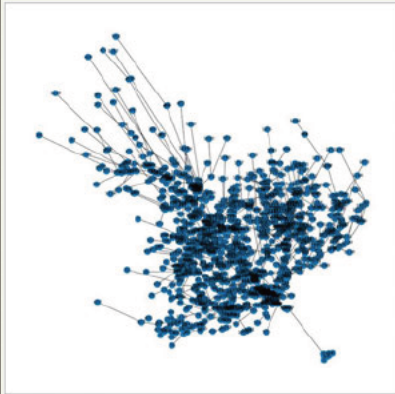
- GoProで側面から撮影した動画を用いたウメ樹点群



Presentation: Satok Tsuchihara, Japan

Skeletonizing branches and trunk: pc-skeletor [1]

- Input generated 3D point cloud data of plum tree by Metashape
- Output: two graphs and skeleton positions of branches and tree
 - Colored points: downscaled source point cloud
 - Blue points: skeleton of the branch and trunk
 - Black line: topology of the branch and trunk



Topology graph:
junction points of tree



Skeleton graph:
continuous points of tree

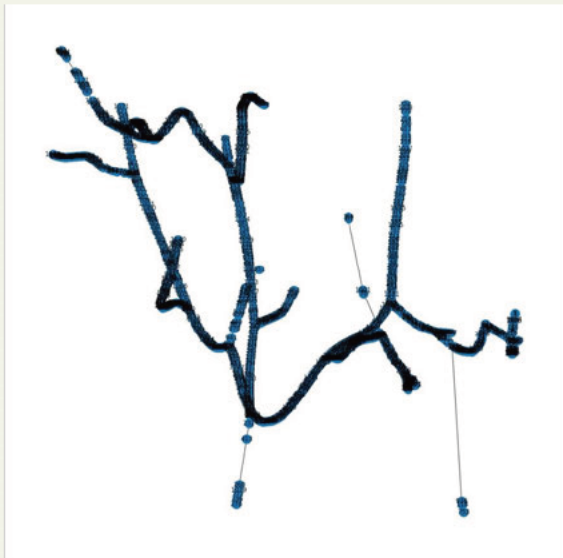


1. L. Meyer, A. Gilson, O. Scholz and M. Stamminger, "CherryPicker: Semantic Skeletonization and Topological Reconstruction of Cherry Trees," 2023 IEEE/CVF Conference on Computer Vision and Pattern Recognition Workshops (CVPRW), pp. 6244-6253, 2023.

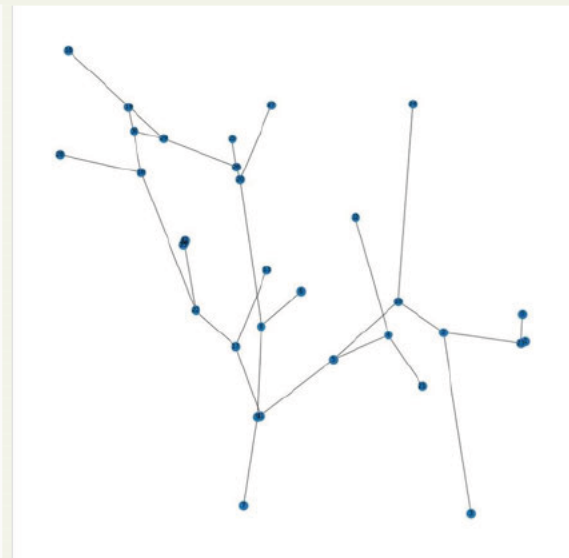
Presentation: Satoki Tsuchinara, Japan

Skeletonize pointcloud of tree

Use pc-skeletor



Skeleton graph of the tree



Topology graph of the tree

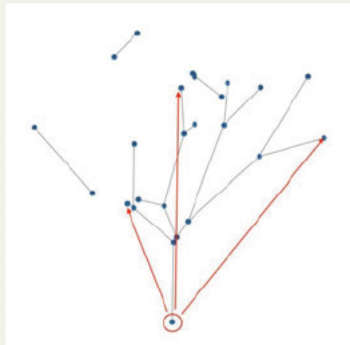
Presentation: Satoki Tsuchinara, Japan

木グラフを樹データの計算

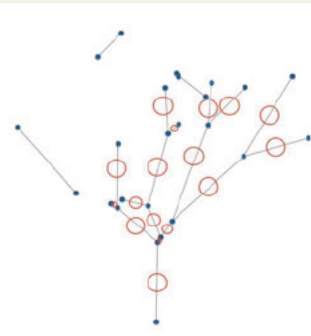
- 木グラフを用いて4つの指標を計算
 - A) 根と葉ノード間の経路数
 - B) 根ノードと接続される枝の本数
 - C) 樹全体の枝の平均半径
 - D) 全ての枝の長さ



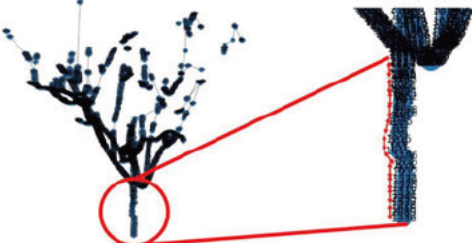
C) Average branch radius of whole branches



A) Routes between root and child nodes



B) Paths connected to root node



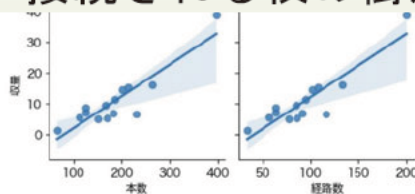
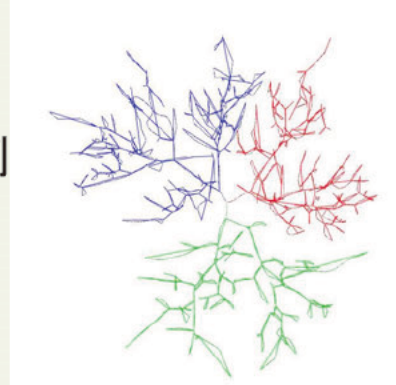
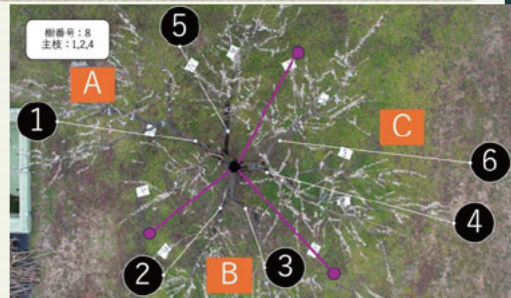
D) Total length of whole branches

Presentation: Satoki Tsuchihara, Japan

グラフ構造を用いた主枝毎の解析

農家や園芸研究者の暗黙知である枝の強さの抽出・推定

- トポロジーグラフを用いた主枝毎の構造を解析
- 主幹に隣り合う各主枝(RGB)に接続される枝の樹形の計測



--- 各説明変数と収量との相関係数 ---
 本数と収量の相関係数: 0.504
 経路数と収量の相関係数: 0.905
 合計長さ と 収量 の相関係数: 0.889
 平均半径 と 収量 の相関係数: -0.451

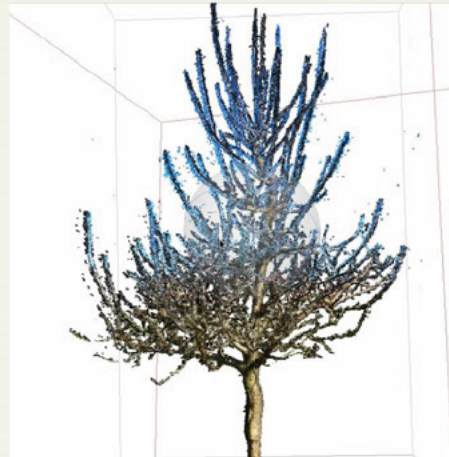
講演会「ヒューマノイドロボット制御と人間社会」

スロベニアにおける点群骨格化

- 本学工学部の依頼でスロベニアに3ヶ月滞在
- リュブリャナ大の圃場内自動計測システム
- 福井大の詳細な樹点群処理と収量相関調査
- ウメの樹の木グラフ生成が共通課題



入力動画



三次元再構成モデル



骨格推定結果

まとめ・今後の展望

- ドローン画像を用いた雑草検出
 - 農家によりそった検出・除草
 - アプリケーション開発



- 動画画像を用いた三次元点群処理による樹構造解析
 - 各年点群の重ね合わせや情報比較
 - 園芸研究の情報と樹構造の相関



② 嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト



福井大学 教育・人文社会系部門教員養成領域
教師教育講座
教授 清川 亨

講演資料

嶺南地域中学校を中心とした 探究学習推進プロジェクト

福井大学大学院連合教職開発研究科
清川 亨

探究学習

●目的

生徒が**自ら問いを立て**、
情報収集・分析・協働を通じて
課題解決を目指す「主体的な学び」で、
知識の習得だけでなく、
思考力・創造力・問題解決能力など
「生きる力」を育むこと

探究学習の現状

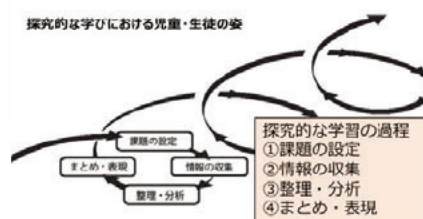
■文部科学省

探究的な学びは、学習指導要領において、総合的な学習（探究）の時間を中心として、様々な教科等に位置づけられている。

探究的な見方・考え方

（小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編）

各教科等における見方・考え方を総合的に活用して、
広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、**実社会・
実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続ける**
こと。



「質の高い探究的な学び」は、これからの社会と教育課題
(諮問文の「検討の前提」)の全体につながるテーマ

子供たちを取り巻く
これからの社会

自らの人生を舵取りする
力を身につけること



持続可能な社会の
創り手となること



豊かな可能性を
開花できること



子供一人ひとりに目を
向けた時に見えてきた課題

子供の社会参画
の意識



知識と現実の事象
を関連付けて理解



将来の夢を持つ
子供の割合



深い理解を伴う
知識の習得



自律的に学ぶ
自信



「自分の考え」
を書くこと



中央教育審議会 教育課程企画特別部会 資料

令和6年度全国学力・学習状況調査

「探究的な学び」に取り組む児童生徒は、

- 授業で「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる」割合が高い傾向
- 授業で学んだことを「次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりできる」割合が高い傾向
- 「自分の考えをまとめる活動を行っていた」割合が高い傾向
- 「自分で学び方を考え、工夫できる」割合が高い傾向
- 「地域を良くするために何かしてみたいと思う」割合が高い傾向

嶺南地区の現状認識とプロジェクトの方向性

■現状認識（令和6年：清川）

○高校：総合的な探究の時間が定着してきている。

○中学校：

①調べ学習であったり、先生の引いたレールを進む学習の学校がある。

②探究学習への転換が図られている学校もある。

○小学校：探究的な活動に向けて動き出した学校も出始めている。

●探究の方法や評価など、引き続き大学からの支援が欠かせない状況

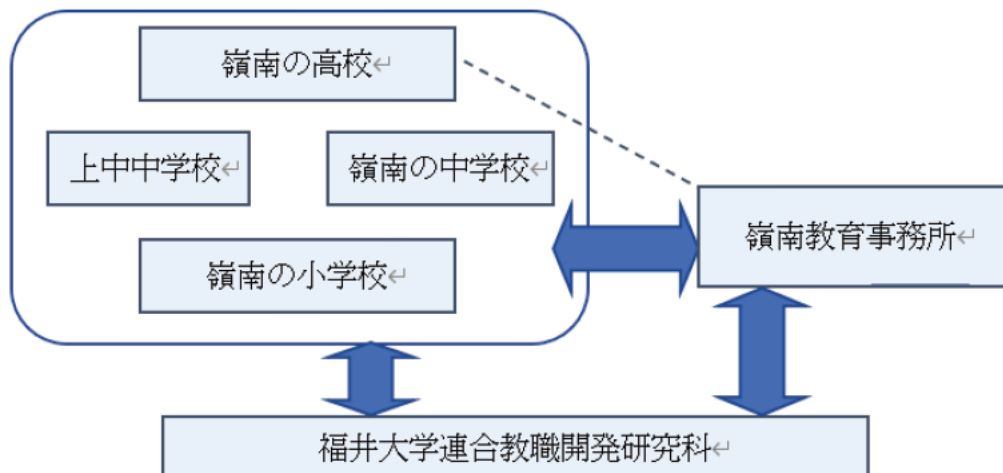
■方向性

★メインターゲット：中学校

理由：何より高校の探究への接続、小学校への刺激。

このことは、将来の嶺南地区の課題解決に大きく資する。

★支援校の考え方：特定の学校の探究学習を支援 ⇒ 他校へ波及



R7年度の取組み

I カンファレンスや研修会

- ①探究学習カンファレンス、②探究研修会、③視察と報告会

II 学校支援

- ①上中中、②栗野中、③小浜第二中、④高浜中、⑤大島小
⑥西津小、⑦中郷小、⑧栗野小、⑨梅の里小、⑩若狭高

III 教育委員会との情報共有

- 嶺南教育事務所
- 敦賀市、●小浜市、●若狭町、●おおい町

I ①探究学習カンファレンス

ふるプロ第3ステージ「つくる・かかわる」キックオフ

オンライン

嶺南探究カンファレンス

令和7年

5月7日(水) 開催

15:15～16:30 15:00 受付 (接続)

ゲスト

福井大学教職大学院

清川 亨 先生

- 参加者数 8校12人
中学校3校 4人
小学校4校 6人
高校1校 1人
嶺南教育事務所1人

嶺南地区の皆さんで、探究(学習)について情報交換をしたいと思います。

- ◆ 探究にこれから取り組もうと思っている方
- ◆ 探究に取り組んでいるが壁に当たっているという方
- ◆ 探究に取り組んで何となくコツがわかってきた方

それぞれの立場で語り合いませんか。

- 第2回 2月下旬予定

いきなり調べ学習、ではなく、まずは自分の好きって何かを見つける時間を1学期につ作るとい事例がいいなあと思いました。何に興味があるか自分のことを知ることも大事だと思いました。

教科授業も、特活も、総合も、部活も、家庭学習も、探究という視点で見たら、全部繋がっています。まさに生きることは探究！そんな学校を先生たちや子どもたちとつくってきたいです。今日はありがとうございました。

これまで、何回か探究的な学びについて研修を受講したが、なかなか具体的な場面を想像することができませんでした。清川先生がおっしゃっていたように具体→具体は問題が発生するからなんだと思います。そこで、どのような資質・能力を育成したいかというベクトルは揃えますが、教員が探究を楽しむ気持ちでとりあえず取り組んで修正していきたいと思いました。本日はありがとう

どの学校の先生も悩みながら進めておられることがわかった。いろんな学びの機会を与えてもらっているので、主体的に学んでいこうと思う。探究を探究していきたい。

②探究学習研修会

R7 福井大学 嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト

「探究学習を経験してみよう！」研修会

日時 2026年2月9日(月) 15:00~16:40

会場 パレオ若狭

対象 学校で探究学習の支援をされている方 等

定員 30名程度

講師 溝上 広樹 先生

崇城大学総合教育センター 准教授
教職員支援機構 NITS フェロー

プログラム 講師のお話とアクティビティ

参加費 無料



探究学習は子どもたちが生き方を学ぶものです。でも、探究学習の伴走をしながら「これでよいのだろうか…」と感じる時もあるのではないのでしょうか。今回は、探究学習に関わる皆さんに改めて探究を経験していただき、その後の探究学習の支援、あるいは校内研修等のヒントになればと思っています。難しく考えず気軽にご参加ください。

③視察

- 日時：令和8年2月3日
- 視察校：愛知県 東浦町立緒川小学校
⇒ 自由進度学習を40数年実施
- 参加者：5人（探究を支援している小学校5校から）
- 報告会：第2回探究学習カンファレンスで報告

Ⅱ 学校支援 ①上中中学校

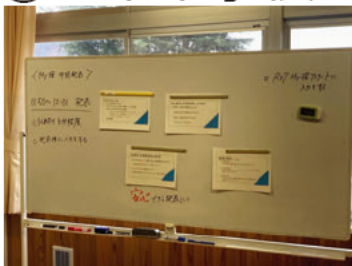
- 目指す生徒像「自律・協働・創造する生徒」
⇒ 研究主題「自律・協働・創造する生徒の育成」
- 経緯
 - 令和5年：探究支援生徒 ● 教員 ● 探究研修会 ● ●
 - 令和6年：探究支援 ● ● 探究研修会 ●
 - 令和7年：探究支援 ● ●
- 特徴
 - 生徒：M y 探究 毎週金曜日5・6限目
⇒ 12月 中間発表会、2月 マイ・ストーリー発表会
 - 教職員：M y 研究

①上中中学校

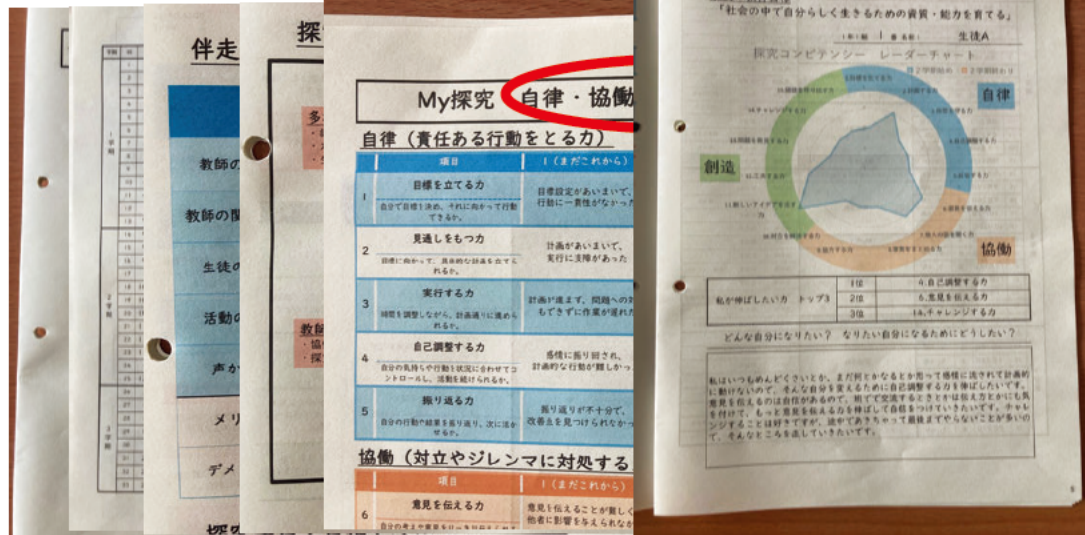
・生徒の様子(一部R6含)



①上中中学校 中間発表会



①上中中学校 教職員の様子



②栗野中学校

- 学校訪問：
 - ①情報交換（メール等でも実施）
 - ②探究学習確認および支援
- 1・2年生徒「探究」研修会
 - 特徴
 - 水曜日6限が主の活動時間 + 毎朝20分の活動の時間
 - 2年生
 - ①OUR探究⇔「敦賀の発展のためにできること」
 - ②my探究⇔「敦賀の未来」×「関西万博」×「自己の未来」
で「問いづくり」に取り組む
 - 1年生：敦賀市の良さを見直そう（嶺北との違いは）。

③小浜第二中学校

■特徴：縦割り探究

☑ 『ふるさとおばま』を
フィールドにして
wonder (わくわく) を
だれかの笑顔に！ > ◡ <

〇〇を、△△で、□□にしたい！
だれ 方法 どんなゴール

★縦割り探究の基本構造

<p>1年生 インプット期</p> <p>テーマ探しや探究のサイクルの回し方も学ぶ！</p>	<p>2年生 探究期</p> <p>本格的にテーマを掘り下げて、どしどし探究を深めていく！</p>	<p>3年生 アウトプット期</p> <p>掘り下げた探究についてまとめ発表し、他者に伝える！</p>
--	---	---

① グループ編成について

3年生の中間発表をよく聴く&担当の先生とよく対話する
自分がワクワクできるテーマで探究を楽しもう！

〇〇について探究したい！ (自分で)

先輩の◆◆のテーマで一緒に探究したい！ (3年生と)

③小浜二中

プレゼンテーションの目的は、相手の行動を促すこと

インタビュー

- 子ども家庭の代表者の宇野さん
- 子どもたちの笑顔を見るとやりがいを感じる
- 片親の家庭がよく来る
- ほんとうに困っている人はあまり来ない
- 子ども食堂がもっと増えてほしい

1	探究テーマ	学ぶ意味とは			
2	このテーマにした理由	多くの人が「なぜ勉強するのか」や「なぜ学ぶのか」という考えを持つ			
3	探究目標 (結果予期)	自分自身の学ぶ意味を言語化できるくらい明確にする			
4	学ぶ目的について①	探究課題解決へのToDoリスト (Doしたらエック)			
5	今、学んでいることは？				
6	なぜ学ぶ？ (自分なりに)				
10	意識するポイント(結果予期)	学習計画 (実行確認)	分	自己調整の振り返り(実行確認・援助要請・環境)	
11	本時のゴール	学ぶ目的について考え込む		計画以上に進んだ	今日の活
12	こつて語り合う	学ぶ目的について話す		計画以上に進んだ	今日の活
13	本時の自分目標	次の時間の計画・振り返り	7	計画以上に進んだ	今日の活
23	学ぶ目的を考える	スライドづくり	合計 7	計画以上に進んだ	今日の活
24	本時のゴール	松村先生・溝上にアウトプット		計画以上に進んだ	今日の活
25	スライド完成&探究のまとめ	推敲タイム		計画以上に進んだ	今日の活
26				計画以上に進んだ	今日の活
27				計画以上に進んだ	今日の活

プレゼンの力 (3段階評価, 3がとても良い)

	声の大きさ	話す速さ	アイコンタクト	熱意	合計 (自動)
太郎	選択し...	選択し...	選択し...	選択し...	
琉	選択し...	選択し...	選択し...	選択し...	
心	選択し...	選択し...	選択し...	選択し...	

③小浜二中



22 コウノトリ通信 令和7年12月22日(月)(12/19探究発表会振り返り)
中学校の探究とても楽しかった!



○先生方の振り返り

(子どものよかった姿など)

・今まで3年生が率先して司会をしたり、感想や質問を発表したりしてきましたが、今回は、2年生が司会を進んで引き受け、1年生が挙手して質問をする姿が見られました。3年生の姿を見てきたからこそ、聴き方や発言することの大切さを学んでいる気がします。成長を感じ、うれしいなあ、と見ていました。(大橋)

・年々良くなっていると感じるのが、探究のサイクルを意識した発表が増えていることです。「上手くいかなかった(こうすればもっとよいかも!)

・自分で作って置いてなんですが…レギュレイトフォームの「自己調整の振り返り」を省いて探究の足跡をもっと残せるようにしたほうが良いと思いました。最終発表の振り返りではないです。すみません。(早)←次年度に期待!笑(板谷)

(その他ご意見など)

・自分の班の反省として、子どもと一緒にスライドの中身をしっかりと推敲することができなかったのが反省です

発表会を参観して下さった福井大学清川先生からのお言葉です。

- ・子どもたちが楽しみながらとにかく動いて来たことが伝わった。
- ・「問い」と「課題」の連いをはっきりと認識できるといい。
(課題設定の背景がもう少し伝わるとさらにGood)
- ・文献調査、先行研究を調べてみるのも一つの手!
- ・言葉の定義を具体的にできるとより、活動が具体的にになっていくのでは?
(勉強を楽しくしたい!←「勉強を楽しく」とはどのような状態か?)
具体的な言葉や数値をで定義する。→エピソードで語る、深掘れる力

④高浜中学校

■特徴

- ・グループ探究
- ・「未来創造高浜プラン」

テーマ例

「バスケットゴール建設」：3on3のコートづくり

「内浦レモン」：内浦レモンを使ったデザートの再考

「七年祭」：CM・スライドづくり

⑤大島小学校

■経緯

- ・令和6年：探究支援**教員** ● 探究研修会**教員** ●
- ・令和7年：探究支援**教員** ●

■児童の主な取組み

「大島をPR」「海のゴミを生かそう！」

■主な支援内容

- ・全職員が共通認識を持つループリック作成を提案
⇒具体的場面の共有を提案
- ・他校との交流を提案 ⇒ 坂井市立雄島小学校と

2025 大島小学校 <目指す児童像> ループリック (高学年)

年 名前 ()

	1	2	3	4	5
自分や相手を大切にできる子	・あいさつをする。 ・いやなことを言わない。	・相手に対して、丁寧な言葉を使う。	・相手に対して、丁寧な言葉を使い、思いやりのある行動をとる。	・相手が悲しい時や困っている時に、気づき、手を貸そうとする。	・相手と意見が違ったり、争いごとがあったりした時も、冷静に相手を思いやった言葉で、解決しようとする。
たくましくやりぬく子	・楽しく学校生活を送る。	・自分の良さや得意なことに気づき伸ばそうとする。	・課題意識を持つ。	・課題意識を持って目標をたてようとする。	・自分で目標を決め、目標に向かって努力しようとする。
自ら学びよく考える子	・自分の考えを周囲に伝える。	・疑問や発見したことから考えを深める。	・与えられた課題について、メディアを利用して解決しようとする。	・自ら課題を見つけ、課題解決に向けて取り組もうとする。	・課題解決に向けて、周囲に働きかけて取り組もうとする。

⑥西津小学校

■特徴（6年生）：海×誰かを幸せにする

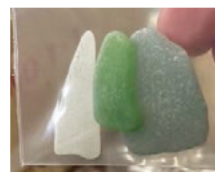
- ①おにぎり：おにぎりの味・具をよくするために、先生方だけでなく、シルバーセンターなど地域の人に聞くなど改善中
- ②塩：大相撲福井場所で使用。まだ食品レベルには…。
- ③ガチャ：ケースの中身は貝殻など。地域の祭りなどで好評。
ガチャの軸の固定が課題

■支援等

- ・文献調査等の実施：塩の乾燥など、先行事例の調査を。
- ・幸せにした人の顔が見える行動を！

○良い点

- こちらの質問にも自分の言葉で返せる。
- クラス全体との時間で、私との時間の感想もすぐに手を挙げて発表



その他の学校状況

⑦中郷小

- ・ 探究参観と教職員との意見交換

⑧栗野小

- ・ 探究参観、・ 職員研修会（1/28）

⑨梅の里小

- ・ 探究担当教員との情報交換

⑩若狭高

- ・ 1年理数探究科第1回探究協働会議で生徒の研究テーマ決めに伴走

先生達の声から

- ◆ どうしたらいい？の答になるようなFAQを学校で作りたい。
⇒ 各校共通のFAQを各学校で！？
- ◆ クラウドのビッグデータの中から探し物を探す生成AIを。
- ◆ **探究学習関係者が集まる場があるといいな！**
⇒ 次年度支援と共にネットワークづくりを！
⇒ 嶺南地区学校の自走を支援

◎ 学び合うコミュニティには、次の2つが必要。

コミュニティ・オブ・プラクティス（E.ウエンガー）

- フォーマルなコミュニティ
- インフォーマルなコミュニティ ⇔ **ここの伴走を！**

ご清聴ありがとうございました。

**嶺南各校の探究学習のご支援を！
お願いいたします。**

③ 持続可能な嶺南地域の構築に向けた取組
～小浜市上根来集落での取り組みを通じて～



福井大学
地域創生推進本部
特命助教 山形 亮太

講演資料

持続可能な嶺南地域の構築に
向けた取組
～小浜市上根来集落での
取り組みを通じて～

福井大学 地域創生推進本部
嶺南地域共創センター
山形 亮太

プレゼンテーションの構成

- 01 研究趣旨
- 02 嶺南地域の無住集落の把握
- 03 活用型の無住集落について
- 04 上根来地区での調査結果報告
- 05 上根来地区での取り組み
- 06 今後の活動について

調査趣旨説明

目標

嶺南地域の文脈を損なうことなく、
小さくとも永く続く豊かな地域にする

そのためには…

- ・都市と農漁村のより一体的な地域づくり
- ・先を見据えた住民主導の撤退と再興の戦略づくり
- ・次世代への継承機会の確保



場所ごとに知見を得る必要
まずは課題先進地の無住集落

調査趣旨説明

本調査の目的

福井県嶺南地域における

- ①無住集落の把握
- ②無住集落の持続性の評価



- ①無住集落の活用実態や分布を把握
- ②アンケートやインタビューから現役世代の意向、子供世代の継承に対する考え方などを把握

嶺南地域における無住集落の分布

【福井県】

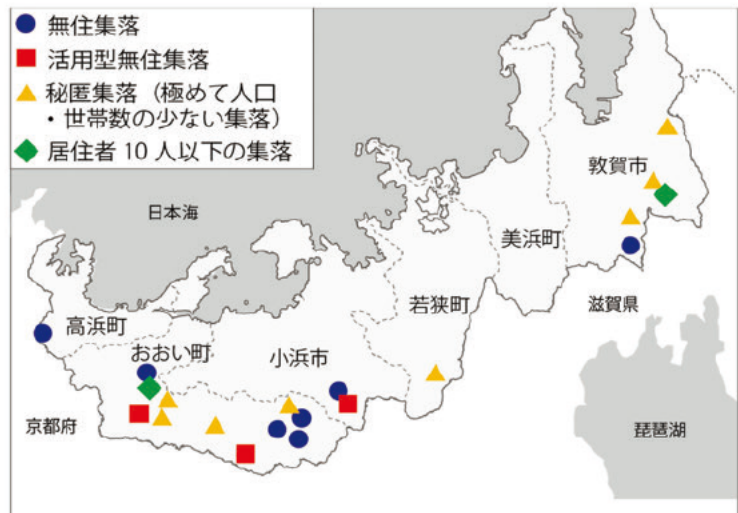


嶺南地域

2市4町

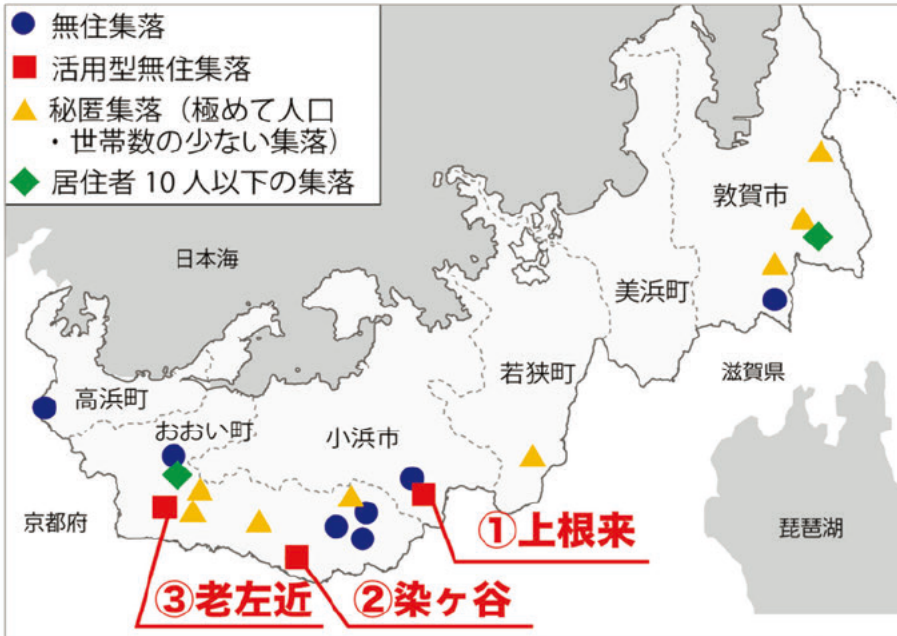
人口：128,325人 (17.3%)

面積：1,099km² (26.2%)



無住集落 **10箇所(24.4%)**
秘匿集落 **8箇所(16.3%)**
居住者10人以下 **2箇所(28.6%)**

研究対象地



嶺南地域の無住集落のうち

何らかの維持活用が行われている集落→3集落

上根来集落（小浜市）

最も古い**鯖街道**の針畑ルート沿いの「**無住集落**」
 最盛期には300人以上が居住
 元住民などが維持管理活動



染ヶ谷集落（おおい町）

鯖街道の周山街道ルート沿いの「無住集落」だった
キャンプ場

元住民の組合が経営



老左近集落（おおい町）

おおい町名田庄の最奥部に所在する最小の「無住集落」
2000年頃無住化

NPO法人が維持管理・活用



無住化後も維持・活用されている集落の活動状況

	主な活動の種類	活動主体	構成員	活動人数	活動開始時期	無住になった時期
①上根来 (小浜市)	道路・建物管理	任意住民組織	元住民のみ	3 ^{*1}	2012年頃	2013年
	宿泊業（古民家一棟貸）	NPO法人	集落外住民 (市内のみ)	2	2011年	
②染ヶ谷 (おおい町)	宿泊業 (キャンプ場 八ヶ峰家族旅行村・ 古民家一棟貸含む)	八ヶ峰家族 旅行村組合	元住民のみ	5 ^{*2}	1968年	1972年
③老左近 (おおい町)	イベント 宿泊業（古民家一棟貸）	NPO法人	集落外住民 (町外含む)	2~3	2004年	1999年

*1 中核的な人数。13名ほど所属しており、作業の必要人数に合わせて調整される。
*2 日常的な維持管理を行う人数。繁忙期は親族総出で行う（人数は不明）

ヒアリング結果（8月～9月にかけて対面で実施）

	名称	性別	年齢	所属	属性	継続 意向	継承 意向	取り組みに関する意見
①上根来 (小浜市)	A氏	男	65	任意 住民 組織	元住民	○	×	・子供世代は、上根来で生まれ育っておらず、自分たちのような動機はない。 ・ <u>時間とお金のかかることを子供たちにはさせられないので、最後の世代になると思われる。</u>
	B氏	男	65	NPO	集落外 (市内) 住民	○	○	・上根来がどうなるかを見届けたい。(活性化に拘らない) ・理想的には事業をきっかけに集落に人が戻ってきて欲しい。
	C氏	男	41			○	○	
②染ヶ谷 (おおい 町)	D氏	男	67	八ヶ 峰 家族 旅行 村 組合	元住民	○	×	・事業の収入に関係なく、故郷が朽ちていくのは見過ごせない ので関わる。 ・ <u>事業収入は低く、子供世代が関わることは難しい。</u> ・ <u>今後事業譲渡が考えられるが、現行の元住民のみで運営され ている場合に比べ、かなり難しくなる。</u>
	E氏	男	64			○	×	
③老左近 (おおい 町)	F氏	男	66	NPO	集落外 (町内) 住民	○	△	・現時点以上の事業拡大は考えていない ・老左近で楽しめることを様々な人と考えていきたい。 ・地域を良くすることを目的に事業をするなら受け入れる。
	G氏	女	37	営利 会社 ^{*1}		△	○	

集落の共通の課題

- ・ 全ての集落で60代前半以上が主力
近い将来、活動の維持が困難になる可能性大
- ・ 現在の主力世代は継承について悲観的
- ・ 子供世代とのコミュニケーションが不十分で、集落での活動への参加が見られない



子供世代の考え方は？

アンケートの構成について

上根来集落の元住民（15世帯）に郵送調査

対象者	定義	主な調査項目
親世代	現在集落活動に関わっている世代	<ul style="list-style-type: none">・ 回答者属性・ 集落の居住歴・ <u>現在の集落への関与度</u>・ <u>子世代への継承状況</u> 等
子世代	親世代の子供	<ul style="list-style-type: none">・ 回答者属性・ <u>親からの継承状況、意識</u>・ <u>今後の意向</u> 等

回答者の属性

回答世帯数	全体	割合
6	15	40.0%
5	15	33.3%

■ 居住地の特徴

- ・親世代：上根来から近距離の団地住みが多い
- ・子世代：親世代と近居もしくは同居が多い

■ 職業・勤務地の特徴

- ・親世代：建設業の自営業が多い
- ・子世代：会社員で勤務地は小浜市内

住民の居住地について

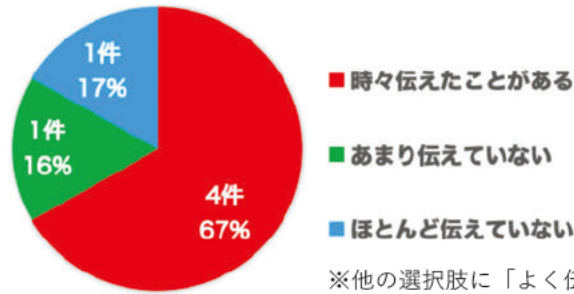


A団地は一部の元住民が集団移住先の土地として仲介した
(現在の活動の中心的人物はこの団地に居住)

継承について（アンケート結果）

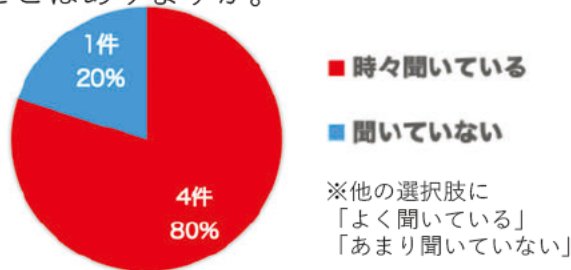
親世代

Q.上根来地区に関する思い出や歴史を伝えていますか。

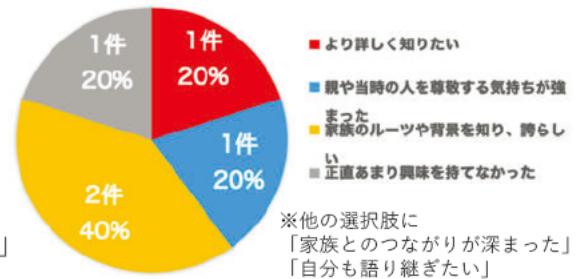


子世代

Q.集落に関する思い出や歴史を聞いたことはありますか。



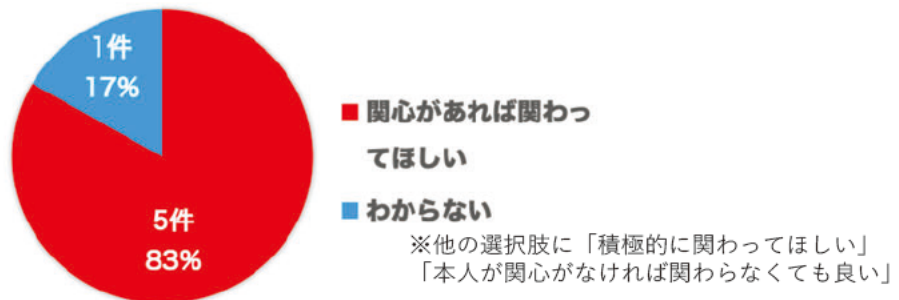
Q.集落に関する思い出や歴史を聞いてどのように感じましたか。



継承について（アンケート結果）

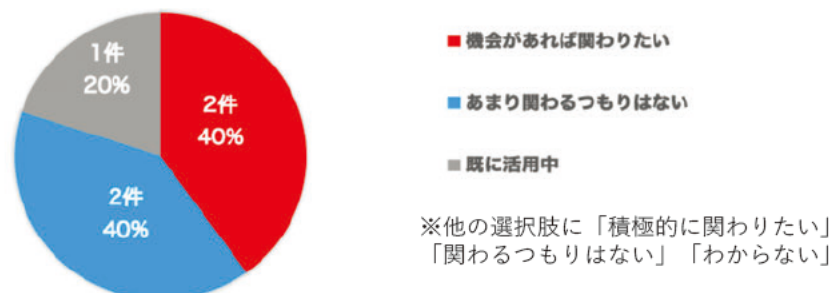
親世代

Q.今後、子供世代が上根来地区と関わりを持つことをどのようにお考えですか。



子世代

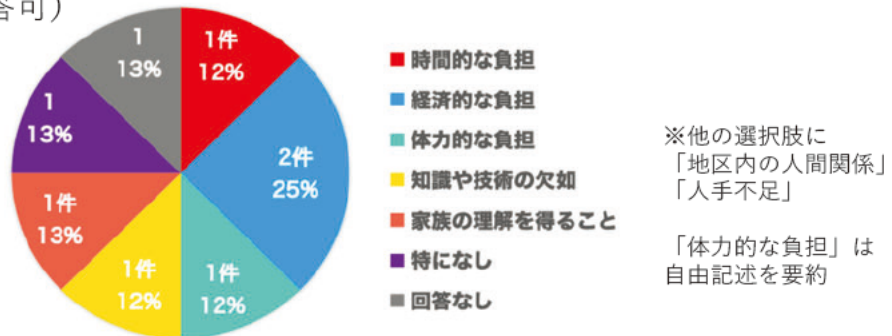
Q.今後、集落との関わりをどの程度持ちたいと考えていますか。



負担に感じている要素について（アンケート結果）

Q.集落やご自身が所有する土地・建物との関わりの上で負担に感じることは何ですか。（複数回答可）

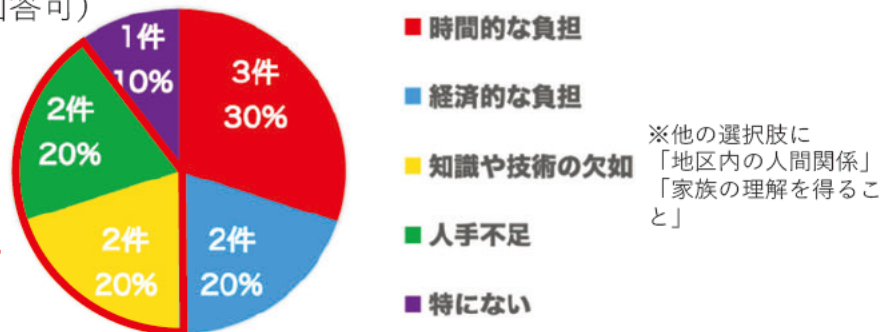
親世代



Q.集落や今後所有が見込まれる土地・建物と関わりの上で負担に感じることは何ですか。（複数回答可）

子世代

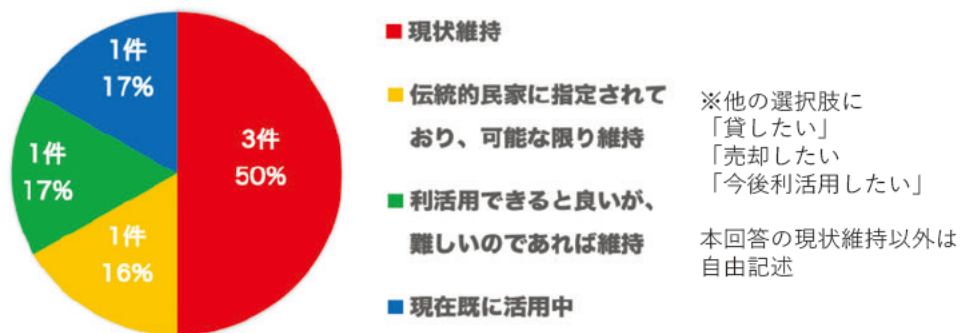
将来的な自然解決が難しい部分



維持・利活用について（アンケート結果）

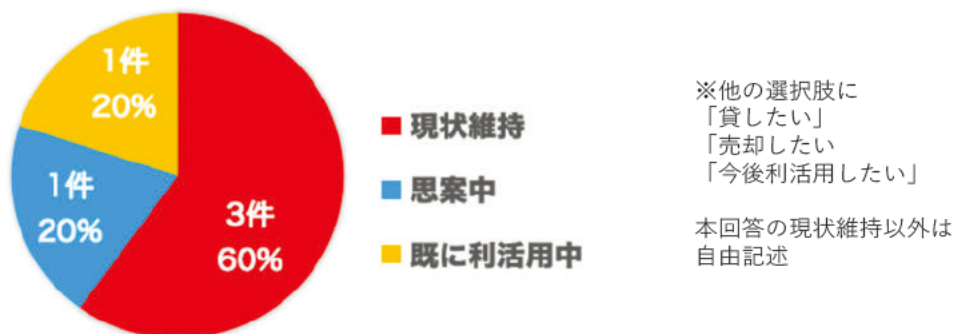
Q.現時点での所有している土地・建物の今後の意向を教えてください。

親世代



Q.今後所有が見込まれる土地・建物の今後の意向を教えてください。

子世代



まとめ

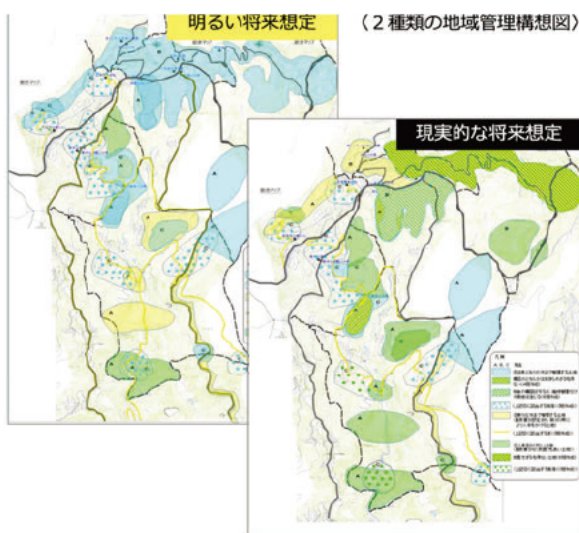
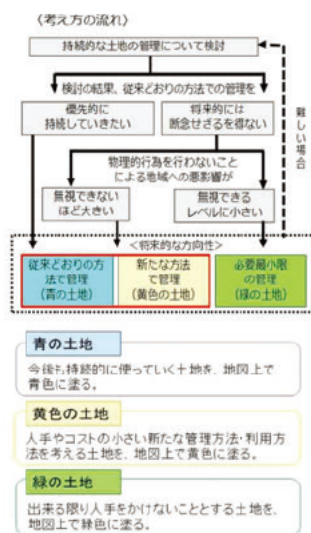
- 親→子へ活動内容の伝達頻度「時々」
現時点で子の積極的な関心・実際の活動参加なし
- 親・子とも「現状維持」だが負担の内容にギャップ
親世代→経済・体力の不足
子世代→知識・技術、人の不足
- 遠方の移住者（片道30分以上）→関与なし
今後も増加見込、日常の維持管理人口減

今後の展開

- ① マルチシナリオ策定支援（維持部分を決める）
→ 総労力の減少
- ② イベント等を通じた子供世代・外部人材への
継承機会の創造
→ 将来関与人数、必要技術・知識の確保

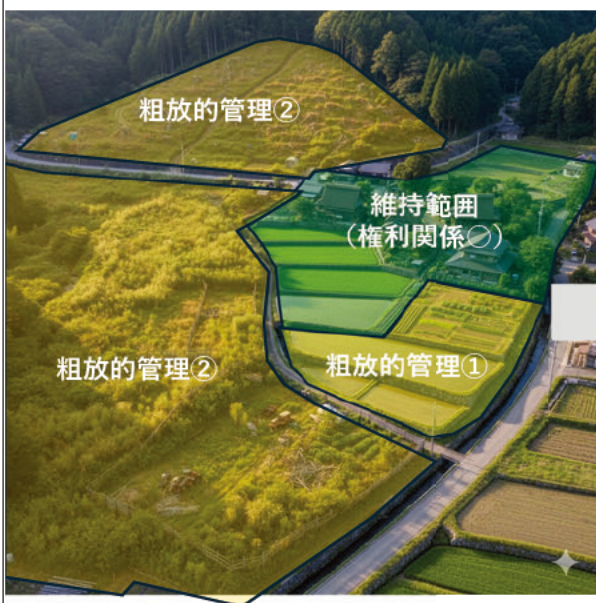
行政と住民の中間機関（例：大学、NPO、一社）
による関与の可能性

今後の展開（マルチシナリオ策定支援）



今後の展開

マルチシナリオ作りによる計画的な維持管理戦略づくり



(Google Geminiで作成)

将来の状況に応じて、管理範囲・レベルを変えることもあり得る

今後の展開（技術・知識の確保機会としてのイベント）

実施済



第1回 上根来を想う会

上根来地区の元住民とその子供世代を対象に
上根来の過去・現在・未来を専門家とともに体験
上根来について考え、最後に少しだけ想いを共有しましょう

日時 2025年11月16日（日）
11:00～15:00

場所 鯖街道 御休処 「助太郎」
（福井県小浜市上根来9-20）

内容 現地視察+昼食会+講演+意見交換
詳細は裏面をご覧ください。

申込 参加費無料 石の参加申込フォームから
お申し込みください。 >>> 申込フォーム
[下記メールが電話からも申込頂けます。]

「助太郎」地図



申込フォーム



【お問い合わせ先】福井大学 地域創生推進本部 福南地域共創センター 特命助教 山形 亮太
tel: 0770-64-5340 email: ryo-y@u-fukui.ac.jp

-スケジュール-

1 11:00 上根来を見る（フィールドワーク）

■百里会（ひゃくりかい）（元住民組織）
現在も様々な取り組みをしている元住民組織の方々と共に
上根来地区内を歩いて地区内の状況や取組を見学。



2 12:00 上根来を食す（昼食会）

■吉岡翔太氏（MINSHUKU よしおかや）
若手料理人の全国大会でベスト4入りのフレンチシェフが
織りなす上根来由来の食材を使用したプレミアムな食事会。



3 13:00 上根来を知る（講演）

■白木達也氏（北海道大学 文学院 人間科学専攻 修士課程）
学部時代から上根来でのヒアリング調査などを行ってきた
調査結果の報告。



■林直樹氏（金沢大学 人間社会研究域 地域創造学系 准教授）
縮小時代の農村戦略研究の第一人者。全国の無住集落の
事例などの紹介。近著に「撤退と再興の農村計画」など。



4 14:00 上根来を考える（ワークショップ）

上根来について、思ったことや考えていることを共有
[サポート係：学生（金沢大学+福井大学）]



15:00 解散

主催：福井大学 地域創生推進本部 福南地域共創センター
共催：百里会 後援：NPO法人WACおばま、福井県道山里海湖研究所
協力：金沢大学 人間社会研究域 林道創研究、福井大学 工学部 建築・都市環境工学科 原田種子研究室

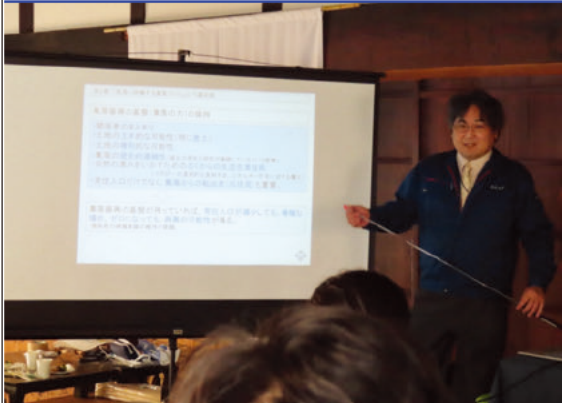
①フィールドワーク



② 昼食会



③ 講演会



④ワークショップ



集合写真



今後の展開（技術・知識の確保機会としてのイベント）



雪室 YUKIMURO

2025-2026 冬

嶺南唯一の雪室に
あなたの食品を
入れてみませんか？



4月には雪室食品を使った
一日CafeもOpen予定！

イメージ図

日時 雪室が完成次第（2月頃）
申し込みいただいた方には追ってご連絡いたします

場所 小浜市上根来旧畜舎 「旧畜舎」地図
道中は除雪されていますが、スタッドスタイヤを着用するなどの雪道対策は行ってください。

申込 参加費無料 >>>>>> 申込フォーム
右の参加申込フォームもしくは
下記メールが電話からも申し込みいただけます

【お問い合わせ先】福井大学 地域創生推進本部 嶺南地域共創センター 特命助教 山形 亮太
Tel:0770-64-5340 Email: ryo-y@g.u-fukui.ac.jp




今後の展開（技術・知識の確保機会としてのイベント）



ご清聴ありがとうございました

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクト

④ 福井県嶺南地域における課題解決型事業・プロジェクトについて

嶺南地域共創センターでは、福井大学の第4期中期計画を推進するため、ステークホルダーと協働し、学内公募により、嶺南地域の課題解決に取り組む事業・プロジェクトに対し支援を行っています。

<対象事業・プロジェクト>

嶺南2市4町（敦賀市、小浜市、美浜町、若狭町、おおい町、高浜町）・福井県等と連携し、嶺南地域の地域課題に取り組む事業・プロジェクト

<令和7年度実施分>

	事業名
1	R7年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト
2	令和7年度嶺南地域をフィールドとした学校—地域連携教育プログラム開発合宿研修
3	フレイル予防と若さの絆プロジェクト
4	小浜みらいGO膳プロジェクト
5	美浜町におけるはあとぴあ内のこどもと高齢者のためのあそび場の設計に関する研究
6	福井こんぶDay プロジェクト ～福井の昆布文化を発信する～
7	嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動
8	嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト
9	敦賀市民と福井大学留学生との交流事業 ～多文化共生の実現を目指して～
10	小浜市営住宅活用提案プロジェクト
11	福井梅の収量向上のための動画像・点群処理・骨格化を用いた樹構造解析と収量調査
12	嶺南地域における未活用食資源のリデザイン

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	R7年度 理科嶺南地域教材開発・活用プロジェクト		
代表者名	藤井 純子	代表者所属・役職	人文・社会系部門 教員養成領域・助手
配分額（円）	116,000 円		

(1) 期間
令和7年4月29日（火）
(2) プロジェクトの目的
嶺南地域の自然活用授業を開発するため、現地での実地研修を行う。この経験を活かし、嶺南地域に強い（理科）教員養成に繋げる。
(3) プロジェクトの実施内容
<p>地域資源教材開発・活用：「三方五湖周辺地学巡検」</p> <p>日時：令和7年4月29日（火）8:00～17:00頃</p> <p>参加者：教育学部で理科の免許取得を希望し「基礎地学実験」または「地学演習」を受講中の学部2～3年生16名、福井CST養成プログラム受講者（3年生）4名、教員2名、合計22名</p> <p>概要：三方五湖周辺を巡り、嶺南地域の特徴的な構造や地質を知り、福井県、特に嶺南地域の地域素材を活用した授業づくりができるようにする。</p> <p>日程：8:00 福井大学文京キャンパス 発</p> <p>実習地</p> <ul style="list-style-type: none"> ・早瀬付近のアプライト質花崗岩と離水海食洞 ・レインボーライン、梅丈岳（各湖の特徴・三方五湖の遠望） ・塩坂越のチャート（付加帯の中古生層中の層状チャート）

【様式2】

- ・河中神社と恋の松原（旧河川と隆起後の変化）
- ・浦見運河（水月湖と久々子湖を繋ぐ運河の掘削，湖の水位の変化）
- ・美浜の耳川（堤防のない河川）
- ・福井県里山里海湖研究所

17:00 頃 福井大学文京キャンパス 解散

担当：教育学部 山本 博文・藤井 純子

(4) 得られた成果

三方五湖は、嶺南地域における理科教育（自然教育）として非常に有用な教材である。しかし、教材として利用するための理解が必ずしも充分進んでいるとは言えない。今回のような現地見学会を含めた三方五湖の研修は、嶺南で活躍する教員には必須であると思われる。三方五湖の自然を教材として地元理解を進める上では、実際に現地に出向いて地形や地質、岩石等を観察、体感することは教育現場においても非常に役に立つと思われる。さらに地域の歴史とも繋がりががあるため、小学校や中学校どちらにおいても、理科や社会などの教科を跨ぐ教材としても活用できると期待できる。

今回の地学巡検に参加した学生の中には二度目の参加となる学生もいたが、一度目には理解しきれなかったことが、今回やっと腑に落ちた、こんなに面白い意味があったのかと熱心に取り組み、他の参加者と活発に意見交換する様子が見られた。同じ経験でも、繰り返すことによってこのように大きな意識の変化をもたらし、知的好奇心を刺激することにこちらも驚かされた。

これまで教員免許状更新講習等でも何度かこの三方五湖を題材に研修を行っており、少しずつではあるが、嶺南の自然の宝物という理解が進んでいると感じている。研修を受けた学生が、教員として学校現場で子供たちに三方五湖の自然を紹介することで、地元の宝物という理解がさらに進むことを期待している。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

三方五湖の成り立ちや重要性を理解している教員の数は、まだ充分とはとても言うことができず、この事業を継続することにより、三方五湖の成り立ちやその重要性を伝えていくことができる教員の数を増やしていかなければならないと考えている。教員養成学部で

【様式2】

ある当学科の担当する授業において、機会がある毎に取り上げ、学生に周知していきたい。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	令和7年度嶺南地域をフィールドとした学校-地域連携教育プログラム開発合宿研修		
代表者名	浅原雅浩	代表者所属・役職	教員養成領域・教授
配分額（円）	450,000円		

(1) 期間
2025年5月16日(金) - 18日(日) (2泊3日)
(2) プロジェクトの目的
<p>R6, 7年度地域連携カリキュラム研究Ⅱの受講者合同による、地域の体験活動を主体とした、嶺南地域の実地調査研究に基づく小学校-地域連携カリキュラムの開発実習を行う。その結果、嶺南地域全域の小中高で展開されている「ふるさと学習」推進プロジェクト（探究的な学び）に資するプログラム開発と担当教員養成に寄与する。</p> <p>更に、プログラム開発・運営には、連合教職開発研究科の院生2名も加わり、院生に対するOJTの場ともする。</p>
(3) プロジェクトの実施内容
<p>5月16日(金)</p> <p>12:30 福井大学発</p> <p>14:00-15:15 敦賀南小学校 説明・インタビュー</p> <p>15:30-17:10 原子力の科学館 あつとほうむ館内見学・実験・あつとシアター・質疑</p> <p>17:35 伝平荘 着</p> <p>18:30-19:30 夕食（各自で配膳）</p> <p>19:30-21:30 グループワーク（途中、20:00-22:00 順番(男→女)に入浴）</p> <p>23:00 消灯・就寝</p> <p>5月17日(土)</p>

【様式2】

7:30	朝食（各自で配膳）	
8:40	マイクロバスにて、中池見湿地へ移動	
9:00-10:05	中池見湿地（藤ヶ丘駐車場）（長靴着用，学芸員の講義・内覧・質疑応答）	
10:20-10:50	気比神宮（ここから徒歩移動，ガイド2名とともに2グループに分かれて）	
11:15-12:15	人道の港敦賀 ムゼウム	
12:15-13:30	移動・昼食・移動 ← 各自 or グループで昼食会場を選択	
13:30-14:20	敦賀みなと山車会館 ← 集合時間厳守	
14:30-15:20	敦賀市立博物館	
15:20	プラン① 徒歩で 本勝寺 → 永賞寺へ	プラン② バスで 疋田舟川 へ
15:45	永賞寺 着	疋田舟川 着
	16:40 バス待ち	16:30 バス移動開始
16:50	永賞寺 発	
17:30	（敦賀駅 経由） 伝平荘 着	
18:00	夕食（各自で配膳）	
19:00-22:30	地域素材を活用した学習プログラム作成（途中、入浴&中間チェック）	
23:00	消灯・就寝	

5月18日(日)

7:00	起床&荷物の整理	
7:30	朝食（各自で配膳）荷物を持って集合	
8:20-10:50	資料作成	
11:00-12:10	プレゼンテーション（発表7分・質疑3分）←地域のステークホルダー対象	
12:15-13:00	昼食	13:15 伝平荘 発 14:45 頃 福井大学 着



2年生事前調査の発表(5/14)



敦賀南小学校(5/16)



あつとうほうむ(5/16)



中池見湿地(5/17)



気比神宮(5/17)



敦賀みなと山車会館(5/17)



ムゼウム(5/17)



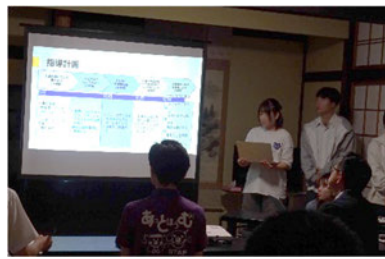
本勝寺(5/17)



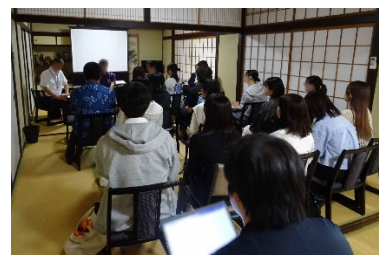
疋田舟川(5/17)



プログラム作成中(5/17 夜)



成果発表(5/18 午前)



ステークホルダーの助言

(5/19)

(4) 得られた成果

学生は、4つにグループに分かれて、地域連携教育プログラムの開発を行った。成果物の抜粋は以下の通りである。

中池見湿地〇〇になろう！

概要

初等教育コース 3系
2年 ○○○○
3年 ○○○○、○○○○、○○○○

第4学年 (13時間)	第5学年 (10時間)	第6学年 (6時間～)
〇中池見湿地マスターになろう！ ・中池見湿地の調査をし、春夏秋冬の生態系を記録する。	〇福井の湿地博士になろう！ ・県内の小学校と交流し、取り組みをまねる。	〇中池見湿地のヒーローになろう！ ・中池見湿地の特徴を生かした環境保全を促進する活動を考える(できれば実施)

命のつながりについて考えよう

チームB
2年:○○○○ 3年:○○○○ ○○○○ ○○○○

指導計画

9月	10月	11月	12月
入道の港について調べよう(3時間) ・事前調査 ・数箇所で入道の行いについてインターネット等で情報を集める	ムゼウムへ行ってみよう(3時間) ・実際にムゼウムへ行き、ボランティアガイドからお話を聞く ・事前に質問事項を準備する	まとめ・中間報告会(4時間) ・グループでこれまでの学びをポスターにまとめる ・児童間で発表する	住職にお話を聞いて考えよう(3時間) ・本願寺住職にお話を聞き、お話を基に自分の命について考える ・発表会に向けて発表する ・発表を聞きながら考えたことや気づきなどについて振り返り活動を行う

山車の文化を伝える

○○○○、○○○○、○○○○、○○○○

単元の詳細

対象：敦賀市小学校4年生単級クラス(35人想定)
教科：総合、社会、図工、家庭科、情報
【実施期間】
4年生の9月～5年生の7月

実施月	活動
4年生 9月	山車の存在を知る
10月	山車の伝統を受け継ぐことの意味を考える
11月	私たちにできることは何かを考える
12月～3月	敦賀の山車を知る 知名度調査 オリジナル山車作成の計画を立てる
5年生 4月～6月	オリジナル山車作成開始
7月	オリジナル山車をひく

水田循環のヒミツを大発見！

～水田循環と生態系のつながり～

チームD
2年 ○○○○、○○○○
3年 ○○○○、○○○○

3. 単元計画 (全24時間)

春 → 夏 → 秋 → 冬

- 事前学習：中池見湿地の季節の田んぼの特徴調査 … 1コマ
- 現地活動：中池見湿地の田んぼの季節の動植物調査 … 2コマ
- 事後学習：前季節との比較 … 1コマ

①+②+③ + ④(まとめ) 動画制作・発表会(準備も含む) … 計12コマ

2023/5/17 → 中学校での継続的な学びへ

(5) 今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が(1)または(2)の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。

これまで、本センターの支援を受け、令和5年度はおおい町、令和6年度は若狭町、そして、令和7年度(本年度)は敦賀市をフィールドとして、地域資源を活用した地域連携教育プログラムを学生とともにを行い、地域の学校教育や学校を支援する組織の関係者に対して本事業で作成したプログラムを公表してきた。特に、今年度は、参加頂いた小学校長からのご支援もあり、プログラム「山車の文化を伝える」に関しては、3回の特別プログラムとして再構成し、本年度の夏季

山車ってなにー？

山車を知らない人に魅力を伝えよう！

開催場所：敦賀市小学校

7月27日(日) 9時～12時
山車ってなに？
山車ってなに？
山車ってなに？

8月3日(日) 10時30分～15時
山車をめぐる！
山車をめぐる！
山車をめぐる！

8月12日(水) 9時～12時
山車のこと発表！
山車のこと発表！
山車のこと発表！

※特別支援教育用(小学校4～5年生用)で、(開催)の予定です。
※特別支援教育用(小学校4～5年生用)で、(開催)の予定です。
※特別支援教育用(小学校4～5年生用)で、(開催)の予定です。

【様式2】

休暇中を中心に、有志の学生と当該校長のコラボによる地域連携イベントが実施された。



令和8年度は、小浜市をフィールドとしたプログラム開発を計画している。次年度以降も、このプロジェクトから始まる嶺南地域の子どもたちが、もっと深く嶺南地域を知る活動に繋げていきたい。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	フレイル予防と若さの絆プロジェクト		
代表者名	山村修	代表者所属・役職	医学部 地域医療推進講座
配分額（円）	447,000 円		

(1) 期間	
2025年4月1日～2026年3月31日	
(2) プロジェクトの目的	
<p>今年度からは、従来の検診事業を継続するとともに、若狭町全域を対象にフレイル・サルコペニア予防の重要性について分かりやすい情報発信を行う。また、特定健診において行政主導で握力測定を実施し、若年層を含む住民の理解を促進する。これにより、地域全体でのフレイル・サルコペニア予防に加え、今後増加が予想される認知症予防への意識向上と体制強化を目指す。</p> <p>① 地域全体へのフレイル・サルコペニア・認知症予防に関わる講演会の実施 ② 特定健診における握力測定の解析 ③ 地域全体を対象とした福大検診の実施</p>	
(3) プロジェクトの実施内容	
<p>① フレイル・サルコペニア・認知症予防に関わる講演会の実施</p> <p>フレイル・サルコペニア・認知症予防に関する理解促進を目的として、住民を対象とした講演会を実施した（図1）。講演では、加齢に伴う身体機能低下の特徴や予防の重要性、日常生活で実践可能な運動・栄養・社会参加について解説した。</p>	
 <p>講演会チラシ</p> <p>今、はじめよう 健康のために</p> <p>元気でいたいあなたのための 健康づくりトーク</p> <p>元気で暮らすための会言葉「フレイル予防」 フレイルに虞は関係ありません。 自分の状態を知りたいと思った 今がチャンスです 元気に暮らすための秘訣 についてお話しいただきます</p> <p>申込不要・参加費無料 ※申し込みは必要とお願いいたします</p> <p>日時 2025年5月10日（土） 13:30～15:00（受付13:15～）</p> <p>場所 リゾナ若狭 講堂</p> <p>講師 福井大学医学部 地域医療推進講座 教授 山村 修 先生</p> <p>（お問い合わせ） 健康推進課 0770-62-2721 総務課 地域医療推進センター 0770-62-2702</p>	<p>講演会の様子</p>  <p>図1. 講演会</p> <p>参加者が180名と好評であった。</p>

【様式2】

② 特定健診における握力測定への解析

課が、若年層の無関心層（フレイル・サルコペニア）に対し筋力低下を実感する機会を提供することを目的として、特定健診における握力測定を実施した。得られたデータについては本講座が解析を行い、エビデンスに基づく政策立案に活用するための資料作成を進めている。

③ 地域全体を対象とした福大検診

福大検診は2025年6月および12月に実施した。両回ともに医学生、看護学生をはじめ、医師、臨床検査技師、診療放射線技師、理学療法士、作業療法士、看護師、保健師、管理栄養士が参加し、地域をフィールドとした多職種連携教育（IPE）を実践するなど、実践的な学習機会を提供することができた。（図1.）

図2. 地域をフィールドとした多職種連携教育（IPE）の実践現場

福大検診



スタッフ(多職種連携教育(IPE))

	若狭 6/28	若狭 6/29	若狭 12/13	若狭 12/14
医学科	20	20	14	14
看護	7	7		
医師	4	4	5	4
検査技師	4	5	5	5
放射線技師	3	3	2	2
作業療法士	6	6	3	3
理学療法士	13	7	9	9
看護師	2	2	3	4
保健師	1	1		1
管理栄養士		1		
事務	3	3	4	4



新潟大学歯学部



(4) 得られた成果

① 講演会の実施

講演会の実施により、参加者の健康づくりに対する意識向上の機会を提供することができた。また、その効果として本講座が実施する福大検診の参加者増加にもつながった。

② 特定健診における握力

握力基準:AWGS2025 採用 (65歳以上:男性<28kg、女性<18kg、50~64歳:男性<34kg、女性<20kg、*49歳以下は50-64歳の基準値を採用) 解析結果:サルコペニア疑い(各年齢層n数を基準とした%) 49歳以下(男性:0%,女性:約7%)、50~64歳(男性:約5%,女性:約5%)、65歳以上(男性:約4%,女性:約7%) この結果か

【様式2】

ら、男性では49歳以下と比較して50代以降で握力低下がみられる傾向があり、女性では65歳以降で握力低下が顕著となる傾向が示唆された。さらに解析を進め、エビデンスに基づく知見の蓄積に努め、その成果を行政へ提供する。

③ 福大検診結果

サルコペニア判定: AWGS2019 (プレサルコペニアは筋肉量低下のみ、ダイナペニアは筋肉量が正常で筋力または身体機能の低下、サルコペニアは筋肉量低下に加えて筋力または身体機能の低下を認める状態と定義される。)

- ・2025年6月:219名プレサルコペニア約8%, ダイナペニア約2%, サルコペニア約1%
- ・2025年12月:195名プレサルコペニア約11%, ダイナペニア約2%, サルコペニア約3%

- ・神経心理検査用プログラム(ミレボ)ミレボ得点45点以下:認知機能低下約2割

検診の実施により、地域住民におけるサルコペニアおよび認知機能低下の実態を把握する成果を得た。これらの結果は、今後のフレイルなどの予防や健康支援の検討に資する基礎資料となることが期待される。

当初計画から予算の変更が生じたものの、検診および多職種連携教育(IPE)を十分に実践することができた。地域をフィールドとして、多職種が現場での連携を学ぶ実践的な教育機会を創出するとともに、地域住民に対してフレイル・サルコペニア予防の重要性を知る機会を提供することができた。これらを通じて、教育的および地域貢献の両面において有意義な成果が得られた。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

今後は、特定健診における握力データの蓄積を進め、さらなる解析を行うことで、若年層を含めた住民がフレイルやサルコペニアを早期に認識する機会となる資料の作成を行い、行政施策の検討に資する情報提供に努める。また、地域住民の認知機能に関するデータを解析し、認知症予防に向けた基礎資料として行政への政策提言につなげていく。さらに、本事業で得られた結果を地域の医師や医療関係者へ共有する講演会を開催し、地域全体での予防医学の推進と健康寿命延伸に寄与することを目指す。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	小浜みらいGO膳プロジェクト		
代表者名	大西秀典	代表者所属・役職	医学部 地域医療推進講座
配分額（円）	446,000円		

(1) 期間													
令和7年4月1日～3月31日													
(2) プロジェクトの目的													
<p>プロジェクトの目的は、個別調理システムを導入することで、食事療法を必要とする患者および独居高齢者への適切な食事提供体制を構築し、地域全体の健康水準の向上を図ることである。</p> <p>令和7年度の目的</p> <p>② 個別加熱調理システムの導入による栄養状態とサルコペニアの状況を把握</p> <p>② i-DISH 株式会社を中心となり他施設への個別調理システムの導入の試み</p>													
(3) プロジェクトの実施内容													
<p>① 栄養評価の検診を2025年4月、2026年2月実施</p> <p>検診の実施は、2025年4月、2026年2月に検診ができた。2026年2月の検診では医師2名、事務スタッフ2名、臨床検査技師4名、理学療法士4名、作業療法士1名、医学生5名の参加があり、社会福祉施設をフィールドに多職種連携教育（IPE）が実践できた（図1.）。</p> <p>図1. 社会福祉施設をフィールドとした多職種連携教育（IPE）の実践現場</p>													
<table border="1"> <tr> <td colspan="2">検診(医療スタッフと学生によるIPE教育)</td> <td colspan="2">検診後の情報共有会</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td colspan="2"></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td></td> </tr> </table>		検診(医療スタッフと学生によるIPE教育)		検診後の情報共有会									
検診(医療スタッフと学生によるIPE教育)		検診後の情報共有会											
													

【様式2】

②個別調理システムの導入の拡大への試み

i-DISH 株式会社が事業拡大に向けて関係機関との調整および協議を行った。具体的には、小浜市内の医療機関、給食施設、福祉関係機関等と連携体制の構築に向けた打合せを実施し、個別調理システムの活用方法について意見交換を行うとともに、導入に向けた調整を進められた。

(4) 得られた成果

<検診結果>

成果として、検診を実施し参加者の健康状態を確認するとともに、結果を参加者へ還元する機会を提供することができた。2024年度と2025年度を比較した結果、個別調理システムの利用により栄養状態の改善を反映して血清アルブミン値の上昇

(4.2 ± 0.3 vs 4.4 ± 0.3) が認められた。一方、血清亜鉛値の低下 (86.8 ± 12.9 vs 71.8 ± 11.8) は、体内利用の増加や吸収不良による可能性が考えられる。また、HbA1c は低下 (5.6 ± 0.4 vs 5.3 ± 0.4) し代謝状態の改善が示唆された。しかし、立ち上がり、握力、片足立ち時間および筋肉量には変化は認められず維持されていたものの、身体機能の向上のためには今後、運動療法の併用が必要である可能性を示す知見を得た。

<多職種連携教育 (IPE) の実践>

社会福祉施設をフィールドとした多職種連携教育 (IPE) を実践することができ、実践的な学習機会として大変有意義な成果が得られた。

<個別調理システムの導入の拡大への試み>

i-DISH 株式会社が個別調理システムの導入に向けて関係機関との調整および交渉を進めており、現在も導入に向けた協議が継続している状況である。これにより、関係機関との連携体制構築に向けた基盤が形成された。

<学会・講演による報告>

1) 山村修. 新潟大学歯学部×福井大学医学部、フレイル研究から考える予防戦略. 日本補綴歯科学会関越支部学術大会・総会. 令和7年11月30日 (高崎市)

2) 山村修. 我が国の高齢者の現状 サルコペニア、フレイルに関する知見を活用した地域での事業展開. JICA 福井県事業フォローアップセミナー. 令和8年3月7日 (Thailand)

当初計画から予算の変更が生じたものの、検診および社会福祉施設をフィールドとした、多職種連携教育 (IPE) を十分に実践することができた。医療・介護・福祉分野の多職種が現場を基盤として連携を学ぶ実践的な教育機会を創出するとともに、医学生と医療スタッフが意見交換や学習を行う時間を十分に確保することができた。また、社会福祉施設においては、利用者一人ひとりの障害の程度や状態に応じた対応を

【様式2】

実際の現場で学ぶ機会となり、個別性に配慮した支援のあり方を理解するうえでも貴重な実践経験となった。これらの取り組みにより、教育的観点からも大変有意義な成果を得ることができた。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

次年度は、これまでに導入した個別調理システムの効果について再評価を行う。2024年8月には本事業に関連する研究成果を *Journal of Nutritional Science and Vitaminology* 70(4) 352-358 にて論文公開しており、本活動が「食」を活かした先進的な取り組みおよび研究として実績を有していることから、「食」を活かしたまちづくりを推進する杉田玄白賞への応募を行う。これにより、本事業の社会的価値を広く発信するとともに、外部からの評価を得ることで社会的インパクトを高め、活動の普及・発展につなげていく。さらに、i-DISH 株式会社による個別調理システム導入の拡大により拠点整備が進めば、栄養士が所属していない施設においても食事療法を継続的に提供できる体制の構築が期待される。これにより、患者のみならず独居高齢者への食事提供にも活用し、地域住民の栄養バランスの改善、健康寿命の延伸および再入院患者の減少を目標とした取り組みを継続的に推進していく。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	美浜町におけるはあとぴあ内のこどもと高齢者のためのあそび場の設計に関する研究		
代表者名	西本雅人	代表者所属・役職	建築・都市環境工学科・准教授
配分額（円）	440,000 円		

(1) 期間
2025年6月1日～2026年12月28日
(2) プロジェクトの目的
<p>本プロジェクトの目的は美浜町における全天候型あそび場施設の実施設案を作成するために行うことである。美浜町では子育て世代のあそび場に対するニーズに応えるため町内にこどものあそび場を整備することを検討している。今回の遊び場の整備において、高齢者も利用する「はあとぴあ」という福祉施設内のホールに遊び場を整備することから高齢者側の利用を阻害にしないことが必要であった。そのため、関係課との協議、整備範囲の確定、実施設計、こども、高齢者の意見の抽出を行った。</p>
(3) プロジェクトの実施内容
<p>(別紙参照) 今年度の活動をまとめて、美浜町に提出した報告書を添付いたします。</p>

(4) 得られた成果

①こどもワークショップから得られた成果

こどもたちは可動遊具がある施設で育った経験があり、本遊具整備でもこどもたちが動かすことができる大型の積み木があると遊びが発展しやすいこと。

可動である分、崩れる危険性があるので高齢者にぶつからない南側のエリアに配置した方がよいこと。

どのワークでも囲んだ場所で遊びが発生していた。そのため、本遊具でも囲われた箇所は遊びを誘発するために必要であると考えているが、同時に視認性の確保も重要である。特にはあとぴあの受付カウンターからの視認性が確保できるように、囲ったとしても部分的に開口部をとることを検討し、模型などで職員と確認を行うこと。

②高齢者ワークショップから得られた成果

高齢者からは安全性の意見がよく出された。こどもの飛び降りの対策も行う必要がある。下にウレタンマットを敷き、飛び降りをしない注意喚起もサイン計画などで行う。また、上部に手がかりとなるものを無くして、上がりにくくすることも検討する。そして、上に登れる段数を何段までとするかは職員とも十分に話し合い検討する。

③その他の成果

整備範囲の確定できた。はあとぴあ内で整備するにあたって健康診断を阻害しないことが条件であった。今回、健康診断のされ方を把握して、阻害しないことを協議して、整備範囲を決定した。

実施設計の設計書を提出した。設計案をもとに工事費用の概算を行った。

全国への遊び場へのアンケート調査は集計を完了し、協力していただいた施設に向けて報告書を作成した。今後、そのデータを分析して、遊び場の規模による必要設備の検討を行う。

(5) 今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が(1)または(2)の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。

A : あそび場整備の予算の確保

美浜町の2026年度の予算として、3,000万円ほどのあそび場整備のための予算を申請した。1月5日、15日に町長へ担当課が説明を行った。前向きな意見が出された一方で、全ての木材を美浜町産材にしたいとの要望も出された。もし、予算の内示が出た場合は、材料の調達や実施設計の修正を行う予定である。

B : 美浜町との共同研究等の展望

今年度、美浜町と共同研究を締結することができた。これは遊び場整備のための実施設計のための共同研究であり、今後の使われ方、メンテナンスについても協議していき、さらなる共同研究を獲得することを目指す。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名 称	福井こんぶ Day プロジェクト ～福井の昆布文化を発信する～		
代表者名	江端 弘樹	代表者所属・役職	高等教育推進センター・特命講師 (現:周南公立大学総合教育部・教授)
配分額 (円)	400,000		

(1) 期 間
令和7年4月1日～令和8年2月28日
(2) プロジェクトの目的
<p>福井県は、全国屈指の昆布消費地(嶺北)であると同時に、世界的な昆布加工技術の拠点(嶺南)を擁する稀有な海藻食文化が定着した地域である。特に、ユネスコ無形文化遺産「和食」を支える象徴的存在であり、職人の手削り技術に依存する「おぼろ昆布」の独占的な生産基盤を有するなど、本県に深く根ざした昆布加工品は世界的な価値を有している。</p> <p>しかし、その存在があまりに日常に溶け込んでいるがゆえに、若年層を中心に昆布の生物学的特性や伝統技術の希少性に対する認識が希薄化し、文化の維持・発展が危ぶまれる「知の欠落」が喫緊の課題として浮き彫りとなった。これを受け、本プロジェクトはこの衰退の流れに歯止めをかけ、単なる消費拡大の枠組みを超えた文化継承を目指して始動した。藻類学の「専門知」を地域社会の「食・文化・エンターテインメント」の文脈へと再定義し、県民の認識を単なる食材から「郷土が誇るべき生物・文化資産」へと転換させることを目的としている。4年間の活動を通じ、県内外の多様なステークホルダーと連携しながら、子供から大人まで全世代をターゲットに、科学的エビデンスに基づきつつ五感に訴える独自のアウトリーチ手法を確立。福井の昆布文化を次世代、ひいては世界へと継承するための強固な基盤を構築することを目指した。</p>

(3) プロジェクトの実施内容

本年度はプロジェクトの総括年度として、過去3年間の蓄積を結実させ、以下の通り学内外および国際舞台において重層的な活動を展開した。

1. 次世代を担う学生主体組織の設置と育成

- 本プロジェクトの最大の特徴として、工学部等、非生物系学部の学生による福井大学公認団体 福井こんぶ応援サークル「臚・OBORO」(以下、OBORO)を設立した。
- 代表者の指導のもと、学生自らが企画・運営に携わる体制を構築したことで、一過性のイベントに留まらない、学生による自律的なアウトリーチ活動を軌道に乗せることに成功した。



図. OBORO 主要メンバー



図. OBORO が核となって開催された「福井こんぶ Day in 丸岡」の当日スタッフ

2. 在職中の重点活動:国際舞台と地域教育の融合

- **戦略的メディアアウトリーチの展開:**4月にはOBORO部長の伊藤大吾君がFBCテレビ「おじゃまっテレ ワイド&ニュース」に生出演し、学生視点での昆布文化の魅力を発信した。11月には代表者の江端が福井テレビ「なんだー?ワンダー!」に出演し、専門的知見をエンターテインメントの文脈で解説した。加えて、地元紙をはじめとする新聞各紙の積極的な活用により、活動の社会的認知度を飛躍的に高めた。



図. 番組出演の様子「おじゃまっテレ ワイド&ニュース」



図. 番組放送の様子「なんたー?ワッダー！」

- 大阪・関西万博での講演・出展(7月21日・27日): OBOROとともに「BLUE OCEAN DOME」パビリオンにて5m超の生コンブを用いた展示・講演を実施し、福井の特徴ある食文化・加工文化を発信した。国内外の来場者に「身体感覚を伴う藻類学」を提示し、主要メディアでも大きく報じられた。



図. 大阪・関西万博での様子 (白丸:OBORO 部長)

- 大学祭「暁祭」運動講演会(5月25日): 本プロジェクトがOBOROとともに実施。生コンブを用いた実演やクイズ、昆布文化の紹介を通じて若年層への直接

的な啓発を深化させた。

- 学内公開講座と「おぼろ昆布けずり体験会」(6月26日): OBORO とともに実施。参加者の1/3を留学生が占め、参加者らによる多言語でのSNS発信を通じて、福井の文化が国際的な資産として語り継がれる契機を創出した。



図. 公開講座チラシ、おぼろ昆布削り体験会チラシ

3. 退職後の協力継続によるプロジェクトの完遂

- 代表者の江端は2025年11月末に福井大学を退職したが、地域への責任と本事業の集大成を完遂すべく、以下について退職後も無償での継続協力を実施した。実施組織の枠を超えた協力体制により、当初の計画を大きく上回る成果を得るに至った。
- 12月以降のマスコミ対応: 11月のテレビ放送後の広範な反響への対応や、追加取材等の広報活動を完遂した。
- 日本藻類学会第50回大会(2026年3月21日)対応: OBOROの学生(伊藤大悟・田中琉聖ほか)らとの連名で「地域昆布文化を活かした藻類学アウトリーチ: 学生主体の『福井こんぶDay』4年間の成果」と題した総括発表を行った。発表において本プロジェクト予算への謝意を示した。

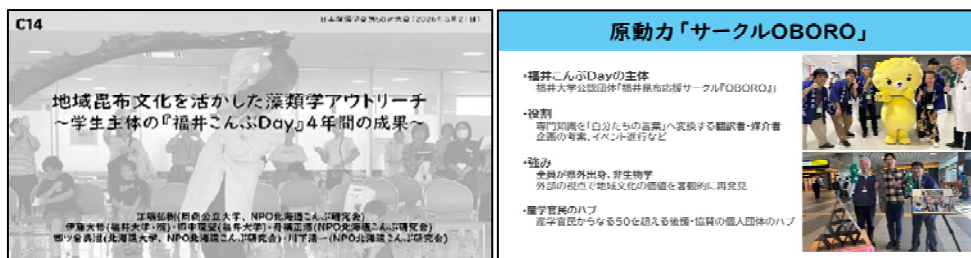


図. 日本藻類学会口頭発表スライド(抜粋)

(4) 得られた成果

1. 学生組織「OBORO」の設立と学内活動の定着

- 非生物系学部の学生による OBORO を設立し、学内の公式な地域貢献活動として定着させた。学生自らが企画・運営の主体となる組織体制を構築したことで、持続的なアウトリーチ活動を軌道に乗せ、福井大学のプレゼンス向上に大きく寄与した。

2. 圧倒的なメディア露出と社会波及実績

- 福井県 内で大規模イベントを開催していない本年度においても全国紙を含めた報道は 7 回を数えた。これにより、大学の高度な教育・研究活動が「地域に根ざした先進的な取り組み」として広く社会に浸透した。「福井こんぶ Day」関連、OBORO および関連する個人への取材・報道は 4 年間で累計 39 件に及び、学術活動の社会実装モデルとして極めて高い波及実践を残した。



図. 新聞報道事例

3. 「文化の翻訳者」としての次世代教育モデルの確立

- 学生が専門家と一般市民の間に立ち、難解な専門知を市民の日常生活に即した言葉で噛み砕いて伝える「文化の翻訳者」としての育成モデルを確立し、その有効性を実証した。
- 実演やメディア出演等の実践を通じ、高度なコミュニケーション能力と社会実装への意識を習得させた。

4. 日本藻類学会第 50 回大会における成果とモデルの評価

- 2026 年 3 月 21 日の学会にて、4 年間の全活動を体系化した総括発表を行った。
- 特に、福井県嶺南地域の課題解決のために構築した社会実装モデルを提示し、他学研究者から「専門知を地域文化と融合させた先駆的なモデル」として高い評価を得た。

5. 「情報の出しっぱなし」からの脱却とメディアミックスの実現

- 代表者のナホトカ号事故調査(1997 年)以来、30 年近くにおよぶ福井県へのコミットメントを基盤に、テレビ・ラジオ・新聞各社と連携した戦略を展開した。
- 市民に深く届く双方向的なコミュニケーションを実現し、地域住民が自らの文化を科学的視点で再発見する「知の共有」を達成した。

(5) 今後の展開

1. 福井大学の「キラークンテンツ」としての定着

- 本プロジェクトで構築した「福井の昆布文化×藻類学」のアウトリーチ手法、およびこれを支える OBORO の活動は、他大学にはない福井大学が誇るべき独自の強みである。本事業を一過性のものとせず、今後は年間 2 回程度の「特別公開講座」などの形で定着させ、全学横断的な地域貢献事業として継続・発展させることを強く提言する。

2. 科学で地域文化を支える拠点の形成

- 活動を持続させるために、福井県内のマスメディアに向けて定期的に情報発信を行ってきた。その結果、嶺南の文化に関する理解者を、県内マスメディア内に一定数生み出すことに成功している。
- 特長的な食文化や職人技術をはじめとする加工文化の継承という深刻な課題に対し、本学が培った本事業の「エンタメ系アウトリーチ」と「翻訳者モデル」は極めて有効な処方箋となり得る。整備された資産と学生たちの熱量を活用し続けることで、福井大学が「地域文化を科学的視点守り育てる拠点」としての地位を揺るぎないものにできると確信している。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地区における学校拠点を中心とした教育支援活動		
代表者名	中森 一郎	代表者所属・役職	総合教職開発本部
配分額（円）	398,650 円		

(1) 期間
令和7年4月2日から令和8年2月27日まで
(2) プロジェクトの目的
嶺南教育事務所や嶺南地区の連携校等と連携し、嶺南地区における協働研究など教育活動の推進及び課題解決学習や探究学習の先進的取組としての発信を進め、児童生徒だけでなく嶺南地区の活性化に資することを目的とする。
(3) プロジェクトの実施内容
<p>嶺南地域の各学校や嶺南教育事務所と連合教職開発研究科が連携協働し、嶺南地区の学校拠点での実践研究（学校現場での長期インターンシップ・実習）及び学校での課題研究の支援を実施することにより、地域の教育力向上に取り組んだ。嶺南地域の連携校には現職教員が院生として在籍（令和6年度：6校・9名）しており、院生と連合教職開発研究科教員及びコーディネーターリサーチャーが中心となって各学校での実践研究や課題研究を推進した。</p> <p>敦賀ラウンドテーブルでは「協働探究ラウンドテーブル敦賀 2025 直観的判断力が切り開く世界とは？」というテーマで敦賀高校、美方高校の生徒、教員を中心に県外の高校生も参加して日本航空株式会社機長 片桐 潔志 氏によるの講演をもとに、直観的判断力についてグループ対話を行なった。</p>

【様式2】

さらに、その成果を嶺南教育事務所や嶺南地区各市町教育委員会と連携し学校を超えての展開を図り、さらに連合教職開発研究科が開催する実践研究福井ラウンドテーブルにおいて全国に発信した。

・p4cにおける児童生徒の対話をICレコーダーで記録し、記録をもとに振り返ることを通して、子どもたちの思考の深まりやそれを引き出す問いのあり方等について教員の授業研究に役立てることができた。

(4) 得られた成果

・学生が嶺南地区の教育現場と関わることで、嶺南地区の魅力を知り、教員志望者の少ない嶺南地域の教員志望者の増加に繋がる支援ができた。

・探究的なふるさと学習を進め出している嶺南地区の教育の理解と支援を進め、先進地区として発信した。

・嶺南地区で行われている実践研究や課題研究を推進し、また学校及び教職員間の交流を促進することで、嶺南地区の教育力の向上に寄与した。

・地域に根差した課題研究は、課題研究そのものに加え、中高生が大人になったときに課題研究等を通して接した地域に根付くことに繋がるよう支援した。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地域中学校を中心とした探究学習推進プロジェクト		
代表者名	清川 亨	代表者所属・役職	連合教職開発研究科
配分額（円）	306,845 円		

(1) 期間
令和7年4月16日（水）～令和8年2月27日（金）
(2) プロジェクトの目的
<p>これから嶺南地域を支えていく児童生徒が探究による課題解決の経験値を増やしていくことが重要である。しかし、未だ学校では、課題解決学習といいながら、調べ学習にとどまっている学校が多い現状にある。</p> <p>そこで、本プロジェクトでは、中学校を中心に学校における探究学習の支援を行い、嶺南の子どもたちの嶺南地区の課題解決に向けた資質・能力の向上を目指すことを目的とした。</p>
(3) プロジェクトの実施内容
<p>1. カンファレンスや研修会</p> <p>探究学習の支援に当たる教員自身の探究への理解と教員自身の探究の経験を積む場として、下記のカンファレンス等を行った。</p> <p>①探究学習カンファレンス：5月7日（水）、オンライン、小中高から12名が参加。参加校としては、栗野中学校、小浜第二中学校、高浜中学校、中郷小学校、栗野小学校、梅の里小学校、西津小学校、敦賀高校、嶺南教育事務所の8校1所。</p> <p>探究学習とは何か、その基本の確認と探究学習の現状の情報共有などを行った。</p>

【様式2】

②探究学習研修会：2月9日（月）、パレア若狭、小中高・町教委から30名が参加。参加校としては、若狭町の各小中学校、おおい町の小中学校、若狭高校、嶺南教育事務所、おおい町教育委員会事務局など15校、2所

独立行政法人教職員支援機構のフェローでもある崇城大学准教授の溝上広樹氏を講師に迎え、探究における問いを鍛える活動を通して探究学習への理解を深めた。

③探究学習先進校視察：2月3日（火）、愛知県東浦町立東浦小学校、嶺南の小学校5校（大島、栗野、中郷、梅の里、西津）から各1名が参加

嶺南地区の探究の向上につながるよう、児童が主語になる学習活動の先進校の実際を視察し、その状況を5名の勤務校や嶺南地区で共有を図った。

2. 学校支援

上記1. ①の参加校を中心に嶺南地区の学校を訪問し、教員や生徒の取組みに対して様々な視点や知見の提供、改善点の指摘など、探究学習の支援を行った。なお（）内は訪問月日

①上中中学校

金曜日に行われる生徒の探究（My探究、9/26、11/21）、My探究中間発表会（12/12）、My探究発表会（2/27）において、生徒や教員への支援を実施

②栗野中学校

担当教員の支援（5/1）、生徒への講演（1・2年450名、5/12）や探究学習支援（11/19）を実施

③小浜第二中学校

探究学習状況確認や3年生探究学習最終発表会に参加し、教員に対して今後に向けたアドバイスを実施（11/28、12/29）

④高浜中学校

探究学習の状況を確認し生徒や担当教員に対して支援を実施（10/28）

⑤大島小学校

昨年度末に作成した探究学習におけるルーブリックの具体的活用について校長や探究担当教員を支援（10/28）

また、坂井市雄島との探究学習交流会を提案し、2回行われた（11/28、2/26）。

⑥栗野小学校

探究学習の状況を確認し（11/10）、教員研修会を実施（1/28）

⑦中郷小学校

探究学習の状況を確認し、教員との意見交換を実施（10/29）

⑧西津小学校

探究学習の状況を踏まえ、教員および児童に対して支援を実施（11/28）

⑨梅の里小学校

担当教員と探究学習に係る意見交換を実施（12/9）

⑩若狭高校

1年生の探究学習のテーマ決めに参加し支援を実施（11/25）

⑪敦賀高校

【様式2】

<p>担当教員との探究学習に係る意見交換を実施（7/1）</p> <p>3. 教育委員会との情報共有</p> <p>学校の探究学習の状況を理解、支援するように教育委員会等を訪問し、教育長や探究学習担当者との情報交換を行った。訪問した教育委員会等は次の通り。（）内は訪問月日</p> <p>①敦賀市教育委員会（6/2、7/1、11/19、1/8）</p> <p>②小浜市教育委員会（1/9）</p> <p>③おおい町教育委員会（1/9）</p> <p>④若狭町教育委員会（1/9）</p> <p>⑤嶺南教育事務所（4/16、5/7、12/22）</p> <p>なお、清川は、次年度、他県との探究学習交流を考えている市町、あるいは学校に対して情報共有を進めたい、また視察で得た知見の共有も図りたいと考え、生徒が主体的に探究に取り組む県外中学校の中から、今回は小規模ながら地域課題の解決に取り組んでいる沖縄県久松中学校を選定し現地視察を行った。</p>
<p>（4）得られた成果</p>
<p>教師自身の探究への理解が進み、調べ学習ではなく課題解決に向けた児童生徒の探究学習への指導力が高まり、教師と相似形である児童生徒の課題解決への資質能力の向上が見られた。また探究学習を進める過程で児童生徒の当事者意識が高まり、自己肯定感が増したり、主体的な態度が育成されたりするなどの状況が確認された。</p> <p>嶺南地区の探究学習の情報共有がわずかながらでも進み探究学習の小中高の連続性を教員が意識するようになったことで、小中間、中高間での連携を意識したいと発言する教員が出始めた。また、大島小学校と坂井市雄島小学校との探究学習交流会では、児童と教員のメタ認知が進んだ。</p>
<p>（5）今後の展開 ※支援対象プロジェクトの区分が（1）または（2）の場合は、共同研究等への展望について詳細に記載ください。</p>
<p>上中中学校は県外からも探究学習の視察に訪れるようになり、同校は探究学習のある程度の自走を始めたことから、今年度支援を行った学校から次年度は小浜第二中学校の自走に向けた支援をすることで、探究学習の拠点校となる中学校を嶺南地区に複数作りたいと考えている。また、児童生徒がどの学校種でも同じようなテーマで探究を重ねるのではなく、成長過程でつながりと深まりのある探究学習の経験を積むことができるよう小中高の連携を模索してみたい。更に、県外中学校と嶺南地区中学校の探究学習の交流により嶺南地区をメタ認知する機会の創出の可能性を探りたい。</p> <p>並行して、児童生徒の探究学習を支援する教員の実践に向けた省察の場となる教員のネットワーク作りを進め、嶺南地区の学校の探究学習を支援し、将来の嶺南地区の課題解決を実践者の育成に寄与したいと考えている。</p>

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	敦賀市民と福井大学留学生との交流事業 ～多文化共生の実現を目指して～		
代表者名	小幡浩司	代表者所属・役職	国際地域学部 教授
配分額（円）	322,000 円		

(1) 期間
令和7年4月～令和8年3月
(2) プロジェクトの目的
<p>今回のプロジェクトの目的は、異文化交流が市民の文化的多様性に対する意識改革を促進し、相互理解を深め、誰もが共生できる地域社会を構築することで、世界との繋がりをさらに深め、敦賀が国際社会とともに発展することである。</p> <p>したがって、各活動には、以下のような具体的目的を定めている。</p> <p>①留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その友好の輪を拡大すること。</p> <p>②敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること。</p> <p>③異文化交流が文化的多様性を地域のさらなる成長や発展の源泉とするまちづくりに繋がること。</p> <p>④留学生が、鉄道と海運の町・敦賀市の発展の歴史や文化を理解し、敦賀および嶺南地区の魅力を世界に発信することで、嶺南と世界を重層的なネットワークで結ぶこと。</p>
(3) プロジェクトの実施内容
<p>本プロジェクトでは、相互理解、異文化交流、そして多文化共生をテーマに、1. 米国大学生のホームステイプログラム、2. 敦賀フィールドスタディ、3. 敦賀スタディツアー、そして、4. ホームビジットプログラムと、4つの活動を実施した。</p> <p>1. 米国セント・マーチンズ大学(SMU)生のホームステイプログラム</p> <p>福井大学国際地域学部は学術交流協定校である米国セント・マーチンズ大学の日本文化スタディツアーの後半4日間を福井市と敦賀市に招致した。敦賀市では、5月26日・27日の2日間に、SMU</p>

【様式2】

生5名と教員1名が、敦賀市内視察、敦賀高等学校生徒との交流、ホームステイ、および、学校文化体験を行なった。

1) スケジュール

期間 : 令和7年5月24日(土)~5月27日(火)

受入 : SMU学生5名 引率教員1名

場所 : 福井市、福井大学、敦賀市、敦賀高等学校

予定 : 5月24日(土) 午後 福井駅到着 福井大学祭見学

5月25日(日) 終日 ホームステイプログラム (福井市)

5月26日(月) 午前 敦賀市内視察

5月26日(月) 午後 敦賀高等学校訪問、生徒との交流、クラブ活動参加

5月26日(月) 午後 ホームステイプログラム (敦賀市)

5月27日(火) 午前 敦賀高等学校教職員との交流 (正午 東京へ移動)

2) 活動内容 (敦賀市、敦賀高等学校)

①5/26 10:30-14:30 敦賀市内視察

SMU学生5名と教員1名、敦賀高等学校生徒5名(ホストファミリー)と教員2名で、敦賀の郷土料理で昼食交流会を行なった。その後、敦賀ムゼウム、敦賀気比神宮、そして気比の松原を訪問し、鉄道と海運のまち・敦賀の発展と人道の歴史、および、敦賀の文化と自然を紹介した。

②5/26 14:00-17:30 敦賀高等学校訪問

敦賀高等学校教職員との交流会の後、高校の施設見学、そしてクラブ活動を見学、伝統文化を体験した。茶道部でのお茶会、剣道部では竹刀を握って練習、柔道部では投げ技を披露し、弓道部では的を狙うなど、高校生が企画した日本の伝統文化に触れ、共に汗を流した。また、日本の学校教育の特色である課外活動(文化系・体育系クラブ活動、社会貢献活動など)の意味や重要性について紹介した。

③5/26 17:30-5/27 08:00 ホームステイプログラム

SMU生5名はそれぞれ一人ずつ敦賀高等学校生徒の家族宅に、SMU教員は敦賀高等学校職員宅に滞在し交流を深めた。なお、5月8日(日本時間08:30、太平洋標準時16:30)に、SMU生と敦賀高等学校生は、オンライン交流会(50分)を実施していたため、5/26の交流会およびホームステイプログラムはスムーズに開始することが出来た。

④5/27 08:00-11:30 敦賀高等学校生徒との交流会

SMU生と教員はそれぞれホームステイ先の敦賀高等学校生徒と職員と一緒に登校し、生徒達が企画した日本文化紹介と異文化交流会に参加した。

2. 人道の港 敦賀フィールドスタディ

海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史を学ぶ「敦賀スタディツアー」を企画することを目的とし、課題探求プロジェクトII「多文化共生の実践と研究」を受講する福井大学国際地域学部2年生5名が2グループに分かれ敦賀市でフィールドスタディを実施した。

(グループ1) 令和7年10月24日(金) 国際地域学部2年生2名

敦賀駅から敦賀港まで徒歩で移動。ユダヤ難民が辿った道を歩きながら、ユダヤ難民の当時の状況を伝える看板などで歴史を体験した。また、敦賀ムゼウムではユダヤ難民上陸の歴史とともに、ポーランド孤児救済について学び、鉄道博物館や敦賀市立博物館では敦賀の発展や日本のグローバル化の拠点としての敦賀の歴史的役割について学びを深めた。

(グループ2) 日程: 令和7年11月03日(月) 国際地域学部2年生3名

ユダヤ難民とポーランド孤児救済の常設展、および、新たに始まった企画展「テレジン収容所の若い画家たち展」を見学した。さらに、人道の港 敦賀ムゼウム リニューアルオープン5周年記念イベント『みる しる わかる ムゼウムDays!』に参加した。テレジンを語りつぐ会代表 野村路子氏

【様式2】

の講演「1万5000人のアンネフランク―絵を描くことは生きる力―」では、チェコのテレジン収容所で希望を持ち絵を描き続けた子どもたちについて学んだ。さらに、敦賀赤レンガ倉庫、敦賀鉄道博物館を視察、ユダヤ難民の足跡を辿って気比神宮を訪問した。

3. 敦賀スタディツアー

国際地域学部生と留学生の合計30名が、異文化交流を楽しみながら、地域の発展と人道の歴史について学ぶことを目的に敦賀市を訪問した。

1) 概要

日時：2025年11月15日(土) 09:00-17:30

参加者：合計30名(9カ国・地域)

留学生20名(アルゼンチン、ウガンダ、カンボジア、台湾、中国、
 Bangladesh、フィリピン、ベトナム)

国際地域学部1年生5名、国際地域学部2年生5名

予定：09:00 福井大学文京キャンパス出発(京福バス貸切)

10:15 気比神宮見学

11:00 グループ昼食会

13:00 気比の松原散策

14:00 人道の港 敦賀ムゼウム見学

15:30 敦賀市立博物館見学

16:30 敦賀出発

17:30 福井大学文京キャンパス到着・解散

2) 活動内容

①10:15-13:50 異文化交流と敦賀の文化・歴史

グループごとに気比神宮を散策し敦賀市内で昼食をとった。その後、気比の松原にバス移動し自由行動とした。学生たちは敦賀の文化と自然に触れながら、相互交流を行なった。

②14:00-16:30 敦賀の発展と人道の歴史

敦賀ムゼウムでは、ポーランド孤児およびユダヤ難民の受入れと救済など敦賀の人道の歴史について学んだ。次に、敦賀鉄道資料館と敦賀市立博物館では、シベリア鉄道の開通とウラジオストク―敦賀定期航路の開通により敦賀港が国際港になったこと。さらに、新橋―金ヶ崎(敦賀)の鉄道開通によって、東京から欧州まで切符1枚で行けるようになったことが、敦賀を国際都市へと発展させたことなどを学んだ。学生たちはボランティアガイド3名(日語2名、英語1名)との会話や質疑応答から敦賀についての知識を深めることが出来た。

4. ホームビジットプログラム

敦賀高校生徒の家庭にホストファミリーとして福井大学の留学生を受け入れていただき、伝統行事や料理作り体験、敦賀市・嶺南地域の名所案内、そしてスポーツやレクリエーションなどの活動を通して、家族と留学生が1日交流し、相互理解を深め、友情を育てていただくプログラムである。

日時：令和7年12月20日(土) 10:00-17:00

場所：敦賀市・嶺南地区(開会式 敦賀駅オルパーク、解散場所 敦賀駅)

参加者：敦賀高等学校ホストファミリー15家族

福井大学交換留学生7名、正規留学生3名(7カ国・地域：米国、インド、
台湾、中国、ベトナム、カンボジア、フィリピン)

予定：10:00 オリエンテーション(場所：敦賀駅交流施設 オルパーク)

予定・注意事項説明、ホストファミリーと留学生の紹介・集合写真

10:30 ホームビジットプログラム開始・自由行動

17:00 集合・解散(場所：敦賀駅)

オンライン交流会：

12月17日(水)と18日(木)に、敦賀高校生徒と留学生の間で事前のオンライン交流会(60分)を実施した。初対面となるので、自己紹介や当日の予定などについて話し合った。

【様式2】

(4) 得られた成果

本プロジェクトにおけるそれぞれの活動は、冒頭で述べた4つの具体的な目標を達成している。

1. 米国 SMU 生のホームステイプログラム

5月26日(月)・27日(火)に実施したホームステイプログラムの効果を確認するために、ホストファミリーを引き受けていただいた敦賀高校生5名にホームステイプログラムについてアンケート調査を行なった。回答期間は6月5日(木)～7月5日(土)とした。

①満足度 (相互理解と友好関係の構築)

まず、効果として、目的①「留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その友好の輪が拡大」していることを確認出来た。

5名全員がホストファミリーの経験は『とても楽しかった』と最高評価をつけた。さらに、4名が『次回もやりたい』と回答、今回の満足度の高さが確認出来る。生徒の一人は『本当に今までの人生の中で一番いい経験をさせていただきました。本当にありがとうございました。また今後そのようなプログラムがあれば積極的に参加したいです』と述べ、プログラム終了後も留学生とDMで連絡を取り合い、交流を継続しており、近い将来、米国に行く目標ができた、と結んでいる。また、別の生徒は『普通の友達以上に仲良くなれた気がしてすごく楽しかったし、お別れするときに泣いてくれたのがとても嬉しかったです』と述べた。他の生徒たちも同様に交流を通して相互理解と友情が育まれたことが確認出来る。

②グローバル人材育成 (コミュニケーション能力と異文化間能力)

次に目的②「敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること」が出来た。

プログラム開始前にすべてのホストファミリーが『言葉が通じるか』、『会話が成り立つのか』、『ちゃんと伝わるのか』など、コミュニケーションに不安をかかえていた。しかし、プログラム終了後はすべてのファミリーが『言葉の壁』は、あまり感じなかったと回答している。さらに、『英語で会話するという行為への不安がなくなった』や、『アメリカの先生に英語が上手と言われたので、自分の英語力にも自信ができました』など、異文化コミュニケーションのハードルが下がり、英語コミュニケーションに対する自信が芽生えていることも確認出来る。

さらに、相互理解と互いの文化に対する敬意と共感、また、文化背景の異なる人々と交流することに対する期待やポジティブな態度を確認することが出来る。一人の生徒は『外国と敦賀の文化に沢山触れることができてとても楽しく良い経験になったと感じた。今後の勉強のモチベーションにして頑張る』と述べた。他には、『日本とアメリカの文化を共有したため、異文化理解が深まったと感じた』、『他の国の文化も多く知れたことは自分の将来にとってプラスになった』、そして、『外国人と関わることは楽しいと再確認できた』と述べている。

なお、敦賀高等学校によるSMU生の受入れはHP等で紹介された。

<https://www.tonkou.ed.jp/archives/14866>

2. 人道の港 敦賀フィールドスタディ

学生に2つの課題を出した。一つは、海運と鉄道のまち・敦賀の発展と人道の歴史を学ぶ「敦賀スタディツアー」を企画すること。二つ目の課題は、「敦賀にムゼウムという施設があることにより得られる貴重な機会をどのように市民に還元できるのか。敦賀ムゼウムの存在は、市民にどのような意味を持つのか」について考察しレポートにまとめること。

①敦賀スタディツアー：学生は下記予定表を作成し、出発1週間前に参加者に配布した。本ツアーは、異文化交流、敦賀の文化と自然、敦賀の発展と人道の歴史を学ぶことを目的としている。

【様式2】

つまり、期待された効果が認められることが、確認出来た。

目的①「留学生と敦賀市民が相互交流を通して友情を築き、その輪を拡大すること」

留学生および敦賀高校生のすべてが相互交流を通して友情を築くことが出来たことを確認できた。このことは、プログラム全体に対する満足度の高さにも裏付けられている。留学生 10 名の内 9 名が『大変満足』、1 名が『満足』と回答している。同様に、敦賀高校生の満足度も高い。敦賀高校生 15 名全員が『とても楽しかった』と回答、さらに、12 名が『次回もホストファミリーをしたい』、3 名が『すこし時間をおいてやりたい』、と回答している。また、『仲を深めることができた』、『とても個人的なことまで話すことができた』、や『日本で妹が出来た』などのコメントが次々と寄せられ、プログラムを通して留学生とホストファミリーが明らかに友情を育んでいることがわかる。敦賀駅では、別れが名残惜しすぎて電車を 1 本遅らせて福井に帰るというエピソードが今回も生まれた。

目的②「敦賀高校生徒および留学生のコミュニケーション力や異文化間能力が向上し、海外に開かれた地域作りを牽引するグローバル人材へ成長すること」

敦賀高校生も留学生もプログラムが開始前に最も心配していたことはコミュニケーションであった。そもそも言葉が通じるのか？ 会話が出来るのか？ 自分のことが分かってもらえるのか？ 相手のことがわかるのか？ など。今回、コミュニケーション言語は、2 組が「英語のみ」、3 組が「ほとんど英語、すこし英語」、8 組が「英語と日本語」、1 組が「ほとんど日本語、少し英語」、最後の 1 組が「日語・英語、と外国語」であった。しかし、難しい場面がありながらも、高校生も留学生も言語・非言語コミュニケーションを駆使し、思っていることを粘り強く伝えることで、ほぼ全員が結果的に「コミュニケーションはうまくいった」「コミュニケーションはとても楽しかった」と回答している。

これは、彼らが異文化に対して先入観や偏見を持たず、敬意、オープンな心、さらに好奇心や探求心をもって異文化を理解しようと努力した結果である。異文化に対するこのような態度を持ち続けることで、学生達は異文化に対する広い知識と深い理解そして鋭い分析力を有し、やがて異文化間能力(異文化コンテクストにおいて適切かつ効果的に対応できる能力)を獲得するものと考えられる。学生達は異文化接触を通して異文化間能力を鍛えているのである。

目的③「異文化交流が文化的多様性を地域のさらなる成長や発展の源泉とするまちづくりに繋がること」

敦賀高校生のアンケートからは、異文化交流を経て、外国人と話すことの苦手意識が減りハードルが低くなったこと、留学生の母国が好きになった、相手の文化をもっと知りたい、外国人や異文化にもっと積極的に関わりたい、など、外国人との対話や外国文化に対する関心や好奇心にポジティブな変化があったという声が聞かれる。

さらに、アンケートから、文化的多様性に対する学生達の意識が、自分が住む地域の外国人住民との交流に向かっていることが確認出来る。このような学生達こそが、外国人にとって開かれたまちづくりを推進できる人材である。また、かれらの存在は、敦賀への外国人からなる交流人口および関係人口を拡大し、敦賀および嶺南地区の活性化に貢献すると考える。

目的④「留学生が敦賀の発展と人道の歴史や文化を学び、その魅力を世界に発信すること。」

留学生へのアンケートを通して、留学生はホストファミリーと一緒に、資料館、博物館、観光名所、や商業施設を訪問し、敦賀の文化や伝統、自然や観光地、そして敦賀の発展と人道の歴史について深く学べたことが確認出来ている。留学生には、ホームビジットプログラムの参加条件として、敦賀の魅力を SNS で母国の家族や友人に伝えることとしていたため、少なくとも 7 カ国・地域に敦賀についての情報が拡散されている。また、プログラム参加者の多くが日本人や留学生の友人を伴って敦賀を再び訪れている。また参加者の中には、ホームビジットの経験や敦賀での学びをレポートにまとめ原籍教育機関に提出している。このような世界との繋がりが、今後の敦賀の発展に寄与すると考える。

【様式2】

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

異文化交流イベントの継続的实施は多文化共生の実現に貢献する。実証研究を通して、その成果を広く市民に周知することが望ましい。

また、筆者は2026年4月にリトアニアのカウナス市を訪問する。目的の一つは、リトアニアと敦賀の若者の交流の可能性を模索することであり、現地ではヴィタウタス・マグヌス大学教育学部教員、学校関係者、そして杉原ハウス関係者との協議を予定している。敦賀のグローバル人材育成へに貢献できることを期待する

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	小浜市営住宅活用提案プロジェクト		
代表者名	菊地 吉信	代表者所属・役職	工学系部門・准教授
配分額（円）	450,000 円		

(1) 期間
令和7年5月～令和8年3月
(2) プロジェクトの目的
<p>全国の公営住宅には高経年の住棟が多く、入居者の高齢化が進むとともに空室が発生しており、空室の有効利用と地域コミュニティの活性化が課題となっている。また小浜市では、既成市街地内に生活サービス機能がコンパクトに集積しているにもかかわらず市街地人口が減少している。そこで本プロジェクトは以下3点を目的とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 小浜市営住宅の空室活用プランの提案を行う 2. 市営住宅団地コミュニティの持続に必要な取組の提案を行う 3. 地域生活拠点としての市営住宅団地整備方針の提案を行う
(3) プロジェクトの実施内容
<p>協働先である小浜市営繕管財課と協議しつつ、市営後瀬団地（小浜市後瀬町2-3）を主な対象として以下の事柄を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・団地内空き住戸の実測調査および活用プラン作成 ・住民アンケート ・関連組織ヒアリング ・他地域の公営住宅活用事例調査 ・協働先との定期的な打合せ（全3回）

【様式2】

(4) 得られた成果

取り組んだ内容を成果報告書にまとめ、小浜市に提出した。結論の概要は以下のようである。

- ・後瀬団地内には住民間交流に対する一定の意欲が存在する。とくに高齢化が進む団地において徒歩圏内で気軽に参加できる交流拠点への潜在的需要は小さくない。
- ・先行事例調査より、空き住戸や集会所を活用した取組が実際に展開されていることが確認できた。その一方で、担い手不足や利用者数が想定を下回るといった課題もある。そのため、活用前の丁寧な需要予測、利用開始後のアンケートやヒアリングによる効果検証、検証結果を踏まえた継続的な改善、が重要となる。
- ・上層階空き住戸の活用については、利用者像を明確化した戦略的活用が有効と考えられ、大学学生寮の不足や企業の社宅的利用など、一定期間の居住ニーズに対し、空き住戸を柔軟に提供できる仕組みを構築することが望ましい。
- ・集会所については、現状では鍵の管理や運営の担い手不足により十分に活用されていないが、民生委員や自治会、関係機関などと連携し、運営主体を明確にすることができれば、団地内の賑わい創出や見守り機能の強化につながる可能性が高い。
- ・団地の持続的な活力を維持するためには、若年層の受け入れによる世代バランスの改善、高齢者の交流拠点の確保、見守り体制の強化、といった複合的な視点からの活用が求められる。

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

他地域との比較研究に発展させたい。

【様式2】

令和7年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	福井梅の収量向上のための動画像・点群処理・骨格化を用いた樹構造解析と収量調査		
代表者名	築地原 里樹	代表者所属・役職	講師
配分額（円）	450,000		

(1) 期間
2025年5月2日から2026年2月28日
(2) プロジェクトの目的
<p>農林水産省の統計によると福井県の梅の単位面積あたりの収量が他県に比べ相対的に少ない傾向があり，その原因特定と就農人口減に備えた農業従事者間の技術継承が必要となる．技術継承の元になる従事者本人の知見は定量化されることは少なく，さらに知見を基にした剪定が起す効果に対する定量的データも乏しく，暗黙知として技術が受け継がれている．本研究では高画像解像度・高時間解像度のカメラを用いてウメの樹を計測し，幹や枝の構造情報を付与した収量を分析することで，園芸の暗黙知を併せた樹構造評価を目的とする．</p>
(3) プロジェクトの実施内容

【様式 2】

具体的には、以下の2つに取り組んだ。A) アクションカメラやドローンで撮影した動画を用いウメの樹の三次元点群を生成し、点群に対して骨格化することで幹や枝の構造情報をグラフとして抽出した。抽出したグラフ、各節点の三次元位置や節点間の幹・枝に当たる点群(図1)を組み合わせ、ウメの樹の三次元形状を計算した。また、B) ウメの収穫作業時に樹ごとの総重量を、樹の中の主枝・亜主枝のセットごとに計測することで、研究者や農業従事者が暗黙知として持つ元気度合いを数量化した。

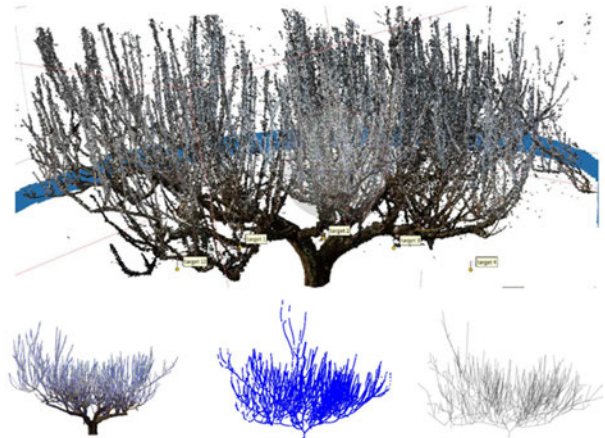


図1: ウメの樹の三次元点群と骨格化の例

福井県農業試験場の若狭・美浜地区の園芸研究センターの圃場内において生育するウメの樹を対象に動画像計測を実施し、収穫作業を手伝う中で3本の主枝ごとの重量を分けて計測した。研究実施や収穫作業には本研究室所属の学部4年生1人と修士1年生2人と共同で進め、工学を用いた農業・園芸の課題解決を体験させた。

(4) 得られた成果

骨格化アルゴリズムを適用しウメの樹の三次元点群に適用し、図2の木グラフを得た。ウメの樹の幹を検出し、幹のエッジに接続される枝を主枝と判定し、その先に接続される枝を主枝に属する枝と判定した。各主枝に属する枝の点群から経路数、本数、平均半径と長さを計算し、各主枝のパラメータとした。6月18日に園芸研究センターで収穫実験を行い、調査樹の各主枝の収穫量を計測した。各主枝のパラメータと収穫量の相関を計算し、本数や経路数は0.9以上を満たすことを確認できた。収穫量予測に十分利用可能であることが確認できた。

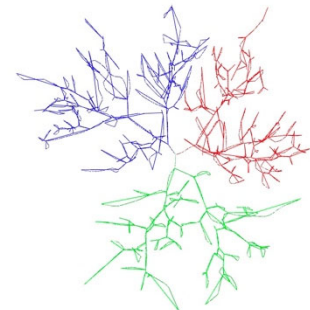


図2: 主枝分けした木グラフ

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

三次元解析により樹の計測を自動化することで、従来の手動計測をAIに代替できる。福井県嶺南若狭町におけるウメの収穫量推定や若年層の指導に用いることのできるソフトウェア開発が見込める。また、農業・園芸に対する工学・情報技術の適用に関する外部資金は、農研機構などの研究機関から競争的資金として公募が増えている状況で、本研究も農業ロボティクスとして応募可能である。本予算を使い農工連携の実績を積み、申請書の信憑性を高めることで、外部資金獲得の可能性を少しでも高める。

【様式 2】

令和 7 年度プロジェクト報告書

プロジェクトの概要

名称	嶺南地域における未活用食資源のリデザイン		
代表者名	石原周太郎	代表者所属・ 役職	地域創生推進本部附属創生人材センター・特命助教
配分額（円）	450,000 円		

(1) 期間
令和 7 年 4 月 28 日 - 令和 8 年 2 月 28 日
(2) プロジェクトの目的
<p>嶺南地域は「御食国」と呼ばれる長い歴史に裏付けられた豊かな食資源と文化がある。一方で、豊かな食資源を支える 1 次産業従事者の高齢化や担い手不足などにより持続可能性が危ぶまれている。また、環境問題や気候変動による作物の不作・不漁、獣害被害なども深刻化しており、これまで以上に資源の有効活用の必要性が問われている。そこで、これまで活用されていなかった食に関する資源に対して、リデザイン（再構築）を行うことで既存の課題を解決するとともに、嶺南地域における食文化に係る新たな価値を創造することで、地域の持続可能性に貢献することを目的とする。</p>
(3) プロジェクトの実施内容
<p>これまで活用されていなかった食に関する資源をリデザインする対象として、敦賀市の工務店・大幸ハウジングがオーナーである中心市街地の空きビルを選定した。現在、害獣駆除された 9 割が焼却処分されている現状を変えようと、ジビエにして流通を目指す起業家とともに、地元のおばあちゃんがジビエや伝統野菜を用いたお惣菜を製造・販売する店舗にリノベーションした。建築・都市環境工学科の学生 4 名とともに地域資源の魅力や未活用資源の新しい価値を発見し、それを活かした店舗の内装デ</p>

【様式 2】

ザインの提案、未活用資材を用いた内装工事の施工、お惣菜新商品の開発を行なった。その結果として、11/29に kehi foods を開店させた。

具体的には、以下の通り活動を進めた。

① 食に関する未活用資源に対する取り組み

- ・未活用資源であるジビエを販売する店舗としてどのようなデザインを行うべきか、学生が内装デザインの提案を行った。その結果として、未活用建材の有効活用を図るべきとの方向性が採用され、オーナーの資材倉庫を見学し、どのような半端材やデッドストック品があるのか調査した。
- ・デッドストック品のタイルや半端材をランダムに組み合わせることによって学生による新しいデザインを内装に取り入れた。
- ・未活用の廃棄食材（卵の殻）を釉薬にアップサイクルし、オリジナルタイルを製作した。
- ・ジビエや伝統食材を用いたお惣菜の新商品開発に取り組んだ。

② 地域の持続可能性に貢献する取り組み

- ・学生が地域に入り活動を行うことで、まちづくり活動の担い手となった。
- ・内装設計に留まらず、街の居場所としての店舗デザインの提案を行った。
- ・職人やお惣菜を作るおばあちゃんとの打ち合わせを通じ、学生が地域や現場の声を聞くことのできる機会を設けた。
- ・大学では学べない実際の建築施工を、職人の監督指導のもと 8/28・29 に合宿形式で行った。
- ・結果として本活動が終了したのちも、敦賀のまちづくりに関われる人脈と関わり合いを作ることができた。

(4) 得られた成果

中心市街地の空きビルをリノベーションし、ジビエや伝統野菜を用いたお惣菜屋さんとして開店させることができた。内装にはデザインだけではなく、施工も学生と一緒に携ることができ、大学内では学ぶことができない施工経験を提供することができた。さらに、未活用食資源を建材としてアップサイクルする取り組みを行うことで、本来であれば捨てられるだけのゴミに対して新しい価値を創造することができた。

(参考) Instagram <https://www.instagram.com/kehifoods20251129/>

(5) 今後の展開 ※今後、共同研究等への発展が見込める場合は、展望について詳細に記載ください。

kehi foods との関係は今後も継続していく予定である。ビルのオーナーである大幸ハウジングからは、他にも中心市街地で空きビル活用の意向があることを伺っており、次年度以降も学生とともにリノベーションを軸とした活動を展開する予定である。

創造力、実践力。

国立大学法人



福井大学

UNIVERSITY OF FUKUI